

# 有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度 自 平成22年4月1日

(第100期) 至 平成23年3月31日

日本タングステン株式会社

(E01907)

第100期（自平成22年4月1日 至平成23年3月31日）

# 有価証券報告書

- 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書に添付された監査報告書及び上記の有価証券報告書と併せて提出した内部統制報告書・確認書を末尾に綴じ込んでおります。

日本タングステン株式会社

# 目 次

	頁
第100期 有価証券報告書	
【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【沿革】	4
3 【事業の内容】	5
4 【関係会社の状況】	7
5 【従業員の状況】	9
第2 【事業の状況】	10
1 【業績等の概要】	10
2 【生産、受注及び販売の状況】	12
3 【対処すべき課題】	13
4 【事業等のリスク】	19
5 【経営上の重要な契約等】	20
6 【研究開発活動】	20
7 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	21
第3 【設備の状況】	23
1 【設備投資等の概要】	23
2 【主要な設備の状況】	23
3 【設備の新設、除却等の計画】	24
第4 【提出会社の状況】	25
1 【株式等の状況】	25
2 【自己株式の取得等の状況】	36
3 【配当政策】	37
4 【株価の推移】	37
5 【役員の状況】	38
6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	40
第5 【経理の状況】	48
1 【連結財務諸表等】	49
2 【財務諸表等】	99
第6 【提出会社の株式事務の概要】	128
第7 【提出会社の参考情報】	129
1 【提出会社の親会社等の情報】	129
2 【その他の参考情報】	129
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	130
監査報告書	
内部統制報告書	
確認書	

## 【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 福岡財務支局長

【提出日】 平成23年6月28日

【事業年度】 第100期(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

【会社名】 日本タングステン株式会社

【英訳名】 Nippon Tungsten Co., Ltd.

【代表者の役職氏名】 取締役社長 馬場 信哉

【本店の所在の場所】 福岡市博多区美野島一丁目2番8号

【電話番号】 福岡(092)415-5500(代表)

【事務連絡者氏名】 取締役業務本部長兼経理部長 大島 正信

【最寄りの連絡場所】 福岡市博多区美野島一丁目2番8号

【電話番号】 福岡(092)415-5500(代表)

【事務連絡者氏名】 取締役業務本部長兼経理部長 大島 正信

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所  
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)  
証券会員制法人福岡証券取引所  
(福岡市中央区天神二丁目14番2号)

# 第一部 【企業情報】

## 第1 【企業の概況】

### 1 【主要な経営指標等の推移】

#### (1) 連結経営指標等

回次	第96期	第97期	第98期	第99期	第100期
決算年月	平成19年3月	平成20年3月	平成21年3月	平成22年3月	平成23年3月
売上高 (百万円)	12,904	13,120	10,261	8,705	11,806
経常利益または経常損失 (△) (百万円)	1,172	914	△331	△305	242
当期純利益または当期純損失 (△) (百万円)	701	616	△1,551	△289	351
包括利益 (百万円)	—	—	—	—	216
純資産額 (百万円)	9,815	9,861	7,585	7,508	8,012
総資産額 (百万円)	20,218	18,979	15,700	15,783	16,229
1株当たり純資産額 (円)	392.52	397.94	305.52	306.00	313.89
1株当たり当期純利益金額又は当期純損失金額 (△) (円)	27.84	24.71	△62.70	△11.71	14.35
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 (円)	—	24.66	—	—	14.29
自己資本比率 (%)	48.5	51.9	48.1	47.4	47.4
自己資本利益率 (%)	7.3	6.3	△17.8	△3.9	4.6
株価収益率 (倍)	12.4	9.0	—	—	18.3
営業活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	841	968	942	683	842
投資活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	△536	△606	△495	△209	△484
財務活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	△66	△389	△23	△61	△602
現金及び現金同等物の期末残高 (百万円)	1,919	1,876	2,304	2,722	2,459
従業員数 [外、平均臨時雇用者数] (人)	541 [23]	534 [33]	511 [42]	496 [59]	977 [73]

(注) 1 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2 第96期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式がないため記載しておりません。また、第98期、第99期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式は存在しますが1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。

3 第98期、第99期の株価収益率については、1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。

4 従業員数は、就業人員数を示しております。

## (2) 提出会社の経営指標等

回次	第96期	第97期	第98期	第99期	第100期
決算年月	平成19年 3 月	平成20年 3 月	平成21年 3 月	平成22年 3 月	平成23年 3 月
売上高 (百万円)	12,363	12,422	9,637	8,354	9,672
経常利益または経常損失 (△) (百万円)	1,074	733	△375	△205	296
当期純利益または当期純損失 (△) (百万円)	598	428	△1,568	△237	366
資本金 (百万円)	2,509	2,509	2,509	2,509	2,509
発行済株式総数 (株)	27,777,600	27,777,600	25,777,600	25,777,600	25,777,600
純資産額 (百万円)	9,039	8,852	6,794	6,732	7,001
総資産額 (百万円)	19,353	17,863	14,820	14,914	14,641
1株当たり純資産額 (円)	361.48	357.16	273.51	274.25	284.94
1株当たり配当額 (うち1株当たり中間配当額) (円)	7.00 (3.00)	7.00 (3.50)	3.00 (3.00)	— (—)	3.50 (1.50)
1株当たり当期純利益金額又は当期純損失金額 (△) (円)	23.76	17.18	△63.39	△9.59	14.95
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 (円)	—	17.15	—	—	14.88
自己資本比率 (%)	46.7	49.5	45.6	45.0	47.7
自己資本利益率 (%)	6.7	4.8	△20.1	△3.5	5.3
株価収益率 (倍)	14.6	12.9	—	—	17.6
配当性向 (%)	29.5	40.7	—	—	23.4
従業員数 [外、平均臨時雇用者数] (人)	478 [6]	470 [13]	447 [19]	430 [31]	397 [43]

(注) 1 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2 第96期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式がないため記載しておりません。また、第98期、第99期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式は存在しますが1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。

3 第98期、第99期の株価収益率については、1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。

4 第98期の配当性向については、1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。また、第99期の配当性向については、1株当たり当期純損失であり、配当を行っていないため記載しておりません。

5 従業員数は、就業人員数を示しております。

## 2 【沿革】

年月	事項
昭和6年4月	佐賀市に日本タングステン合名会社設立、住吉工場(福岡市住吉)を開設シタングステンの製造、販売を開始
昭和6年7月	東京出張所開設(現東京支店)
昭和7年3月	大阪出張所開設(現大阪支店)
昭和7年9月	株式会社に改組、同時に東京電気株式会社(現株式会社東芝)の傘下に入る
昭和7年11月	本社を福岡市住吉に移転
昭和16年1月	昭和冶金株式会社を吸収合併
昭和23年7月	独占禁止法施行により東京芝浦電気株式会社(現株式会社東芝)が保有する当社株式を持株会社整理委員会に譲渡
昭和26年4月	持株会社整理委員会より上記株式を公開
昭和31年4月	名古屋営業所開設(現名古屋支店)
昭和34年5月	福岡支店開設
昭和35年11月	塩原工場(福岡市塩原)開設
昭和36年10月	株式を東京証券取引所市場第二部に上場
昭和37年1月	株式を福岡証券取引所市場に上場
昭和38年6月	塩原工場完成と共に本社を当工場内に移転、本社工場となる
昭和38年10月	住吉工場を本社工場に移転
昭和41年9月	株式会社昭和電気接点工業所へ資本参加(連結子会社)
昭和45年2月	飯塚工場(福岡県飯塚市)開設
昭和50年7月	宇美研究所(福岡県宇美町)開設(現宇美工場)
昭和51年7月	工務部門を分離し、株式会社福岡機器製作所を設立(連結子会社)
昭和54年4月	タイ国に合弁会社、サハビリヤニッタン株式会社を設立(持分法適用関連会社)
平成5年8月	中国に合弁会社、四平日本タングステン有限公司を設立(持分法適用関連会社)
平成5年11月	本社を所在地(福岡市博多区)に移転、本社工場を福岡工場と改称
平成7年10月	タイ国に合弁会社、SVニッタンプレジジョン株式会社を設立(持分法適用関連会社)
平成8年9月	基山工場(佐賀県基山町)開設、福岡工場及び宇美工場の一部を移転
平成12年3月	株式会社エヌ・ティーサービス株式取得(連結子会社)
平成12年9月	中国に合弁会社、九江日本タングステン有限公司を設立(持分法適用関連会社)
平成15年6月	基山工場、飯塚工場、宇美工場をQMS製造本部として、ISO9001:2000認証取得
平成17年7月	中国に合弁会社、上海電科電工材料有限公司を設立(持分法適用関連会社)
平成17年12月	サハビリヤニッタン株式会社とSVニッタンプレジジョン株式会社が合併しSVニッタン株式会社となる(持分法適用関連会社)
平成18年1月	上海三義精密模具有限公司に出資し関連会社となる(持分法適用関連会社)
平成18年11月	中国に子会社、恩悌(上海)商貿有限公司を設立(連結子会社)
平成21年11月	中国に子会社、恩悌(香港)有限公司を設立(連結子会社)
平成21年12月	米国に子会社、NIPPON TUNGSTEN USA, INC. を設立(連結子会社)
平成22年4月	上海電科電工材料有限公司を連結子会社とする
平成22年8月	上海三義精密模具有限公司を連結子会社とする
平成23年3月	中国に合弁会社、四平恩悌タングステン高技術材料有限公司を設立(連結子会社)

(注) 恩悌(香港)有限公司は、恩悌(上海)商貿有限公司100%出資の子会社であり、当社は間接所有となります。

### 3 【事業の内容】

当社グループは、当社、連結子会社9社及び持分法適用関連会社3社により構成され、粉末冶金事業を主たる事業としております。

当社グループの事業概要は次のとおりであります。

#### (粉末冶金)

タングステン及びモリブデン線・棒・板、電気接点、電極、磁気ヘッド基板、超精密加工品、半導体・液晶関連機械部品、NTダイカッター、切削工具、耐摩耐食部品、機械部品、遮蔽材等を製造販売しております。

当社及び関係会社（製造販売）

#### < 関係会社 >

(株) 昭和電気接点工業所	(連結子会社)
恩悌（上海）商貿有限公司	(中国、連結子会社)
上海電科電工材料有限公司	(中国、連結子会社)
四平恩悌タングステン高技術材料有限公司	(中国、連結子会社)
NIPPON TUNGSTEN USA, INC.	(米国、連結子会社)
恩悌（香港）有限公司	(中国、連結子会社)
S V ニッタン（株）	(タイ国、持分法適用関連会社)
四平日本タングステン有限公司	(中国、持分法適用関連会社)
九江日本タングステン有限公司	(中国、持分法適用関連会社)

#### (その他)

産業用機械装置等の製造販売及び不動産管理、保険代理、商品販売などを行っております。

当社（サービス）及び関係会社（製造販売、サービス）

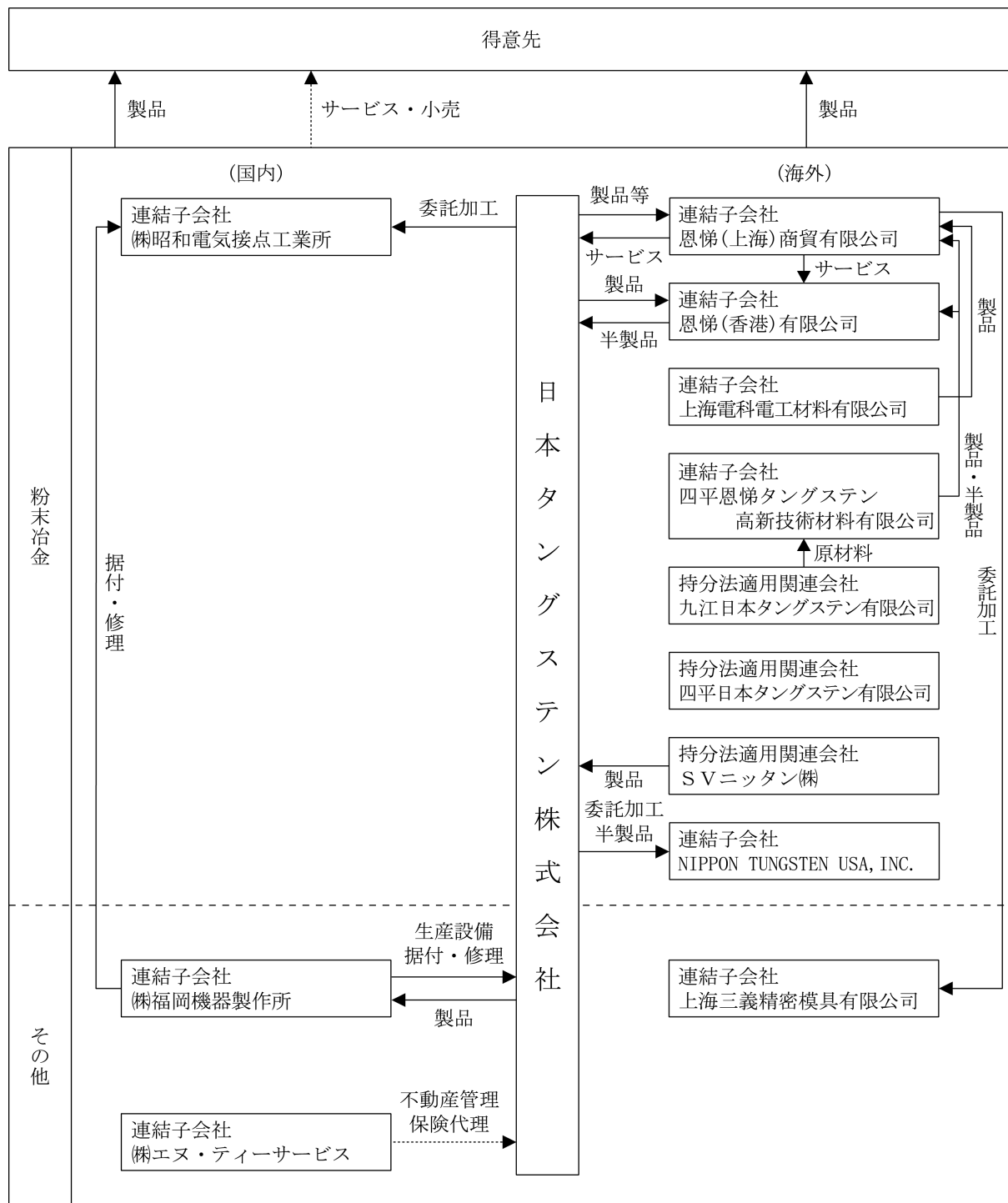
#### < 関係会社 >

(株) 福岡機器製作所	(連結子会社)
(株) エヌ・ティーサービス	(連結子会社)
上海三義精密模具有限公司	(中国、連結子会社)

- (注) 1 持分法適用関連会社であった上海電科電工材料有限公司は、平成22年4月に連結子会社となりました。
- 2 持分法適用関連会社であった上海三義精密模具有限公司是、平成22年8月に連結子会社となりました。
- 3 四平恩悌タングステン高技術材料有限公司は、平成23年3月に新たに連結子会社となりました。
- 4 恩悌（香港）有限公司は、恩悌（上海）商貿有限公司100%出資の子会社であり、当社は間接所有となります。



事業の系統図は次のとおりであります。



——▶ 製品    .....▶ サービス・小売

- (注) 1 持分法適用関連会社である九江日本タングステン有限公司はすべて内部取引によるものであり、外部との取引はありません。
- 2 得意先へのサービス・小売の取引は、日本タングステン株式会社及び連結子会社 株式会社エヌ・ティーサービスが行っております。
- 3 持分法適用関連会社であった上海電科電工材料有限公司及び上海三義精密模具有限公司は、平成22年4月及び平成22年8月にそれぞれ連結子会社となりました。
- 4 四平恩悌タングステン高新技術材料有限公司は、平成23年3月に新たに連結子会社となりました。

#### 4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は 出資金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の所有 (又は被所有) 割合(%)	関係内容
(連結子会社) 株昭和電気接点工業所	福岡県飯塚市	10	粉末冶金	100.0	当社の電極製品等の受託加工を行っております。 また、当社所有建物及び機械装置の一部を賃借しております。 役員の兼任等 4名 転籍 1名
株福岡機器製作所	福岡市博多区	20	その他	100.0	当社の製造設備の製作、据付、保守を行っております。 また、当社所有建物及び機械装置並びに土地の一部を賃借しております。 役員の兼任等 4名 転籍 1名
株エヌ・ティーサービス	福岡市博多区	10	その他	100.0	当社の賃貸資産の管理、火災保険等の保険代理を行っております。 また、当社所有建物の一部を賃借しております。 役員の兼任等 4名 転籍 1名
恩梯（上海）商貿有限公司	中国上海市	百万円 9	粉末冶金	100.0	当社、上海電科電工材料有限公司及び四平恩梯タングステン高技術材料有限公司の関連製品の仕入・販売及び当社への関連製品の販売を行っております。 役員の兼任等 4名 転籍 1名
上海電科電工材料有限公司 (注) 2、3、4	中国上海市	百万米ドル 6	粉末冶金	60.0	当社から技術指導を受けております。 当社から金融機関に対する債務保証を受けております。 役員の兼任等 5名 転籍 1名
上海三義精密模具有限公司 (注) 2、5	中国上海市	百万米ドル 2	その他	100.0	当社から技術指導を受けております。 当社が販売するNTダイカッターの再研磨サービスを行っております。 当社から金融機関に対する債務保証を受けております。 役員の兼任等 4名 転籍 1名
四平恩梯タングステン高技術材料有限公司 (注) 6	中国吉林省四平市	百万円 11	粉末冶金	51.0	恩梯（香港）有限公司にタングステン線製品の半製品等を製造販売しております。 当社から技術援助契約に基づき、技術指導を受けております。 役員の兼任等 4名 転籍 1名
NIPPON TUNGSTEN USA, INC.	米国ウエストバージニア州	千米ドル 24	粉末冶金	100.0	主に当社が製造するNTダイカッターの販売及び再研磨サービスを行っております。 役員の兼任等 3名 転籍 1名
恩梯（香港）有限公司 (注) 7	中国香港特別行政区	千米ドル 20	粉末冶金	100.0 (100.0)	当社及び四平恩梯タングステン高技術材料有限公司で製造するタングステン線の仕入・販売を行っております。 役員の兼任等 1名 転籍 1名

名称	住所	資本金又は 出資金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の所有 (又は被所有) 割合(%)	関係内容
(持分法適用関連会社) S V ニックン(株)	タイ国バンコク市	百万バーツ 60	粉末冶金	48.5	当社に金型の販売を行っております。 役員の兼任等 4名 転籍 1名
四平日本タングステン有限公司 (注) 8	中国吉林省四平市	百万米ドル 6	粉末冶金	40.0	当連結会計年度末時点において、 製造販売活動は行っておりません。 役員の兼任等 5名 転籍 1名
九江日本タングステン有限公司	中国江西省九江市	百万元 15	粉末冶金	25.0	当社との直接取引はありません。 四平恩梯タングステン高新技术材 料有限公司にタングステン線製品 の原材料を製造販売しております。 役員の兼任等 4名 転籍 1名

(注) 1 主要な事業の内容欄には、セグメント別の名称を記載しております。

2 特定子会社であります。

3 平成22年4月に新たに連結子会社となりました。

4 売上高（連結会社相互間の内部売上高を除く）の連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等	(1) 売上高	1,535百万円
	(2) 経常利益	18百万円
	(3) 当期純利益	12百万円
	(4) 純資産額	236百万円
	(5) 総資産額	897百万円

5 平成22年8月に新たに連結子会社となりました。

6 平成23年3月に新たに連結子会社となりました。

7 議決権の所有割合の( )内は、間接所有割合を内数で示しております。

8 債務超過会社であり、債務超過額は366百万円であります。

9 有価証券届出書または有価証券報告書を提出している会社はありません。

## 5 【従業員の状況】

### (1) 連結会社における状況

平成23年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数(人)
粉末冶金	723 [67]
その他	112 [ 5]
全社（共通）	142 [ 1]
合計	977 [73]

- (注) 1 従業員数は就業人員数(当社グループからグループ外への出向者を除く)であり、臨時従業員数は [ ] 内に年間の平均人員を外数で記載しております。
- 2 臨時従業員には、契約社員等の従業員を含み、派遣社員を除いております。
- 3 当連結会計年度において、従業員数が481名増加しておりますが、その主な理由は、上海電科電工材料有限公司、上海三義精密模具有限公司及び四平恩梯タングステン高技術材料有限公司を連結子会社にしたためであります。

### (2) 提出会社の状況

平成23年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
397 [43]	40.2	19.5	5,302,392

セグメントの名称	従業員数(人)
粉末冶金	348[42]
その他	—[—]
全社（共通）	49[ 1]
合計	397[43]

- (注) 1 従業員数は就業人員数(出向者を除く)であり、臨時従業員数は [ ] 内に年間の平均人員を外数で記載しております。
- 2 臨時従業員には、契約社員等の従業員を含み、派遣社員を除いております。
- 3 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

### (3) 労働組合の状況

当社グループは、日本タングステン労働組合及び昭和電気接点労働組合を結成し、それぞれJAM日本タングステン労働組合及びJAM昭和電気接点労働組合に加入しております。

平成23年3月31日現在の組合員数は396人で、臨時従業員の労働組合は結成されていません。労働組合は、終始協動的で相互の理解と信頼に基づき円満な労使関係を維持しております。

## 第2 【事業の状況】

### 1 【業績等の概要】

#### (1) 業績

当連結会計年度におけるわが国経済は、新興国の堅調な需要や政府の経済対策等に支えられ、緩やかな回復基調をたどりました。しかしながら、期後半はエコカー減税等の経済対策終了に伴う需要の息切れや、円高の進行、原油やレアメタル等の資源価格高騰により、景気の減速感が強まり、不透明さを増しながら推移いたしました。

また、3月に発生した東日本大震災の甚大な被害により、その影響が長引くことが予想され、先行きは予断を許さない状況となっております。震災により被災された皆様には心からお見舞い申し上げますとともに、被災地の1日も早い復旧、復興をお祈り申し上げます。なお、震災による当社グループへの影響につきましては、人員・設備ともに直接的な被害はなく、事業活動には大きな支障はございませんでした。

当社グループに関連する業界につきましては、当社の主力商品と関連性の深い自動車・電子部品・デバイス産業は、上半期は順調な回復傾向にありましたが、期後半に入り、経済対策終了等の反動もあり、受注環境が伸び悩む中で推移いたしました。

このような中、当社グループの売上高は、機械関連製品、電子関連製品等の国内市場が回復したことや、中国関連会社の子会社化によるアジア地区への拡販等、海外市場へ積極的に展開したこと等により好転しました。なお、震災の影響で一部受注が減少した商品もありましたが、放射線の遮蔽用途として使用される樹脂タングステンシートが、福島原子力発電所の災害復旧に使用され、緊急的な需要も発生しました。

この結果、売上高は前年比35.6%増の118億6百万円となりました。

損益面におきましては、円高による為替差損やレアメタル等の価格高騰の影響を受けましたが、拡販対策や原価低減策を進めた結果、収益は大きく改善いたしました。

この結果、営業損益は前連結会計年度の3億3千9百万円の営業損失から1億6千万円の営業利益となり、経常損益は同じく3億5百万円の経常損失から2億4千2百万円の経常利益となり、いずれも前連結会計年度の赤字から黒字に転換いたしました。また、特別損益としまして、資産効率の一環から保有株式および遊休地を一部売却し特別利益を計上する一方、資産除去債務会計基準の適用に伴う影響額を特別損失に計上したことにより、当期純損益は前連結会計年度の2億8千9百万円の当期純損失から3億5千1百万円の当期純利益となりました。

製品別では、主要製品であるNTダイカッターが海外市場への積極的な展開により、海外向けを中心に大きく増加したほか、ブレーカー用接点や自動車関連の抵抗溶接電極、OA機器用等のタングステン線も回復基調の中で増加しました。

一方、HDD用磁気ヘッド基板は数量的には安定した販売状況で推移しましたが、為替の影響により売上高が減少し、重電用の電極製品は、顧客の海外調達が加速し、伸び悩みました。このほか、液晶関連の超合金製ロングツールや原子力・医療用の樹脂タングステンシートが製品の独自性や機能性が評価され、売上高は増加しました。

この結果、粉末冶金の売上高は112億9千9百万円となりました。

その他は、産業用機器及び装置等の需要が増加するなど堅調に推移した結果、売上高は5億7百万円となりました。

## (2) キャッシュ・フロー

当連結会計年度末における連結ベースの現金及び現金同等物の期末残高は、営業活動により8億4千2百万円の資金を獲得し、投資活動により4億8千4百万円の資金を支出し、財務活動により6億2百万円の資金を支出した結果、前連結会計年度末と比較して、2億6千2百万円減少し、24億5千9百万円となりました。

### (営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動により獲得した資金は8億4千2百万円となり、前年同期と比べ1億5千9百万円の収入増となりました。これは、主に売上債権の回収に伴い収入が増加したことによるものであります。

### (投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動により支出した資金は4億8千4百万円となり、前年同期と比べ2億7千5百万円の支出増となりました。これは、主に有形固定資産の取得による支出が増加したことによるものであります。

### (財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動により支出した資金は6億2百万円となり、前年同期と比べ5億4千1百万円の支出増となりました。これは、主に借入れによる収入が減少したことによるものであります。

## 2 【生産、受注及び販売の状況】

### (1) 生産実績

当連結会計年度における生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	金額(百万円)	前年同期比(%)
粉末冶金事業	10,914	39.1
その他	555	34.1
合計	11,469	38.9

- (注) 1 金額は、販売価額をもって表示しており、セグメント間の取引については、相殺消去しております。  
2 上記金額には、消費税等は含まれておりません。

### (2) 受注状況

当連結会計年度における受注状況をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	受注高(百万円)	前年同期比(%)	受注残高(百万円)	前年同期比(%)
粉末冶金事業	11,948	36.3	1,610	67.6
その他	626	41.1	164	261.0
合計	12,575	36.5	1,775	76.3

- (注) 1 セグメント間の受注高及び受注残高については、相殺消去しております。  
2 上記金額には、消費税等は含まれておりません。

### (3) 販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	金額(百万円)	前年同期比(%)
粉末冶金事業	11,299	36.5
その他	507	19.2
合計	11,806	35.6

- (注) 1 セグメント間の取引については相殺消去しております。  
2 主な相手先別の販売実績及び総販売額に対する割合は、次のとおりであります。

相手先	前連結会計年度		当連結会計年度	
	金額(百万円)	割合(%)	金額(百万円)	割合(%)
日立金属(株)	1,315	15.1	1,276	10.8

- 3 上記金額には、消費税等は含まれておりません。

### 3 【対処すべき課題】

#### (1) 対処すべき課題

今後の経済環境は、震災の影響が残る中、生産回復の遅れや消費の低迷が予想され、一部では復興需要が見込まれるものの、先行きの見通しが立ちにくい状況となっております。特に、自動車産業等においては、震災の影響で部品調達が滞っており、生産縮小の長期化が懸念されます。

こうした中、当社のコアプロダクツであるNTダイカッター及びHDD用磁気ヘッド基板は更なるシェアの拡大に努め、液晶・二次電池用の超硬合金製ロングツール及び原子力・医療用の樹脂タングステンシートは、受注促進活動を積極的に行い、売上の拡大を図ってまいります。また、中国事業においては、重電用電極製品及び産業機器の拡販や、タングステン線の中国子会社への製造移管及び拡販を進めてまいります。

業績に影響を及ぼす課題としましては、タングステンや銀などの原材料価格が急騰しており、販売価格の是正や更なるコストダウンに取り組み、原価率の改善を推進するとともにアジア市場を中心とした海外販路の拡大に全力で取り組んでまいります。

#### (2) 株式会社の支配に関する基本方針

##### ①当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者の在り方に関する基本方針

当社としては、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者は、当社の経営理念を尊重し、当社の企業価値の源泉やステークホルダーとの信頼関係を壊すことなく、中長期的な視点で当社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益の確保又は向上を真摯に目指す者でなければならないと考えています。

もとより当社は、上場会社である当社の株式は、資本市場において自由に取引されるべきものであり、当社株式の大量の買付行為につきましても原則としてこれを否定するものではなく、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者は、最終的には株主の皆様の自由な意思に基づいて決定されるべきものと考えております。

しかしながら、近時のわが国資本市場においては、買付行為の内容を判断するに足る必要な情報を提供することなく、また対象会社の経営陣や株主との十分な協議や合意の形成を経ることなく、一方的に株式の大量の買付行為を強行するといった動きが顕在化しております。

このような大量の買付行為の中には、十分な情報が提供されないまま、株主に株式の売却を事実上強要する恐れのあるものや、取締役会が当該買付行為の内容の検討や代替案の提案等を行うための十分な時間を与えないもの、真摯に会社の経営を行う意思に乏しいものなど、対象会社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益を著しく損なう買付行為もないとはいえません。

当社としましては、当社の企業価値の源泉は、①材料技術と加工技術を融合した高度な粉末冶金技術、②熟練した技術を有する従業員の存在、③重要な取引先、顧客、地域社会等のステークホルダーとの間で長年に亘って構築された緊密な信頼関係、④現経営者と従業員との密接な信頼関係にあると考えております。



当社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益を確保又は向上させるためには、かかる当社の企業価値の源泉に対する理解が必要不可欠ですが、当社株式の大量の買付行為を行う者が、当社の企業価値の源泉を理解し、これらの中長期的に確保し、長年築きあげてきた技術、ノウハウなどの無形の経営資源と市場とを有機的に結合させ企業価値の増大を図る経営をするのでなければ、当社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益に反することとなると考えます。

したがって、当社は上記のような当社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益に反する大量の買付行為を行う者は、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者として不適切であると考えます。

## ②当社の基本方針の実現に資する特別な取組み

### ア. 企業価値向上のための取組み

当社は1931年の創業以来、タングステン、モリブデン等のレアメタル及びファインセラミックス等を用い、高付加価値商品を幅広い産業分野に提供しております。照明用タングステン線・棒から事業を開始し、これまでにタングステン合金電気接点、超硬合金製品、ファインセラミックス製品等の先進的な製品まで、材料技術をベースに超精密加工製品へと順次、事業領域を拡大してまいりました。当社は、この材料技術と加工技術を融合した高機能商品を創造するとともに、常にお客様の視点に立って長年に亘り誠実且つ堅実なものづくりの経営により、社会への貢献を果たしてまいりました。

当社は、更なる高収益企業体質への転換を進めるため、継続的に中期経営計画に取り組んでおり、概要は以下のとおりであります。

#### a. 商品事業戦略

当社グループは目指すべきビジョンとして、「グローバルなお客様や社会への貢献」を掲げ、新技術・新商品の創出、ものづくりの強化を進め、特に中国・アジアを中心とした製造及び販売拠点を設置し、グローバルな収益拡大を図ってまいります。また、いかなる事業環境下においても黒字を維持するために「重点商品による収益の確保」を継続的に推進し、今後も企業価値の向上を目指します。

#### b. 開発戦略

半導体・自動車・照明などの既存の「基盤事業分野」に、「環境・エネルギー分野」「インフラ関連分野」「先端分野」を加えた事業領域を中心に展開してまいります。特に液晶・光学機器関連商品、サニタリー関連耐摩商品、エネルギー関連商品等は全社的な取組みで、経営資源を集中し、成長させてまいります。

#### c. 新商品戦略

新商品の開発に関しては、戦略組織を中心に徹底したマーケティング指向でコア技術・注力商品について新用途・新市場の探索を行います。その中から開発テーマを選択し、新商品を開発します。

#### d. 海外展開

成長市場における販売拠点を整備し、海外における売上高を拡大させてまいります。また、中国・タイを中心としたアジア地域の製造拠点を拡充・強化し、原価の圧縮や技術移転等を図りながら、グループの更なる収益力及び競争力の強化に努めてまいります。

#### イ. コーポレートガバナンスの充実について

当社は、法令を順守し適正な企業活動を通じて、経営の透明性、効率性を確保し、経営の監督と執行及び監査が有効に機能した統治体制のもとで企業価値を向上させ、株主、顧客、地域社会から信頼される企業となるよう、内部監査機能の充実、コンプライアンスの徹底した取組みによる企業統治の充実を図っております。

当社は監査役制度を採用しており、取締役は8名(うち社外取締役1名)、監査役4名(うち社外監査役3名)で構成されております。取締役の任期は、株主の意向をより適時に反映させることを目的として、1年としております。

当社の取締役会は、法令・定款に基づき決議を要する事項のほか、重要事項に関して審議し、また、業務執行状況においても随時報告がなされております。また、業務執行に関する基本的事項及び重要事項に係る意思決定を機動的に行うことを目的に、常勤役員で構成する常務会を、原則として毎週開催しております。

常勤監査役は、取締役会をはじめ主要な会議に出席し、必要に応じ意見を述べるほか、会計監査人、社内スタッフなどから報告を受けるとともに、子会社、関連会社への監査を行っております。社外監査役は、財務報告における内部統制監査の整備、運用状況及び監査の状況について、常勤監査役より適時報告を受け、意見等を行っております。また、取締役社長と意見交換を行い、業務の執行状況等について把握するほか、常勤監査役より、内部監査、監査役監査の状況や、会計監査人による監査の状況等について、適時、報告を受け、意見及び助言を行っております。

内部監査体制におきましては、取締役社長直属の機関として内部監査室を設置しており、会社の業務運営が経営方針、諸規定に準拠して適正に行われているかを監査し、その結果を取締役社長に報告しております。また、内部監査室は、監査計画を監査役に報告するとともに、その実施状況及び内容について適時報告しております。

コンプライアンス体制におきましては、法令を順守し適正な企業活動を通じてガバナンス機能を充実させるため、コンプライアンス担当役員を1名設置しております。

内部統制体制におきましては、取締役社長をはじめ、経営企画部を主幹部門として、その整備、運用を行っております。内部監査室は、社内規程に基づいて財務報告に係る内部統制の整備、運用状況の監査を行い、監査役は、監査内容について確認しております。また、会計監査人による監査においては、監査役は、監査方法及び結果の妥当性を確認しております。

リスクマネジメント推進体制におきましては、当社の事業運営に影響を及ぼす恐れのある様々なリスクへの適切な対応を行い、経営基盤の安定化を図るため、リスクマネジメント委員会を設け、リスクの把握と評価、対応策を検討し、リスクが顕在化した場合の影響を極小化するリスクマネジメント活動を行っております。

#### ③基本方針に照らして不適切な者によって当該株式会社の財務及び事業の方針の決定が支配されることを防止するための取組み

当社は、平成23年5月11日開催の取締役会において、「当社の株券等の大規模買付行為に関する対応方針(買収防衛策)」の更新を決定し(更新後の対応方針を、以下「本対応方針」といいます。)、その後、平成23年6月28日開催の当社第100期定時株主総会において、本対応方針への更新をご承認いただきました。本対応方針への更新の目的及び本対応方針の概要は、次のとおりであります。

#### ア. 本対応方針導入の目的

上記①記載の基本方針に基づいて、当社は、当社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益に反する大規模買付行為(下記イ.に定義されます。以下同じです。)に対しては、適切な対抗措置を迅速且つ的確に発動することにより、当社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益を確保し又は向上させる必要性があると認識しております。このような認識のもと、当社取締役会は、金融商品取引法及び関連政省令の改正等の動向を注視しつつ、また、昨今の買収防衛策に関する議論の進展等を踏まえ、大規模買付行為が行われる場合に、当社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益に反する買付行為でないかどうかを株主の皆様が判断することや、株主の皆様のために当社取締役会が大規模買付者と交渉を行うことを可能とするために、事前に大規模買付行為に関する必要な情報を提供すること、並びに、その内容の評価、検討、交渉及び意見形成、代替案立案のための期間を確保するための枠組みとして、以下のとおりの本対応方針への更新を行っております。

#### イ. 本対応方針の概要

- a. 本対応方針は、当社が発行者である株券等について、保有者の株券等保有割合が20%以上となる買付け若しくは当社が発行者である株券等について、公開買付けに係る株券等の株券等所有割合及びその特別関係者の株券等所有割合の合計が20%以上となる公開買付けに該当する行為又はこれらに類似する行為(但し、当社取締役会が予め承認したものを除きます。このような行為を以下「大規模買付行為」といい、大規模買付行為を行い又は行おうとする者を以下「大規模買付者」といいます。)がなされ、又はなされようとする場合において、当社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益に反する買付行為でないかどうかを株主の皆様が判断することや、株主の皆様のために当社取締役会が大規模買付者と交渉を行うことを可能とするために、事前に大規模買付行為に関する必要な情報を提供すること、並びに、その内容の評価、検討、交渉及び意見形成、代替案立案のための期間を確保するための手続(以下「大規模買付ルール」といいます。)を定めるものです。
- b. 大規模買付者が大規模買付ルールに従わずに大規模買付行為を行い若しくは行おうとする場合、又は、大規模買付者による大規模買付行為が当社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益を著しく損なうものであると認められる場合には、当社は、当社取締役会決議(一定の場合には株主総会決議)に基づき、当社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益を確保し又は向上させるために、必要且つ相当な対抗措置(原則として、差別的行使条件及び差別的取得条項付きの新株予約権(以下「本新株予約権」といいます。))の無償割当てを行います。)を発動することがあります。
- c. 本対応方針においては、大規模買付ルールに従って一連の手続が進行されたか否か、及び、大規模買付ルールが遵守された場合に当社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益を確保し又は向上させるために必要且つ相当と考えられる一定の対抗措置を発動するか否かについては、当社取締役会が最終的な判断を行います。その判断の合理性及び公正性を担保するために、当社は、独立委員会規程に基づき、当社取締役会から独立した機関として、独立委員会を設置することとします。独立委員会の委員は、3名以上とし、社外取締役、社外監査役、弁護士、税理士、公認会計士、学識経験者、投資銀行業務に精通している者又は他社の取締役若しくは執行役として経験のある社外者等の中から選任されるものとします。

独立委員会は、大規模買付者の提供する大規模買付情報に基づき、必要に応じて適宜外部専門家等の助言を得ながら、当該大規模買付行為の具体的内容及び当該大規模買付行為が当社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益に与える影響等を評価・検討等した上で、本対応方針に従い当社取締役会がとるべき対応について勧告を行います。当社取締役会は独立委員会の勧告を踏まえ、これを最大限尊重しつつ、本対応方針に従って対応を決定するものとします。

④上記②の取組みが基本方針に沿うものであり、株主の共同の利益を損なうものではなく、また、当社の会社役員の地位の維持を目的とするものではないことに関する当社取締役会の判断及びその理由

当社は、上記②の取組みの実施を通じて、当社の企業価値ひいては株主の皆様共同の利益を向上させ、それを当社の株式の価値に適正に反映させていくことにより、当社の企業価値ひいては株主の皆様共同の利益を著しく損なうおそれのある大規模買付行為は困難になるものと考えられることから、これは上記①に記載の基本方針に沿うものであり、株主の皆様共同の利益を損なうものではなく、また、当社の役員地位の維持を目的とするものではないと考えております。

⑤上記③の取組みが基本方針に沿うものであり、株主の共同の利益を損なうものではなく、また、当社の会社役員の地位の維持を目的とするものではないことに関する当社取締役会の判断及びその理由

本対応方針への更新は、当社の企業価値ひいては株主の皆様共同の利益を確保し又は向上させることを目的として、大規模買付者に対して、当該大規模買付者が実施しようとする大規模買付行為に関する必要な情報の事前の提供、及び、その内容の評価・検討等に必要な期間の確保を求めるとして行われたものであり、上記①に記載の基本方針に沿うものです。

また、当社取締役会は、本対応方針は、以下の各点に照らして、株主の皆様共同の利益を損なうものではなく、また、当社の会社役員地位の維持を目的とするものではないと判断しております。

a. 株主意思を重視するものであること

本対応方針への更新は、株主の皆様のご意思を確認するため、平成23年6月28日開催の当社第100期定時株主総会における承認可決を経て行われたものであり、株主の皆様のご意思が反映されております。また①当社株主総会において本対応方針を廃止若しくは変更する旨の議案が承認された場合、又は、②当社株主総会において選任された取締役によって構成される当社取締役会において本対応方針を廃止若しくは変更する旨の決議が行われた場合には、本対応方針はその時点で廃止又は変更されます。さらに、当社取締役会は、独立委員会による勧告を最大限尊重した上で、本新株予約権の無償割当てに関する議案を当社定款第11条第1項に基づき、当社株主総会に付議することがあり、これにより株主の皆様のご意思を直接確認することができることとしております。

b. 買収防衛策に関する指針の要件を完全に充足していること

本対応方針は、経済産業省及び法務省が平成17年5月27日に公表した「企業価値・株主共同の利益の確保又は向上のための買収防衛策に関する指針」の定める三原則(①企業価値・株主共同の利益の確保・向上の原則、②事前開示・株主意思の原則、③必要性・相当性確保の原則)を完全に充足しています。また、企業価値研究会が平成20年6月30日に公表した「近時の諸環境の変化を踏まえた買収防衛策の在り方」その他昨今の買収防衛策に関する議論等を踏まえた内容となっております。さらに本対応方針は、東京証券取引所の定める買収防衛策の導入に係る諸規則等の趣旨に合致するものです。

- c. 当社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益の確保又は向上の目的をもって更新が行われたこと

本対応方針への更新は、上記③ア.に記載のとおり、当社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益を確保し又は向上させることを目的として、大規模買付者に対して、当該大規模買付者が実施しようとする大規模買付行為に関する必要な情報の事前の提供、及び、その内容の評価・検討等に必要な期間の確保を求めるために、行われたものです。

- d. 合理的且つ客観的な対抗措置発動要件の設定

本対応方針は、合理的且つ客観的な要件が充足されない限りは、対抗措置が発動されないように設定されており、当社取締役会による恣意的な発動を防止するための仕組みが確保されています。

- e. 独立委員会の設置

上記③イ.c.に記載のとおり、当社は、本対応方針において、大規模買付ルールに従って一連の手続が進行されたか否か、及び、大規模買付ルールが遵守された場合に当社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益を確保し又は向上させるために必要且つ相当と考えられる一定の対抗措置を発動するか否かについての取締役会の判断の合理性及び公正性を担保するため、またその他本対応方針の合理性及び公正性を確保するために、当社取締役会から独立した組織として、独立委員会を設置することとしております。

これにより、当社取締役会による恣意的な本対応方針の運用ないし対抗措置の発動を防止するための仕組みが確保されています。

- f. デッドハンド型買収防衛策ではないこと等

本対応方針は、本対応方針の有効期間の満了前であっても、当社株主総会で選任された取締役で構成された取締役会により、いつでも廃止することができるものとされており、したがって、本対応方針は、デッドハンド型買収防衛策(取締役会の構成員の過半数を交代させても、なお発動を阻止できない買収防衛策)ではありません。また、当社の取締役の任期は、選任後1年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会の終結時までとなっており、本対応方針は、取締役会の構成員の交代を一度に行うことができないためその発動を阻止するのに時間を要する買収防衛策でもありません。

#### 4 【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況に関する事項のうち、当社グループの経営成績及び財務状況等（株価等を含む）に影響を及ぼす可能性のあるリスクには以下のようなものがあると考えられます。

なお、文中の将来に関する事項は、有価証券報告書提出日（平成23年6月28日）現在において当社グループが判断したものであります。

##### (1) 会社特有の事業内容

当社グループの主要な事業である粉末冶金事業に係る製品の需要については、当社グループが製品を販売している様々な市場における経済状況の影響や、価格面での競争激化により、当社グループの業績と財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

また、当社グループの粉末冶金事業における技術については、先進の技術を駆使した特殊なノウハウ、技術等が必要であるため、これらが、今後の技術革新に十分に対応できずに欠落したり、現在有するノウハウもしくは技術等が流出した場合には、将来の成長と収益性を低下させ、当社グループの業績と財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

##### (2) 原材料価格の変動

当社グループの主要な事業である粉末冶金事業に係る原材料には、タングステン、コバルト等のレアメタルが使用されております。レアメタルは市況により価格が急激に変動する可能性があり、当社グループの原材料調達価格もこの変動の影響を受ける可能性があります。

##### (3) たな卸資産の収益性の低下による簿価切下げ

当社グループは、「棚卸資産の評価に関する会計基準」を適用しております。レアメタル等の価格下落等により、たな卸資産の正味売却価額が帳簿価額を下回った場合には、収益性が低下していると考え、期末時点の帳簿価額を正味売却価額まで切り下げることとなるため、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

##### (4) 為替変動による業績への影響

当社グループの海外での事業活動及び海外との輸出取引において、為替相場の変動による影響を受けております。これらについては換算時の為替レートにより、現地通貨による価値が変わらなかつたとしても、円換算後の価値が影響を受けることがあり、その状況によっては当社グループの業績と財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

##### (5) 金利及び時価の変動

当社グループの資金調達は主に金融機関からの借入れによっておりますが、将来における市場金利の上昇等によっては当社グループの業績と財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

また、保有する有価証券について時価の変動に伴い、当社グループの業績と財務内容に影響を及ぼす可能性があります。

##### (6) 固定資産の減損

当社グループの保有する固定資産について、当該資産又は資産グループが属する事業の経営環境の著しい変化や収益状況の悪化等により、固定資産の減損損失を計上する必要がある場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

##### (7) 海外での事業活動

当社グループは、国内市場の成熟化、顧客の海外展開に対応して中国、タイ及びアメリカに子会社及び合弁会社を設立し、海外での事業活動を展開しております。このため、この地域の政治的、経済的要

因の変動、法的規制、税制度の改正、また、ストライキ、デモ等の労働争議、社会的混乱により当社グループの業績と財務状況に影響を及ぼす可能性があります。また、海外関連会社において、原材料価格の上昇、海外の事業環境の悪化等により、当社グループの生産・販売活動、原材料等の調達活動に影響を及ぼす可能性があります。

(8) 環境規制等による影響

当社グループは、企業活動に伴って発生する廃棄物、規制物資、副産物等について、法規制に従って厳格に管理しており、環境汚染防止に努めております。しかしながら、将来の法規制の改正・強化による新たな管理・処理費用の負担、天災、事故等による災害復旧費等により当社グループの業績と財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(9) 自然災害等による影響

台風、地震等の自然災害、または火災等の予期せぬ事故の発生により、当社グループの生産設備、たな卸資産への被害、また、これに伴う生産・販売活動の中断等により当社グループの業績と財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

**5 【経営上の重要な契約等】**

該当事項はありません。

**6 【研究開発活動】**

当社グループは、粉末冶金事業を主体に、常に先進の技術を追求し、独創的な製品開発に取り組んでおります。

当連結会計年度におけるセグメント別の研究の主要課題及び開発費は次のとおりであります。

粉末冶金においては、当社が中心となって、ファインセラミックスを始めとした新素材の研究開発、顧客のニーズに基づいた商品開発を積極的に進めております。その内容は多岐に及びますが、主として当社のファインセラミックス、高融点金属、複合材料などの新材料開発とその特長を生かした応用商品開発やこれらの商品に必要な新たなプロセス技術などの要素技術の開発を行っております。

当事業に係る当連結会計年度の研究開発費は210百万円であります。

なお、その他については、特筆すべき研究開発活動を行っておりません。

## 7 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

当連結会計年度末日(平成23年3月31日)現在における財政状態及び経営成績の分析は、以下のとおりであります。

### (1) 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる会計基準に基づき作成されております。その作成において見積が必要となる事項につきましては、過去の実績やその時点で合理的と考えられる情報に基づき会計上の見積を行っておりますが、見積には不確実性が伴うため、実際の結果とは異なる場合があります。

当社グループの連結財務諸表の作成において採用している重要な会計方針は、「**第5 経理の状況 1 連結財務諸表等** 連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」に記載しております。

### (2) 当連結会計年度末の財政状態の分析

#### ①流動資産

当連結会計年度末の流動資産の残高は、前連結会計年度末と比較して6億6千3百万円増加の87億5千3百万円となりました。これは主に、売上債権が1億5千7百万円、仕掛品が2億7千1百万円増加したことによるものであります。

#### ②固定資産

当連結会計年度末の固定資産の残高は、前連結会計年度末と比較して2億1千7百万円減少の74億7千6百万円となりました。これは主に有形固定資産及び賃貸不動産が減価償却費等により減少したことによるものであります。

#### ③流動負債

当連結会計年度末の流動負債の残高は、前連結会計年度末と比較して5億6千万円増加の50億5百万円となりました。これは主に仕入債務が6億1千4百万円増加したものの、短期借入金が1億3千6百万円減少したことによるものであります。

#### ④固定負債

当連結会計年度末の固定負債の残高は、前連結会計年度末と比較して6億1千8百万円減少の32億1千1百万円となりました。これは主に長期借入金4億7千7百万円減少したことによるものであります。

#### ⑤純資産

当連結会計年度末の純資産の残高は、前連結会計年度末と比較して5億3百万円増加の80億1千2百万円となりました。これは主に利益剰余金が3億1千3百万円、少数株主持分が3億1百万円増加したことによるものであります。

### (3) 当連結会計年度の経営成績の分析

当連結会計年度における経営成績の状況につきましては、「**第2 事業の状況 1 業績等の概要 (1) 業績**」に記載しております。

### (4) 経営成績に重要な影響を与える要因

経営成績に重要な影響を与える要因につきましては、「**第2 事業の状況 4 事業等のリスク**」に記載しております。



(5) 資本の財源及び資金の流動性についての分析

①キャッシュ・フロー

当社グループの当連結会計年度末における現金及び現金同等物の残高は、前連結会計年度末と比較して2億6千2百万円減少し、24億5千9百万円となりました。

なお、各キャッシュ・フローの状況と増減につきましては、「**第2事業の状況 1業績等の概要** (2)キャッシュ・フロー」に記載しております。

②資金需要

当社グループの資金需要の主なものは、運転資金、設備資金、法人税等の支払、借入金の返済、配当金の支払等であります。

また、その資金の源泉といたしましては、営業活動によるキャッシュ・フロー、金融機関からの借入等により必要とする資金を調達しております。

### 第3 【設備の状況】

#### 1 【設備投資等の概要】

当連結会計年度は、機械及び装置等の更新を主に4億1千8百万円の投資を行いました。なお、これらの所要資金は主に自己資金で賄っております。

#### 2 【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、以下のとおりであります。

##### (1) 提出会社

平成23年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の 内容	帳簿価額(百万円)								従業員数 (人)
			建物 及び 構築物	機械装 置及び 運搬具	工具、 器具及 び備品	土地 (面積 千㎡)	リース 資産	賃貸不 動産	その他	合計	
基山工場 (佐賀県基山町)	粉末冶金	生産設備 開発設備	1,788	505	26	77 (86)	—	17	1	2,418	246 [23]
飯塚工場 (福岡県飯塚市)	粉末冶金	生産設備	78	74	4	163 (43)	—	9	3	334	52 [13]
宇美工場 (福岡県宇美町)	粉末冶金	生産設備	130	175	12	43 (15)	—	—	0	363	33 [3]
本社 (福岡市博多区)	全社 (共通)	その他 設備	282	—	7	0 (0)	2	1,597	—	1,890	35 [1]

- (注) 1 上記金額には、消費税等は含まれておりません。  
 2 「機械装置及び運搬具」には、使用貸借及び賃貸中の機械装置25百万円を含んでおります。  
 3 従業員数の [ ] は、年間平均の臨時従業員数を外書しております。  
 4 主要な設備のうち、連結会社以外から賃借している設備は、次のとおりであります。

事業所名	セグメントの名称	設備の内容	リース期間	年間リース料 (百万円)	リース契約残高 (百万円)
基山工場	粉末冶金	車両・機械装置・ソフト ウェア等	主に5年	132	231
飯塚工場	粉末冶金	車両等	主に5年	1	0
宇美工場	粉末冶金	車両・機械装置等	主に5年	3	0
本社・支店	全社(共通)	車両・ソフトウェア等	主に5年	9	24

- 5 その他の金額は、建設仮勘定であります。

## (2) 国内子会社

平成23年3月31日現在

会社名 (所在地)	セグメント の名称	設備の 内容	帳簿価額(百万円)								従業員数 (人)
			建物 及び 構築物	機械装 置及び 運搬具	工具、 器具及 び備品	土地 (面積 千㎡)	リース 資産	賃貸不 動産	その他	合計	
(株)昭和電気接点工 業所 (福岡県飯塚市)	粉末冶金	生産設備	3	12	0	— (—)	—	4	—	21	16 [16]
(株)福岡機器製作所 (福岡市博多区)	その他	生産設備	5	30	1	— (—)	1	—	—	38	39 [4]

- (注) 1 上記金額には、消費税等は含まれておりません。  
2 従業員数の [ ] は、年間平均の臨時従業員数を外書しております。

## (3) 在外子会社

平成23年3月31日現在

会社名 (所在地)	セグメント の名称	設備の 内容	帳簿価額(百万円)								従業員数 (人)
			建物 及び 構築物	機械装 置及び 運搬具	工具、 器具及 び備品	土地 (面積 千㎡)	リース 資産	賃貸不 動産	その他	合計	
上海電科電工材料 有限公司(中国上 海市)	粉末冶金	生産設備	—	42	2	— (—)	—	—	136	181	124 [—]
上海三義精密模 具有限公司(中国 上海市)	その他	生産設備	11	86	7	— (—)	—	—	—	104	84 [—]
四平恩梯タング ステン高新技术材 料有限公司(中国 吉林省四平市)	粉末冶金	生産設備	0	104	1	— (—)	—	—	—	107	302 [9]
NIPPON TUNGSTEN USA, INC. (米国ウエストバ ージニア州)	粉末冶金	生産設備	72	59	4	6 (2)	—	—	—	143	5 [—]

- (注) 1 上記金額には、消費税等は含まれておりません。  
2 従業員数の [ ] は、年間平均の臨時従業員数を外書しております。  
3 その他の金額は、建設仮勘定であります。

## 3 【設備の新設、除却等の計画】

## (1) 重要な設備の新設等

重要な設備の新設等の計画はありません。

## (2) 除却等

経常的な更新による除却等を除き、重要な設備等の除却の計画はありません。

## 第4 【提出会社の状況】

### 1 【株式等の状況】

#### (1) 【株式の総数等】

##### ① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	100,000,000
計	100,000,000

##### ② 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (平成23年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (平成23年6月28日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	25,777,600	25,777,600	東京証券取引所 (市場第二部) 福岡証券取引所	単元株式数は 1,000株であります。
計	25,777,600	25,777,600	—	—

#### (2) 【新株予約権等の状況】

当社は、会社法に基づき新株予約権を発行しております。

平成19年8月10日取締役会決議		
	事業年度末現在 (平成23年3月31日)	提出日の前月末現在 (平成23年5月31日)
新株予約権の数(個)	27(注)1	27(注)1
新株予約権のうち自己新株予約権の数(個)	—	—
新株予約権の目的となる株式の種類	普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数(株)	27,000(注)2	27,000(注)2
新株予約権の行使時の払込金額	1株につき1円	同左
新株予約権の行使期間	平成19年8月28日～ 平成39年8月27日	同左
新株予約権の行使により株式を発行する 場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 1 資本組入額 —(注)3	発行価格 1 資本組入額 —(注)3
新株予約権の行使の条件	(注)4	同左
新株予約権の譲渡に関する事項	取締役会の決議による承認を 要するものとする。	同左
代用払込みに関する事項	—	—
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に 関する事項	(注)5	同左

(注) 1 募集新株予約権1個当たりの目的となる株式数は1,000株であります

2 当社が当社普通株式につき、株式分割(当社普通株式の株式無償割当てを含む。以下、株式分割の記載につき同じ。)又は株式併合を行う場合には付与株式数を次の算式により調整するものとします。

調整後付与株式数 = 調整前付与株式数 × 分割・併合の比率

調整後付与株式数は、株式分割の場合は当該株式分割の基準日の翌日以降、株式併合の場合はその効力発

生日以降、これを適用します。但し、剰余金の額を減少して資本金又は準備金を増加する議案が当社株主総会において承認されることを条件として株式分割が行われる場合で、当該株主総会の終結の日以前の日を株式分割のための基準日とする場合は、調整後付与株式数は、当該株主総会の終結の日の翌日以降、当該基準日の翌日に遡及してこれを適用します。

また、上記のほか、付与株式数の調整を必要とするやむを得ない事由が生じたときは、合理的な範囲で付与株式数を調整します。

なお、上記の調整の結果生じる1株未満の端数は、これを切り捨てるものとします。

また、付与株式数の調整を行うときは、当社は調整後付与株式数を適用する日の前日までに、必要な事項を新株予約権原簿に記載された各募集新株予約権を保有する者（以下、「新株予約権者」という。）に通知又は公告します。但し、当該適用の日前日までに通知又は公告を行うことができない場合には、以後速やかに通知又は公告するものとします。

- 3 自己株式を充当することとしているため記載しておりません。
  - 4 (1) 新株予約権者は、上記「新株予約権の行使期間」の行使期間内において、当社の取締役（委員会設置会社における執行役を含む。）、監査役及び執行役員いずれの地位をも喪失した時に限り、新株予約権を行使できるものとします。但し、この場合、新株予約権者は、地位を喪失した日の翌日（以下、「権利行使開始日」という。）から10日を経過する日までの間に限り、新株予約権を行使することができます。
  - (2) 上記(1)に関わらず、新株予約権者は、以下の①又は②に定める場合（但し、②については、新株予約権者に再編成対象会社の新株予約権が交付される場合を除く。）には、それぞれに定める期間内に限り新株予約権を行使できるものとします。
    - ①新株予約権者が平成38年8月27日に至るまでに権利行使開始日を迎えなかった場合  
平成38年8月28日から平成39年8月27日
    - ②当社が消滅会社となる合併で契約承認の議案、又は当社が完全子会社となる株式交換契約若しくは株式移転計画承認の議案につき当社株主総会で承認された場合（株主総会決議が不要な場合は、当社の取締役会決議又は代表執行役の決定がなされた場合）  
当該承認日の翌日から30日間
  - (3) 新株予約権者が募集新株予約権を放棄した場合には、かかる募集新株予約権を行使することができないものとします。
  - (4) 新株予約権者が死亡した場合、相続人は新株予約権を行使することができます。但し、相続人は当該新株予約権者が死亡退任した日の翌日から1年を経過する日までの間に限り、新株予約権を行使できるものとします。
- 5 当社が、合併（当社が合併により消滅する場合に限る。）、吸収分割、新設分割、株式交換又は株式移転（以上を総称して以下、「組織再編成行為」という。）をする場合において、組織再編成行為の効力発生日（吸収合併につき吸収合併の効力発生日、新設合併につき新設合併設立会社の成立の日、吸収分割につき吸収分割の効力発生日、新設分割につき新設分割設立会社の成立の日、株式交換につき株式交換の効力発生日、及び株式移転につき株式移転設立完全親会社の成立の日をいう。）の直前において残存する募集新株予約権（以下、「残存新株予約権」という。）を保有する新株予約権者に対し、それぞれの場合につき、会社法第236条第1項第8号のイからホまでに掲げる株式会社（以下、「再編成対象会社」という。）の新株予約権を以下の条件に基づきそれぞれ交付することとします。この場合においては、残存新株予約権は消滅し、再編成対象会社は新株予約権を新たに発行するものとします。但し、以下の条件に沿って再編成対象会社の新株予約権を交付する旨を、吸収合併契約、新設合併契約、吸収分割契約、新設分割計画、株式交換契約又は株式移転計画において定めた場合に限るものとします。
    - (1) 交付する再編成対象会社の新株予約権の数  
新株予約権者が保有する残存新株予約権の数と同一の数をそれぞれ交付するものとします。
    - (2) 新株予約権の目的である再編成対象会社の株式の種類  
再編成対象会社の普通株式とします。
    - (3) 新株予約権の目的である再編成対象会社の株式の数  
組織再編成行為の条件等を勘案の上、（注）2に準じて決定します。
    - (4) 新株予約権の行使に際して出資される財産の価額  
交付される各新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、以下に定める再編成後払込金額に上記(3)に従って決定される当該各新株予約権の目的である再編成対象会社の株式の数を乗じて得られる金額とします。再編成後払込金額は、交付される各新株予約権を行使することにより交付を受けることができる再編成対象会社の株式1株当たり1円とします。
    - (5) 新株予約権を行使することができる期間  
上記「新株予約権の行使期間」に定める募集新株予約権を行使することができる期間の開始日と組織再編成行為の効力発生日のうちいずれか遅い日から、上記「新株予約権の行使期間」に定める募集新株予約権を行使することができる期間の満了日までとします。

- (6) 新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金及び資本準備金に関する事項
- ① 募集新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金の額は、会社計算規則第40条第1項に従い算出される資本金等増加限度額の2分の1の金額とし、計算の結果生じる1円未満の端数は、これを切り上げるものとします。
  - ② 募集新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本準備金の額は、上記①記載の資本金等増加限度額から上記①に定める増加する資本金の額を減じた額とします。
- (7) 譲渡による新株予約権の取得の制限
- 譲渡による新株予約権の取得については、再編成対象会社の取締役会の決議による承認を要するものとします。
- (8) 募集新株予約権の取得条項
- 以下の①、②、③、④又は⑤の議案につき当社株主総会で承認された場合（株主総会決議が不要の場合は、当社の取締役会決議又は代表執行役の決定がなされた場合）は、取締役会が別途定める日に、当社は無償で募集新株予約権を取得することができます。
- ① 当社が消滅会社となる合併契約承認の議案
  - ② 当社が分割会社となる分割契約若しくは分割計画承認の議案
  - ③ 当社が完全子会社となる株式交換契約若しくは株式移転計画承認の議案
  - ④ 当社の発行する全部の株式の内容として譲渡による当該株式の取得について当社の承認を要することについての定めを設ける定款の変更承認の議案
  - ⑤ 新株予約権の目的である株式の内容として譲渡による当該株式の取得について当社の承認を要すること若しくは当該種類の株式について当社が株主総会の決議によってその全部を取得することについての定めを設ける定款の変更承認の議案
- (9) その他の募集新株予約権の行使の条件
- ① 新株予約権者は、上記「新株予約権の行使期間」の期間内において、当社の取締役（委員会設置会社における執行役を含む。）、監査役及び執行役員いずれの地位をも喪失した時に限り、新株予約権を行使できるものとします。但し、この場合、新株予約権者は、権利行使開始日から10日を経過する日までの間に限り、新株予約権を行使することができます。
  - ② 上記①に関わらず、新株予約権者は、以下の1又は2に定める場合（但し、2については、新株予約権者に再編成対象会社の新株予約権が交付される場合を除く。）には、それぞれに定める期間内に限り新株予約権を行使できるものとします。
    - 1. 新株予約権者が平成38年8月27日に至るまでに権利行使開始日を迎えなかった場合  
平成38年8月28日から平成39年8月27日
    - 2. 当社が消滅会社となる合併で契約承認の議案、又は当社が完全子会社となる株式交換契約若しくは株式移転計画承認の議案につき当社株主総会で承認された場合（株主総会決議が不要な場合は、当社の取締役会決議又は代表執行役の決定がなされた場合）  
当該承認日の翌日から30日間
  - ③ 新株予約権者が募集新株予約権を放棄した場合には、かかる募集新株予約権を行使することができないものとします。
  - ④ 新株予約権者が死亡した場合、相続人は新株予約権を行使することができます。但し、相続人は当該新株予約権者が死亡退任した日の翌日から1年を経過する日までの間に限り、新株予約権を行使できるものとします。

平成20年8月8日取締役会決議		
	事業年度末現在 (平成23年3月31日)	提出日の前月末現在 (平成23年5月31日)
新株予約権の数(個)	54(注)1	54(注)1
新株予約権のうち自己新株予約権の数(個)	—	—
新株予約権の目的となる株式の種類	普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数(株)	54,000(注)2	54,000(注)2
新株予約権の行使時の払込金額	1株につき1円	同左
新株予約権の行使期間	平成20年8月27日～ 平成40年8月26日	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 1 資本組入額 —(注)3	発行価格 1 資本組入額 —(注)3
新株予約権の行使の条件	(注)4	同左
新株予約権の譲渡に関する事項	取締役会の決議による承認を要するものとする。	同左
代用払込みに関する事項	—	—
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	(注)5	同左

(注) 1 募集新株予約権1個当たりの目的となる株式数は1,000株であります。

2 当社が当社普通株式につき、株式分割(当社普通株式の株式無償割当てを含む。以下、株式分割の記載につき同じ。)又は株式併合を行う場合には付与株式数を次の算式により調整するものとします。

調整後付与株式数 = 調整前付与株式数 × 分割・併合の比率

調整後付与株式数は、株式分割の場合は当該株式分割の基準日の翌日以降、株式併合の場合はその効力発生日以降、これを適用します。但し、剰余金の額を減少して資本金又は準備金を増加する議案が当社株主総会において承認されることを条件として株式分割が行われる場合で、当該株主総会の終結の日以前の日を株式分割のための基準日とする場合は、調整後付与株式数は、当該株主総会の終結の日の翌日以降、当該基準日の翌日に遡及してこれを適用します。

また、上記のほか、付与株式数の調整を必要とするやむを得ない事由が生じたときは、合理的な範囲で付与株式数を調整します。

なお、上記の調整の結果生じる1株未満の端数は、これを切り捨てるものとします。

また、付与株式数の調整を行うときは、当社は調整後付与株式数を適用する日の前日までに、必要な事項を新株予約権原簿に記載された各募集新株予約権を保有する者(以下、「新株予約権者」という。)に通知又は公告します。但し、当該適用の日の前日までに通知又は公告を行うことができない場合には、以後速やかに通知又は公告するものとします。

3 自己株式を充当することとしているため記載しておりません。

4 (1) 新株予約権者は、上記「新株予約権の行使期間」の期間内において、当社の取締役(委員会設置会社における執行役を含む。)、監査役及び執行役員いずれの地位をも喪失した時に限り、新株予約権を行使できるものとします。但し、この場合、新株予約権者は、地位を喪失した日の翌日(以下、「権利行使開始日」という。)から10日を経過する日までの間に限り、新株予約権を行使することができます。

(2) 上記(1)に関わらず、新株予約権者は、以下の①又は②に定める場合(但し、②については、新株予約権者に再編成対象会社の新株予約権が交付される場合を除く。)には、それぞれに定める期間内に限り新株予約権を行使できるものとします。

①新株予約権者が平成39年8月26日に至るまでに権利行使開始日を迎えなかった場合

平成39年8月27日から平成40年8月26日

②当社が消滅会社となる合併で契約承認の議案、又は当社が完全子会社となる株式交換契約若しくは株式移転計画承認の議案につき当社株主総会で承認された場合(株主総会決議が不要な場合は、当社の取締役会決議又は代表執行役の決定がなされた場合)

当該承認日の翌日から30日間

(3) 新株予約権者が募集新株予約権を放棄した場合には、かかる募集新株予約権を行使することができないものとします。

(4) 新株予約権者が死亡した場合、相続人は新株予約権を行使することができます。但し、相続人は当該新株予約権者が死亡退任した日の翌日から1年を経過する日までの間に限り、新株予約権を行使できるものとします。

- 5 当社が、合併（当社が合併により消滅する場合に限る。）、吸収分割、新設分割、株式交換又は株式移転（以上を総称して以下、「組織再編成行為」という。）をする場合において、組織再編成行為の効力発生日（吸収合併につき吸収合併の効力発生日、新設合併につき新設合併設立会社の成立の日、吸収分割につき吸収分割の効力発生日、新設分割につき新設分割設立会社の成立の日、株式交換につき株式交換の効力発生日、及び株式移転につき株式移転設立完全親会社の成立の日をいう。）の直前において残存する募集新株予約権（以下、「残存新株予約権」という。）を保有する新株予約権者に対し、それぞれの場合につき、会社法第236条第1項第8号のイからホまでに掲げる株式会社（以下、「再編成対象会社」という。）の新株予約権を以下の条件に基づきそれぞれ交付することとします。この場合においては、残存新株予約権は消滅し、再編成対象会社は新株予約権を新たに発行するものとします。但し、以下の条件に沿って再編成対象会社の新株予約権を交付する旨を、吸収合併契約、新設合併契約、吸収分割契約、新設分割計画、株式交換契約又は株式移転計画において定めた場合に限るものとします。
- (1) 交付する再編成対象会社の新株予約権の数  
新株予約権者が保有する残存新株予約権の数と同一の数をそれぞれ交付するものとします。
  - (2) 新株予約権の目的である再編成対象会社の株式の種類  
再編成対象会社の普通株式とします。
  - (3) 新株予約権の目的である再編成対象会社の株式の数  
組織再編成行為の条件等を勘案の上、(注)2に準じて決定します。
  - (4) 新株予約権の行使に際して出資される財産の価額  
交付される各新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、以下に定める再編成後払込金額に上記(3)に従って決定される当該各新株予約権の目的である再編成対象会社の株式の数を乗じて得られる金額とします。再編成後払込金額は、交付される各新株予約権を行使することにより交付を受けることができる再編成対象会社の株式1株当たり1円とします。
  - (5) 新株予約権を行使することができる期間  
上記「新株予約権の行使期間」に定める募集新株予約権を行使することができる期間の開始日と組織再編成行為の効力発生日のうちいずれか遅い日から、上記「新株予約権の行使期間」に定める募集新株予約権を行使することができる期間の満了日までとします。
  - (6) 新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金及び資本準備金に関する事項
    - ①募集新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金の額は、会社計算規則第40条第1項に従い算出される資本金等増加限度額の2分の1の金額とし、計算の結果生じる1円未満の端数は、これを切り上げるものとします。
    - ②募集新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本準備金の額は、上記①記載の資本金等増加限度額から上記①に定める増加する資本金の額を減じた額とします。
  - (7) 譲渡による新株予約権の取得の制限  
譲渡による新株予約権の取得については、再編成対象会社の取締役会の決議による承認を要するものとします。
  - (8) 募集新株予約権の取得条項  
以下の①、②、③、④又は⑤の議案につき当社株主総会で承認された場合（株主総会決議が不要の場合は、当社の取締役会決議又は代表執行役の決定がなされた場合は、取締役会が別途定める日に、当社は無償で募集新株予約権を取得することができます。
    - ①当社が消滅会社となる合併契約承認の議案
    - ②当社が分割会社となる分割契約若しくは分割計画承認の議案
    - ③当社が完全子会社となる株式交換契約若しくは株式移転計画承認の議案
    - ④当社の発行する全部の株式の内容として譲渡による当該株式の取得について当社の承認を要することについての定めを設ける定款の変更承認の議案
    - ⑤新株予約権の目的である株式の内容として譲渡による当該株式の取得について当社の承認を要すること若しくは当該種類の株式について当社が株主総会の決議によってその全部を取得することについての定めを設ける定款の変更承認の議案
  - (9) その他の募集新株予約権の行使の条件
    - ①新株予約権者は、上記「新株予約権の行使期間」の期間内において、当社の取締役（委員会設置会社における執行役を含む。）、監査役及び執行役員いずれの地位をも喪失した時に限り、新株予約権を行使できるものとします。但し、この場合、新株予約権者は、権利行使開始日から10日を経過する日までの間に限り、新株予約権を行使することができます。
    - ②上記①に関わらず、新株予約権者は、以下の1又は2に定める場合（但し、2については、新株予約権者に再編成対象会社の新株予約権が交付される場合を除く。）には、それぞれに定める期間内に限り新株予約権を行使できるものとします。
      1. 新株予約権者が平成39年8月26日に至るまでに権利行使開始日を迎えなかった場合  
平成39年8月27日から平成40年8月26日



2. 当社が消滅会社となる合併で契約承認の議案、又は当社が完全子会社となる株式交換契約若しくは株式移転計画承認の議案につき当社株主総会で承認された場合（株主総会決議が不要な場合は、当社の取締役会決議又は代表執行役の決定がなされた場合）

当該承認日の翌日から30日間

- ③新株予約権者が募集新株予約権を放棄した場合には、かかる募集新株予約権を行使することができないものとします。
- ④新株予約権者が死亡した場合、相続人は新株予約権を行使することができます。但し、相続人は当該新株予約権者が死亡退任した日の翌日から1年を経過する日までの間に限り、新株予約権を行使できるものとします。

平成23年2月9日取締役会決議		
	事業年度末現在 (平成23年3月31日)	提出日の前月末現在 (平成23年5月31日)
新株予約権の数(個)	51(注)1	51(注)1
新株予約権のうち自己新株予約権の数(個)	—	—
新株予約権の目的となる株式の種類	普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数(株)	51,000(注)2	51,000(注)2
新株予約権の行使時の払込金額	1株につき1円	同左
新株予約権の行使期間	平成23年2月26日～ 平成43年2月25日	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 1 資本組入額 —(注)3	発行価格 1 資本組入額 —(注)3
新株予約権の行使の条件	(注)4	同左
新株予約権の譲渡に関する事項	取締役会の決議による承認を要するものとする。	同左
代用払込みに関する事項	—	—
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	(注)5	同左

(注) 1 募集新株予約権1個当たりの目的となる株式数は1,000株であります。

- 2 当社が当社普通株式につき、株式分割(当社普通株式の株式無償割当てを含む。以下、株式分割の記載につき同じ。)又は株式併合を行う場合には付与株式数を次の算式により調整するものとします。

調整後付与株式数 = 調整前付与株式数 × 分割・併合の比率

調整後付与株式数は、株式分割の場合は当該株式分割の基準日の翌日以降、株式併合の場合はその効力発生日以降、これを適用します。但し、剰余金の額を減少して資本金又は準備金を増加する議案が当社株主総会において承認されることを条件として株式分割が行われる場合で、当該株主総会の終結の日以前の日を株式分割のための基準日とする場合は、調整後付与株式数は、当該株主総会の終結の日の翌日以降、当該基準日の翌日に遡及してこれを適用します。

また、上記のほか、付与株式数の調整を必要とするやむを得ない事由が生じたときは、合理的な範囲で付与株式数を調整します。

なお、上記の調整の結果生じる1株未満の端数は、これを切り捨てるものとします。

また、付与株式数の調整を行うときは、当社は調整後付与株式数を適用する日の前日までに、必要な事項を新株予約権原簿に記載された各募集新株予約権を保有する者(以下、「新株予約権者」という。)に通知又は公告します。但し、当該適用の日の前日までに通知又は公告を行うことができない場合には、以後速やかに通知又は公告するものとします。

- 3 自己株式を充当することとしているため記載しておりません。

- 4 (1) 新株予約権者は、上記「新株予約権の行使期間」の期間内において、当社の取締役(委員会設置会社における執行役を含む。)、監査役及び執行役員のいずれの地位をも喪失した時に限り、新株予約権を行使できるものとします。但し、この場合、新株予約権者は、地位を喪失した日の翌日(以下、「権利行使開始日」という。)から10日を経過する日までの間に限り、新株予約権を行使することができます。

(2) 上記(1)に関わらず、新株予約権者は、以下の①又は②に定める場合(但し、②については、新株予約権者に再編成対象会社の新株予約権が交付される場合を除く。)には、それぞれに定める期間内に限り新株予約権を行使できるものとします。

- ①新株予約権者が平成42年2月25日に至るまでに権利行使開始日を迎えなかった場合  
平成42年2月26日から平成43年2月25日
  - ②当社が消滅会社となる合併で契約承認の議案、又は当社が完全子会社となる株式交換契約若しくは株式移転計画承認の議案につき当社株主総会で承認された場合（株主総会決議が不要な場合は、当社の取締役会決議又は代表執行役の決定がなされた場合）  
当該承認日の翌日から30日間
  - (3) 新株予約権者が募集新株予約権を放棄した場合には、かかる募集新株予約権を行使することができないものとします。
  - (4) 新株予約権者が死亡した場合、相続人は新株予約権を行使することができます。但し、相続人は当該新株予約権者が死亡退任した日の翌日から1年を経過する日までの間に限り、新株予約権を行使できるものとします。
- 5 当社が、合併（当社が合併により消滅する場合に限る。）、吸収分割、新設分割、株式交換又は株式移転（以上を総称して以下、「組織再編成行為」という。）をする場合において、組織再編成行為の効力発生日（吸収合併につき吸収合併の効力発生日、新設合併につき新設合併設立会社の成立の日、吸収分割につき吸収分割の効力発生日、新設分割につき新設分割設立会社の成立の日、株式交換につき株式交換の効力発生日、及び株式移転につき株式移転設立完全親会社の成立の日をいう。）の直前において残存する募集新株予約権（以下、「残存新株予約権」という。）を保有する新株予約権者に対し、それぞれの場合につき、会社法第236条第1項第8号のイからホまでに掲げる株式会社（以下、「再編成対象会社」という。）の新株予約権を以下の条件に基づきそれぞれ交付することとします。この場合においては、残存新株予約権は消滅し、再編成対象会社は新株予約権を新たに発行するものとします。但し、以下の条件に沿って再編成対象会社の新株予約権を交付する旨を、吸収合併契約、新設合併契約、吸収分割契約、新設分割計画、株式交換契約又は株式移転計画において定めた場合に限るものとします。
- (1) 交付する再編成対象会社の新株予約権の数  
新株予約権者が保有する残存新株予約権の数と同一の数をそれぞれ交付するものとします。
  - (2) 新株予約権の目的である再編成対象会社の株式の種類  
再編成対象会社の普通株式とします。
  - (3) 新株予約権の目的である再編成対象会社の株式の数  
組織再編成行為の条件等を勘案の上、（注）2に準じて決定します。
  - (4) 新株予約権の行使に際して出資される財産の価額  
交付される各新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、以下に定める再編成後払込金額に上記(3)に従って決定される当該各新株予約権の目的である再編成対象会社の株式の数を乗じて得られる金額とします。再編成後払込金額は、交付される各新株予約権を行使することにより交付を受けることができる再編成対象会社の株式1株当たり1円とします。
  - (5) 新株予約権を行使することができる期間  
上記「新株予約権の行使期間」に定める募集新株予約権を行使することができる期間の開始日と組織再編成行為の効力発生日のうちいずれか遅い日から、上記「新株予約権の行使期間」に定める募集新株予約権を行使することができる期間の満了日までとします。
  - (6) 新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金及び資本準備金に関する事項
    - ①募集新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金の額は、会社計算規則第40条第1項に従い算出される資本金等増加限度額の2分の1の金額とし、計算の結果生じる1円未満の端数は、これを切り上げるものとします。
    - ②募集新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本準備金の額は、上記①記載の資本金等増加限度額から上記①に定める増加する資本金の額を減じた額とします。
  - (7) 譲渡による新株予約権の取得の制限  
譲渡による新株予約権の取得については、再編成対象会社の取締役会の決議による承認を要するものとします。
  - (8) 募集新株予約権の取得条項  
以下の①、②、③、④又は⑤の議案につき当社株主総会で承認された場合（株主総会決議が不要な場合は、当社の取締役会決議又は代表執行役の決定がなされた場合）は、取締役会が別途定める日に、当社は無償で募集新株予約権を取得することができます。
    - ①当社が消滅会社となる合併契約承認の議案
    - ②当社が分割会社となる分割契約若しくは分割計画承認の議案
    - ③当社が完全子会社となる株式交換契約若しくは株式移転計画承認の議案
    - ④当社の発行する全部の株式の内容として譲渡による当該株式の取得について当社の承認を要することについての定めを設ける定款の変更承認の議案
    - ⑤新株予約権の目的である株式の内容として譲渡による当該株式の取得について当社の承認を要すること若しくは当該種類の株式について当社が株主総会の決議によってその全部を取得することについての定めを設ける定款の変更承認の議案

(9) その他の募集新株予約権の行使の条件

- ①新株予約権者は、上記「新株予約権の行使期間」の期間内において、当社の取締役（委員会設置会社における執行役を含む。）、監査役及び執行役員のいずれの地位をも喪失した時に限り、新株予約権を行使できるものとします。但し、この場合、新株予約権者は、権利行使開始日から10日を経過する日までの間に限り、新株予約権を行使することができます。
- ②上記①に関わらず、新株予約権者は、以下の1又は2に定める場合（但し、2については、新株予約権者に再編成対象会社の新株予約権が交付される場合を除く。）には、それぞれに定める期間内に限り新株予約権を行使できるものとします。
1. 新株予約権者が平成42年2月25日に至るまでに権利行使開始日を迎えなかった場合  
平成42年2月26日から平成43年2月25日
  2. 当社が消滅会社となる合併で契約承認の議案、又は当社が完全子会社となる株式交換契約若しくは株式移転計画承認の議案につき当社株主総会で承認された場合（株主総会決議が不要な場合は、当社の取締役会決議又は代表執行役の決定がなされた場合）  
当該承認日の翌日から30日間
- ③新株予約権者が募集新株予約権を放棄した場合には、かかる募集新株予約権を行使することができないものとします。
- ④新株予約権者が死亡した場合、相続人は新株予約権を行使することができます。但し、相続人は当該新株予約権者が死亡退任した日の翌日から1年を経過する日までの間に限り、新株予約権を行使できるものとします。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

(5) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成20年11月26日	△2,000	25,777	—	2,509	—	2,229

(注) 自己株式の消却による減少であります。

## (6) 【所有者別状況】

平成23年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数1,000株)							単元未満株式の状況(株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)	1	15	15	69	18	2	3,248	3,368	—
所有株式数(単元)	15	4,705	206	4,050	669	13	15,848	25,506	271,600
所有株式数の割合(%)	0.06	18.45	0.81	15.88	2.62	0.05	62.13	100.00	—

(注) 自己株式1,277,912株は「個人その他」に1,277単元、「単元未満株式の状況」に912株、また証券保管振替機構名義の株式8,000株は「その他の法人」に8単元それぞれ含めて記載しております。

## (7) 【大株主の状況】

平成23年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
九州電力株式会社	福岡市中央区渡辺通二丁目1番82号	1,666	6.46
株式会社福岡銀行	福岡市中央区天神二丁目13番1号	1,200	4.65
日本タングステン従業員持株会	福岡市博多区美野島一丁目2番8号	832	3.23
みずほ信託銀行株式会社	東京都中央区八重洲一丁目2番1号	643	2.49
明治安田生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内二丁目1番1号	601	2.33
株式会社西日本シティ銀行	福岡市博多区博多駅前三丁目1番1号	509	1.97
株式会社佐賀銀行	佐賀県佐賀市唐人二丁目7番20号	500	1.93
日立金属株式会社	東京都港区芝浦一丁目2番1号	500	1.93
日本タングステン取引先持株会	福岡市博多区美野島一丁目2番8号	459	1.78
日本生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内一丁目6番6号	410	1.59
計	—	7,323	28.41

(注) 1 所有株式数は、千株未満を切捨てて表示しております。

2 上記のほか、当社が実質保有する自己株式数は1,277千株で、発行済株式総数に対する所有株式数の割合は4.95%であります。

## (8) 【議決権の状況】

## ① 【発行済株式】

平成23年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 1,277,000	—	—
完全議決権株式(その他)	普通株式 24,229,000	24,229	—
単元未満株式	普通株式 271,600	—	1 単元(1,000株)未満の株式
発行済株式総数	25,777,600	—	—
総株主の議決権	—	24,229	—

(注) 1 証券保管振替機構名義の株式8,000株(議決権8個)は、「完全議決権株式(その他)」の普通株式に含めて記載しております。

2 「単元未満株式」には当社所有の自己株式912株が含まれております。

## ② 【自己株式等】

平成23年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) 日本タングステン株式会社	福岡市博多区美野島 一丁目2番8号	1,277,000	—	1,277,000	4.95
計	—	1,277,000	—	1,277,000	4.95

## (9) 【ストックオプション制度の内容】

決議年月日	平成19年8月10日
付与対象者の区分及び人数	当社取締役7名（社外取締役を除く。）
新株予約権の目的となる株式の種類	「（2）新株予約権等の状況」に記載しております。
株式の数	同上
新株予約権の行使時の払込金額	同上
新株予約権の行使期間	同上
新株予約権の行使の条件	同上
新株予約権の譲渡に関する事項	同上
代用払込みに関する事項	—
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	「（2）新株予約権等の状況」に記載しております。

決議年月日	平成20年8月8日
付与対象者の区分及び人数	当社取締役6名（社外取締役を除く。）
新株予約権の目的となる株式の種類	「（2）新株予約権等の状況」に記載しております。
株式の数	同上
新株予約権の行使時の払込金額	同上
新株予約権の行使期間	同上
新株予約権の行使の条件	同上
新株予約権の譲渡に関する事項	同上
代用払込みに関する事項	—
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	「（2）新株予約権等の状況」に記載しております。

決議年月日	平成23年2月9日
付与対象者の区分及び人数	当社取締役7名（社外取締役を除く。）
新株予約権の目的となる株式の種類	「（2）新株予約権等の状況」に記載しております。
株式の数	同上
新株予約権の行使時の払込金額	同上
新株予約権の行使期間	同上
新株予約権の行使の条件	同上
新株予約権の譲渡に関する事項	同上
代用払込みに関する事項	—
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	「（2）新株予約権等の状況」に記載しております。

## 2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号による普通株式の取得

### (1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

### (2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

### (3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

会社法第155条第7号による取得

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	8,767	1,274,272
当期間における取得自己株式	340	88,740

(注) 当期間における取得自己株式数には平成23年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含まれておりません。

### (4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他(新株予約権の権利行使)	49,000	10,731,000	—	—
保有自己株式数	1,277,912	—	1,278,252	—

(注) 当期間における保有自己株式数には平成23年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含まれておりません。

### 3 【配当政策】

当社は株主の皆様への継続かつ安定的な利益配当を基本方針とし、当期の業績、今後の事業展開に必要な内部留保の充実等を総合的に勘案し、配当を行っております。

当社の剰余金の配当は、中間配当及び期末配当の年2回を基本的な方針としており、決定機関は取締役会であります。また、資本効率の向上を目的として、適宜自己株式を取得し、配当とあわせて株主のみなさまへの利益還元に努めてまいります。内部留保金につきましては、今後の事業展開等に必要となる投資に、有効に活用してまいります。

こうした方針のもと、当事業年度の期末配当金につきましては、1株につき2円としております。これにより、中間配当金（1株につき1円50銭）を含めると、年間配当金は1株につき3円50銭となりました。

なお、当社は会社法第454条第5項に規定する中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。

(注) 基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額（百万円）	1株当たり配当額
平成22年11月11日取締役会決議	36	1円50銭
平成23年5月11日取締役会決議	48	2円

### 4 【株価の推移】

#### (1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第96期	第97期	第98期	第99期	第100期
決算年月	平成19年3月	平成20年3月	平成21年3月	平成22年3月	平成23年3月
最高(円)	460	417	254	180	350
最低(円)	268	195	111	112	105

(注) 最高・最低株価は、いずれも東京証券取引所市場第二部によるものであります。

#### (2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成22年 10月	11月	12月	平成23年 1月	2月	3月
最高(円)	129	141	149	168	175	350
最低(円)	120	118	132	144	154	105

(注) 最高・最低株価は、いずれも東京証券取引所市場第二部によるものであります。



## 5 【役員の状況】

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (株)
取締役会長		吉田省三	昭和18年4月20日生	平成13年7月 平成15年6月 平成15年6月 平成17年12月 平成22年3月 平成22年6月	九州電力株式会社執行役員大分支店長 同社退職 当社取締役社長 S V ニッタン株式会社代表取締役副会長(現) 上海電科電工材料有限公司董事長(現) 当社取締役会長(現)	(注)3	129,000
代表取締役 取締役社長		馬場信哉	昭和31年7月30日生	昭和59年4月 平成16年6月 平成18年6月 平成21年6月 平成22年4月 平成22年6月	当社入社 当社セラミック部長兼宇美工場長 当社経営企画部長 当社取締役業務本部長兼経営企画部長、コンプライアンス担当 当社取締役業務本部長、コンプライアンス担当 当社取締役社長(現)	(注)3	33,000
常務取締役	営業本部長	坂口茂也	昭和27年9月4日生	昭和52年4月 平成13年6月 平成17年4月 平成18年6月 平成21年6月 平成22年4月 平成22年6月 平成23年4月	当社入社 当社研究開発センター長 当社超硬部品部長 当社取締役営業部長 当社取締役営業本部長兼営業部長 当社取締役営業本部長 当社常務取締役営業本部長(現) 恩梯(上海)商貿有限公司董事長(現)	(注)3	33,000
常務取締役	技術製造本部長 兼基山工場長	徳本啓	昭和32年4月3日生	昭和60年2月 平成17年4月 平成21年4月 平成21年6月 平成22年6月 平成23年3月 平成23年4月	当社入社 当社管理部長 当社基山工場長 当社取締役製造本部長兼基山工場長 当社常務取締役製造本部長兼基山工場長、基礎技術センター担当 上海三義精密模具有限公司董事長(現) 常務取締役技術製造本部長兼基山工場長(現)	(注)3	30,000
取締役	飯塚工場長 兼金材部品部長	高嶋好夫	昭和30年12月5日生	昭和57年4月 平成13年12月 平成16年4月 平成21年4月 平成22年4月 平成22年6月	当社入社 当社品質保証部長 当社電材部品部長 当社管理部長 当社飯塚工場長兼金材部品部長 当社取締役飯塚工場長兼金材部品部長(現)	(注)3	12,000
取締役	業務本部長 兼経理部長、コンプライアンス担当	大島正信	昭和34年3月31日生	昭和57年4月 平成20年6月 平成22年6月	当社入社 当社総務人事部長 当社取締役業務本部長兼経理部長、コンプライアンス担当(現)	(注)3	14,000
取締役	四平恩梯タングステン 高技術材料有限公司 総経理	後藤信志	昭和34年3月19日生	昭和57年4月 平成18年6月 平成21年4月 平成22年4月 平成22年6月 平成22年12月	当社入社 当社金材部品部長兼飯塚工場長 当社営業部営業推進室長 当社営業部長 当社取締役営業部長 当社取締役四平恩梯タングステン高技術材料有限公司総経理(現)	(注)3	8,000

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (株)
取締役		山元春義	昭和22年4月25日生	平成17年7月 平成19年6月 平成21年3月 平成21年6月 平成23年6月 平成23年6月	九州電力株式会社執行役員大分支店長 同社上席執行役員川内原子力発電所長 同社上席執行役員川内原子力総合事務所長 同社取締役常務執行役員川内原子力総合事務所長 同社代表取締役副社長(現) 当社取締役(現)	(注)3	—
常勤監査役		増田秀雄	昭和23年9月14日生	昭和42年4月 平成16年4月 平成20年6月	当社入社 当社総務人事部長 当社監査役(現)	(注)4	28,000
監査役		小島庸匡	昭和19年3月1日生	昭和44年1月 昭和46年3月 昭和58年7月 平成9年7月 平成13年6月 平成16年7月 平成19年8月 平成20年6月	監査法人中央会計事務所入所 公認会計士登録 同監査法人代表社員 同監査法人福岡事務所長 日本公認会計士協会北部九州会会長 日本公認会計士協会本部副会長 小島公認会計士事務所代表(現) 当社監査役(現)	(注)4	—
監査役		斉藤芳朗	昭和33年12月5日生	昭和62年3月 昭和62年4月 昭和63年8月 平成5年4月 平成17年1月 平成21年6月	司法研修所(第39期)終了 福岡県弁護士会入会 弁護士登録 和智・徳永・松崎法律事務所勤務 徳永・松崎法律事務所勤務 徳永・松崎法律事務所パートナー弁護士 徳永・松崎・斉藤法律事務所代表弁護士(現) 当社監査役(現)	(注)5	—
監査役		渋田民夫	昭和21年11月11日生	平成2年2月 平成6年7月 平成9年8月 平成12年6月 平成15年6月 平成19年6月 平成22年6月	株式会社西日本新聞社東京支社報道部次長 同社ワシントン支局長 同社東京支社外報部部長 同社編集局次長兼社会部長 同社論説委員会委員長 同社特別論説委員(現) 当社監査役(現)	(注)6	—
計							287,000

- (注) 1 取締役 山元春義は、会社法第2条第15号に定める社外取締役であります。
- 2 監査役 小島庸匡、監査役 斉藤芳朗及び監査役 渋田民夫は会社法第2条第16号に定める社外監査役であります。
- 3 取締役の任期は、平成23年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成24年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 4 監査役 増田秀雄及び小島庸匡の任期は、平成20年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成24年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 5 監査役 斉藤芳朗の任期は、平成21年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成25年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 6 監査役 渋田民夫の任期は、平成22年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成26年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。

## 6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

### (1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

当社は、法令を順守し適正な企業行動を通じて、経営の透明性、効率性を確保し、経営の監督と執行及び監査が有効に機能した統治体制のもとで企業価値を向上させ、株主、顧客、地域社会から信頼される企業となるよう、内部監査機能の充実、コンプライアンスの徹底した取り組みによるコーポレート・ガバナンスの充実を図っております。

#### ①企業統治の体制

##### 1) 企業統治の体制の概要及び企業統治の体制を採用する理由

当社は、監査役制度を採用しております。

有価証券報告書提出日現在の取締役は、8名（うち社外取締役1名）、監査役は4名（うち社外監査役3名）であります。

監査体制におきましては、社外監査役3名を含む監査役4名が監査を実施しております。

当社の常勤監査役は、取締役会をはじめ主要な会議に出席し、必要に応じ意見を述べるほか、会計監査人、社内スタッフなどから報告を受けるとともに、子会社、関連会社への監査を行っております。

なお、社外監査役のうち、1名は公認会計士であり、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。

内部監査体制におきましては、取締役社長直属の機関として内部監査室を設置しております。内部監査室の人員は1名であり、「内部監査規程」に基づき、会社の業務運営が経営方針、諸規程に準拠して適正に行われているかを監査し、その結果を取締役社長に報告しております。また、内部監査室は、監査計画を監査役に報告するとともに、その実施状況及び内容について適時報告しております。

内部統制体制におきましては、取締役社長をはじめ、経営企画部を主幹部門として、その整備、運用を行っております。内部監査室は、内部統制の整備、運用状況を社内規程に基づいて監査を行い、監査役は監査内容について確認しております。また、会計監査人による監査においては、監査役は、監査方法及び結果の妥当性を確認しております。

取締役会は、法令・定款に基づき決議を要する事項のほか、重要事項に関して審議し、また、業務執行状況においても随時報告がなされております。また、業務執行に関する基本的事項及び重要事項に係る意思決定を機動的に行うことを目的に、常勤役員で構成する常務会を、原則として毎週開催しております。

なお、当社は経営陣の選任につき、株主の意向をより適時に反映させることを目的として、取締役の任期を1年としております。

リスクマネジメント推進体制におきましては、取締役社長を委員長とするリスクマネジメント委員会を設置しております。万一、経営に重大な影響を与える緊急事態等が発生した場合、取締役社長を本部長とし、担当役員および関係部門長を加えた緊急対策本部を設置し、全社を統括してその対応にあたることとしております。

コンプライアンス体制におきましては、法令を順守し適正な企業行動を通じてガバナンス機能を充実させるため、コンプライアンス担当役員を1名設置しております。

情報開示体制におきましては、取締役社長を委員長とし、開示情報に関する担当役員および担当部長で構成する情報開示委員会を設置し、情報開示の適正性の確保に努めております。

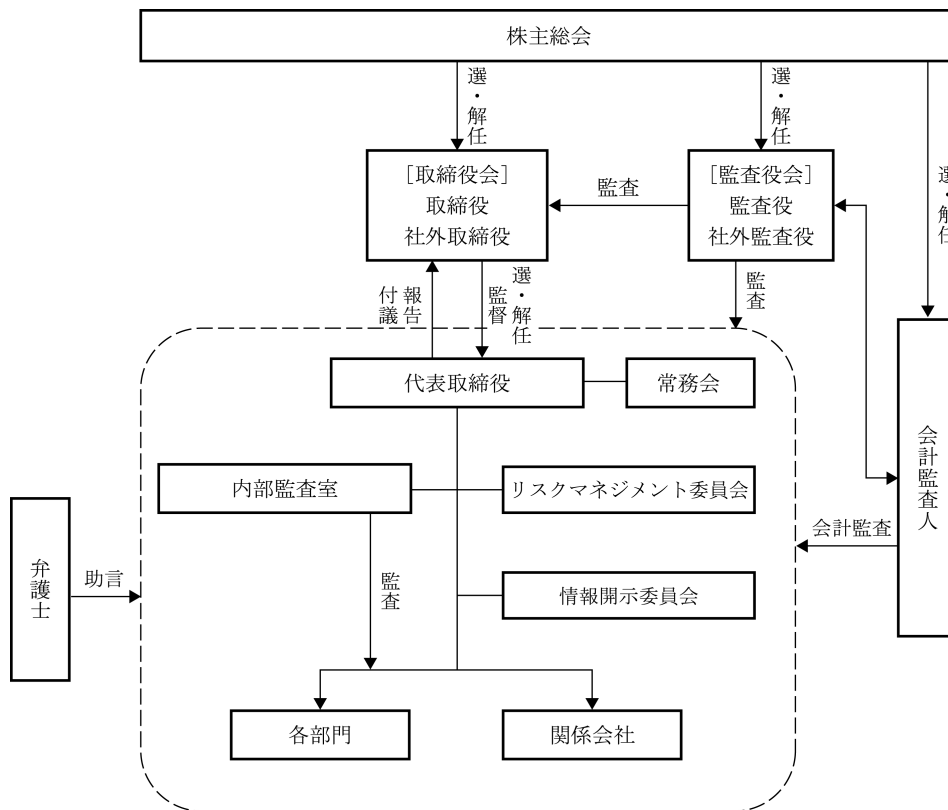
当社は、会計監査人として、有限責任監査法人トーマツを選任し、会社法及び金融商品取引法の監査を受けているほか、会計処理並びに監査に関する諸事項について随時確認し、財務諸表の適正性の確保と維持に努めております。

常勤監査役と会計監査人は、監査計画や監査報告等に関する定期的な会合のほか、必要に応じて情報交換を行うなど、緊密に連携をとっております。また、必要に応じて会計監査人の往査状況を把握し、独立性を確認しております。

当社は、顧問弁護士として2法律事務所と顧問契約を結んでおり、必要に応じ、アドバイスを受けております。

以上の体制をとることにより、経営の機動性や効率性を確保しながら、かつ十分な統制機能を働かせることが可能であると判断しております。

## 2) コーポレート・ガバナンス体制（平成23年3月31日現在）



## 3) 内部統制システム並びにリスク管理体制の整備状況

### ア. 取締役・使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

当社及び当社グループはコンプライアンスを経営の基本方針とし、企業倫理の基本として「日本タングステン企業行動憲章」及び「日本タングステン従業員行動規範」を定めております。コンプライアンス推進体制は、コンプライアンス統括責任者としてコンプライアンス担当役員が全社のコンプライアンスを統括し、コンプライアンス統括部門がコンプライアンスの推進を行っております。また、各事業所・子会社にコンプライアンス担当者を置いて全役員・従業員が法令、社内規程及び社会規範等の順守及びその推進を図っております。さらに、これらの実効性を強化するため、グループ共通のコンプライアンス・マニュアルを策定するとともに、グループ内通報システムの「社内通報制度・コンプライアンス相談窓口」を設置しております。内部監査室はコンプライアンス推進体制全般について独立した立場でモニタリング活動を実施しております。なお、市民生活の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力や団体に対しては、社会の信頼関係を損なうことのないよう、グループ全体が毅然とした態度で対応し、一切の関係を遮断しております。

イ. 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

当社は取締役会等の重要な会議の議事録、稟議書その他職務の執行に係る情報の取り扱いについて「情報管理規程」を定め、適時、適切に保存管理し、取締役及び監査役は常時これらの文書及び電子情報を閲覧できるものとしております。これら管理体制及び規程は定期的にその有効性を検証し、適宜最適化を図るものとしております。

ウ. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

当社は事業運営に影響を及ぼす恐れのある様々なリスクへの適切な対応を行い、経営基盤の安定化を図るとともに、社会的損失をできる限り発生させないように、当社及び当社グループにおけるリスクマネジメントに関する全般的事項を定めた「リスクマネジメント規程」を制定しております。また、全社のリスクマネジメント推進体制として、取締役社長を委員長とするリスクマネジメント委員会を設置し、各部門及び各事業所は「職制規程」においてリスク管理について規定し、重要なリスク及び個別案件のリスク等への対応策を事業計画に織り込み管理しております。万一、経営に重大な影響を与える緊急事態等が発生した場合は、取締役社長を本部長とする緊急対策本部を設置し、全社を統括してその対応にあたることとしております。

エ. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

当社は重要事項の決定並びに取締役の業務の執行状況の監督を行うための定例の取締役会のほか、常勤取締役をメンバーとする常務会を定期的に開催し、業務執行に関する基本的事項及び重要事項に係る意思決定を機動的に行っております。業務運営については、目標の明確な設定、採算の徹底を通じて市場競争力の強化を図るため、当社及び各事業グループの目標値を中期経営計画並びに年度予算として策定し、これに基づく業績管理を行っております。また、社内規程に定める職務権限及び意思決定ルール の制定、及び専門知識を有する人材の育成・強化と外部専門家の助言を受けながら適正かつ効率的に職務の執行が行われる体制をとっております。

オ. 当社及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制

当社は当社グループの管理について「関係会社管理規程」に従って、経営についてはその自主性を尊重しつつ、定期的な事業内容の報告と重要案件についての事前協議を行っております。また、グループ会社との連携を強化し、グループ経営の一体化を図るため、関係会社の統括的な管理を経営企画部が行い、関係会社との協議や助言を行っております。また、内部監査室は当社の子会社管理状況及び子会社の業務活動について定期的に監査を行っております。

カ. 監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する体制並びにその使用人の取締役からの独立性に関する事項

当社は監査役 の職務を補助すべきスタッフを置き、監査役スタッフ業務及び事務局業務を行っております。監査役スタッフは、そのスタッフ業務の執行において、その指揮命令権限は監査役に帰属し、その人事異動、人事評価に関しても、取締役からの独立性が担保されており、また、その人事については取締役と監査役が意見交換を行うこととしております。

キ．取締役及び使用人が監査役に報告をするための体制その他の監査役への報告に関する体制

監査役は、取締役会、常務会などの重要な会議に出席し、また、稟議書その他業務執行に関する重要な文書を開覧し、必要に応じて取締役又は従業員にその説明を求めることとしております。取締役は、会社に著しい損害をおよぼす恐れのある事象及びその事実があることを知ったときは、直ちに監査役に報告しております。また、「社内通報制度・コンプライアンス相談窓口」に寄せられた情報が監査役に報告される体制としております。内部監査室は監査役へ内部監査の実施状況及びその内容について適時に報告しております。

ク．その他監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制

監査役は定期的に取り締役社長と意見交換を行い、重要な情報を共有できるようにしております。また、内部監査室及び会計監査人と情報交換を行い、緊密な連携を図っております。

#### 4) 社外取締役及び社外監査役

当社は、外部からの客観的及び中立した経営監視機能を強化することを目的に社外取締役1名及び社外監査役3名を選任しております。社外取締役及び社外監査役は、経営判断、財務、法務、公共性及び倫理性等、幅広い面から当社の経営に対し、適切な助言、意見を行っております。また、選任においては、一般株主と利益相反が生じるおそれのない独立性を有する者を選任の方針としております。

社外取締役山元春義氏は、当社の筆頭株主である九州電力株式会社の要職に就任しております。取引関係その他の利害関係はありません。

社外取締役は、取締役会において、議案審議等に経営者の視点から必要な発言を行い、社外監査役は、取締役会及び監査役会において議案審議等に必要な意見を述べております。

社外監査役斉藤芳郎氏は、徳永・松崎・斉藤法律事務所の代表弁護士であり、当事務所と顧問契約を締結しております。なお、資金的関係、取引関係その他の利害関係はありません。また、社外監査役小島庸匡氏及び洪田民夫氏との人的関係、資金的関係、取引関係その他の利害関係はありません。

社外監査役は、財務報告における内部統制監査の整備、運用状況及び監査の状況について、常勤監査役より適時報告を受け、意見等を行っております。また、社外監査役は、取締役社長と意見交換を行い、業務の執行状況等について把握するほか、常勤監査役より、内部監査、監査役監査の状況や、会計監査人による監査の状況等について、適時、報告を受け、意見及び助言を行っております。

#### 5) 会計監査の状況

当社の会計監査業務を執行した公認会計士は、久留和夫氏及び内藤真一氏であり、両氏は有限責任監査法人トーマツに所属しております。

また、当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士3名、公認会計士試験合格者11名、その他2名であります。

#### 6) 責任限定契約の内容の概要

当社は、社外取締役及び社外監査役との間において、会社法第423条第1項の損害賠償責任について、その職務を行うにつき善意でありかつ重大な過失がなかったときは、会社法第427条第1項に定める最低責任限度額を限度とする契約を締結しております。

7) 取締役に係る別段の定め

当社の取締役は、10名以内とする旨を定款で定めております。

また、当社の取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を定款で定めております。

8) 株主総会決議事項を取締役会で決議することができることとした事項及びその理由並びに取締役会決議事項を株主総会では決議できないことを定款で定めた事項及びその理由

当社は、経済情勢の変化に対応して財務政策等の経営諸政策を機動的に遂行するとともに資本効率の向上を図るため、剰余金の配当、自己株式の取得等会社法第459条第1項各号の事項については、法令に別段の定めがある場合を除き、株主総会の決議によらず、取締役会の決議により定める旨を定款で定めております。

9) 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするためであります。

② 役員の報酬等

イ 提出会社の役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)			対象となる 役員の員数 (名)
		基本報酬	ストック・ オプション	賞与	
取締役 (社外取締役を除く。)	105	78	5	21	9
監査役 (社外監査役を除く。)	12	12	—	—	1
社外役員	11	11	—	—	5

(注) 平成19年6月28日開催の第96期定時株主総会において、取締役報酬年額1億54百万円以内(但し、使用人兼務取締役の使用人分は含んでおりません)、監査役報酬年額48百万円以内とご承認いただいております。また、当該取締役報酬とは別枠として取締役に対するストックオプションとしての新株予約権に関する報酬等の額を年額30百万円を上限として設ける旨をご承認いただいております。

ロ 提出会社の役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載していません。

ハ 使用人兼務役員の使用人給与のうち、重要なもの

総額(百万円)	対象となる役員の 員数(名)	内容
27	7	使用人としての給与及び賞与であります。

ニ 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針

役員報酬は、株主総会の決議により、取締役及び監査役の報酬等の限度額を定めております。また、ストックオプションとしての新株予約権に関する報酬等の額を取締役報酬とは別に定めております。なお、報酬額の決定については、取締役は取締役会の決議により決定し、監査役については、監査役会の協議により決定しております。

役員の報酬等の算定方法については、「役員報酬取扱内規」に基づき決定しており、1年毎に、業績の状況、役位等により決定しております。

③株式の保有状況

イ 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

銘柄数 18銘柄  
 貸借対照表計上額の合計額 1,069百万円

ロ 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的

(前事業年度)

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
(株)ふくおかフィナンシャルグループ	657,758	261	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
ウシオ電機(株)	159,941	253	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
三菱電機(株)	232,000	199	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
九州電力(株)	51,536	104	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	92,840	45	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
(株)西日本シティ銀行	131,902	36	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
(株)高岳製作所	96,587	31	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
(株)今仙電機製作所	20,687	24	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
日本ピラー工業(株)	23,540	14	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
イーグル工業(株)	16,191	11	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有

(注) (株)今仙電機製作所、日本ピラー工業(株)及びイーグル工業(株)は、貸借対照表計上額が資本金額の100分の1以下ではありますが、上位10銘柄について記載しております。



(当事業年度)

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
ウシオ電機(株)	159,941	260	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
三菱電機(株)	232,000	227	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
(株)ふくおかフィナンシャルグループ	657,758	227	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
九州電力(株)	51,536	83	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
宇部マテリアルズ(株)	250,000	81	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	92,840	35	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
(株)高岳製作所	96,587	35	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
(株)西日本シティ銀行	131,902	31	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
(株)今仙電機製作所	20,687	23	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
日本ピラー工業(株)	23,540	18	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
イーグル工業(株)	16,191	14	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
(株)正興電機製作所	16,516	7	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
(株)瑞光	5,000	6	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
大王製紙(株)	10,000	6	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
みずほ信託銀行(株)	78,318	5	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有
澤藤電機(株)	2,000	0	円滑な取引関係を維持するために取得後、継続保有

(注) (株)今仙電機製作所、日本ピラー工業(株)、イーグル工業(株)、(株)正興電機製作所、(株)瑞光、大王製紙(株)、みずほ信託銀行(株)及び澤藤電機(株)は、貸借対照表計上額が資本金額の100分の1以下であります。

みなし保有株式

該当事項はありません。

ハ 保有目的が純投資目的である投資株式

	前事業年度 (百万円)	当事業年度 (百万円)			
	貸借対照表 計上額の合計額	貸借対照表 計上額の合計額	受取配当金 の合計額	売却損益 の合計額	評価損益 の合計額
非上場株式	2	2	0	—	(注)
非上場株式以外の株式	290	166	4	87	140

(注) 非上場株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「評価損益の合計額」は記載しておりません。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に 基づく報酬(百万円)	非監査業務に 基づく報酬(百万円)	監査証明業務に 基づく報酬(百万円)	非監査業務に 基づく報酬(百万円)
提出会社	29	—	29	2
連結子会社	—	—	—	—
計	29	—	29	2

② 【その他重要な報酬の内容】

該当事項はありません。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

当連結会計年度は、国際財務報告基準（IFRS）に関する助言・指導業務であります。

④ 【監査報酬の決定方針】

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬の決定方針は策定しておりませんが、監査公認会計士等からの見積提案をもとに、当社の規模・業務の特性等の観点から、監査日数及び監査従事者の構成等の要素を勘案して検討し、監査役会の同意を得て、取締役会で決定する手続を実施しております。

## 第5 【経理の状況】

### 1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号。以下「連結財務諸表規則」という。)に基づいて作成しております。

なお、前連結会計年度(平成21年4月1日から平成22年3月31日まで)は、改正前の連結財務諸表規則に基づき、当連結会計年度(平成22年4月1日から平成23年3月31日まで)は、改正後の連結財務諸表規則に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

なお、前事業年度(平成21年4月1日から平成22年3月31日まで)は、改正前の財務諸表等規則に基づき、当事業年度(平成22年4月1日から平成23年3月31日まで)は、改正後の財務諸表等規則に基づいて作成しております。

### 2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、前連結会計年度(平成21年4月1日から平成22年3月31日まで)及び前事業年度(平成21年4月1日から平成22年3月31日まで)並びに当連結会計年度(平成22年4月1日から平成23年3月31日まで)及び当事業年度(平成22年4月1日から平成23年3月31日まで)の連結財務諸表及び財務諸表について、有限責任監査法人トーマツにより監査を受けております。

### 3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、以下のとおり連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。

会計基準等の内容を適切に把握できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、会計基準等の変更等についての情報を得ております。

また、監査法人等が主催する各種セミナーに定期的に参加しております。

1 【連結財務諸表等】  
 (1) 【連結財務諸表】  
 ① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成22年3月31日)	当連結会計年度 (平成23年3月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	2,735	2,476
受取手形及び売掛金	3,226	3,383
商品及び製品	246	443
仕掛品	877	1,149
原材料及び貯蔵品	916	915
繰延税金資産	0	1
その他	91	387
貸倒引当金	△5	△4
流動資産合計	8,089	8,753
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	6,220	6,327
減価償却累計額	△3,721	△3,939
建物及び構築物（純額）	2,498	2,388
機械装置及び運搬具	10,646	10,983
減価償却累計額	△9,662	△9,900
機械装置及び運搬具（純額）	983	1,083
工具、器具及び備品	1,097	1,115
減価償却累計額	△1,025	△1,045
工具、器具及び備品（純額）	71	69
土地	285	292
リース資産	7	7
減価償却累計額	△2	△3
リース資産（純額）	5	3
建設仮勘定	156	120
有形固定資産合計	*1 4,001	*1 3,958
無形固定資産		
のれん	—	45
リース資産	30	21
その他	8	6
無形固定資産合計	38	73
投資その他の資産		
投資有価証券	*2 1,808	*2 1,748
賃貸不動産	3,211	3,211
減価償却累計額	△1,547	△1,599
賃貸不動産（純額）	*1 1,663	*1 1,611
その他	*2 270	*2 110
貸倒引当金	△89	△27
投資その他の資産合計	3,653	3,444
固定資産合計	7,693	7,476
資産合計	15,783	16,229

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成22年3月31日)	当連結会計年度 (平成23年3月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
支払手形及び買掛金	900	1,514
短期借入金	※1 2,870	※1 2,734
リース債務	10	10
未払法人税等	24	27
賞与引当金	233	290
役員賞与引当金	—	21
その他	406	407
流動負債合計	4,445	5,005
固定負債		
長期借入金	※1 1,917	※1 1,441
リース債務	26	16
長期未払金	49	31
繰延税金負債	1,016	948
退職給付引当金	526	517
資産除去債務	—	25
その他	291	230
固定負債合計	3,829	3,211
負債合計	8,275	8,217
<b>純資産の部</b>		
株主資本		
資本金	2,509	2,509
資本剰余金	2,229	2,229
利益剰余金	2,677	2,990
自己株式	△289	△279
株主資本合計	7,126	7,448
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	546	482
為替換算調整勘定	△188	△240
その他の包括利益累計額合計	358	241
新株予約権	24	20
少数株主持分	—	301
純資産合計	7,508	8,012
負債純資産合計	15,783	16,229

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】  
【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月 31日)
売上高	8,705	11,806
売上原価	*3 7,493	*3 9,634
売上総利益	1,211	2,172
販売費及び一般管理費	*1, *2 1,551	*1, *2 2,011
営業利益又は営業損失(△)	△339	160
営業外収益		
受取利息	3	1
受取配当金	18	22
持分法による投資利益	—	36
不動産賃貸料	244	244
スクラップ売却益	16	37
雇用調整助成金	67	—
雑収入	29	46
営業外収益合計	379	389
営業外費用		
支払利息	70	72
持分法による投資損失	62	—
不動産賃貸原価	166	142
固定資産廃棄損	13	4
為替差損	—	67
雑支出	32	20
営業外費用合計	345	307
経常利益又は経常損失(△)	△305	242
特別利益		
土地売却益	—	20
投資有価証券売却益	—	87
段階取得に係る差益	—	14
特別利益合計	—	123
特別損失		
資産除去債務会計基準の適用に伴う影響額	—	25
投資有価証券評価損	0	5
特別損失合計	0	30
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失(△)	△305	335
法人税、住民税及び事業税	14	19
法人税等調整額	△30	△25
法人税等合計	△16	△6
少数株主損益調整前当期純利益	—	341
少数株主損失(△)	—	△9
当期純利益又は当期純損失(△)	△289	351

## 【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
少数株主損益調整前当期純利益	—	341
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	—	△64
為替換算調整勘定	—	△47
持分法適用会社に対する持分相当額	—	△13
その他の包括利益合計	—	※2 △125
包括利益	—	※1 216
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	—	234
少数株主に係る包括利益	—	△18

## ③【連結株主資本等変動計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
<b>株主資本</b>		
資本金		
前期末残高	2,509	2,509
当期変動額		
当期変動額合計	—	—
当期末残高	2,509	2,509
資本剰余金		
前期末残高	2,229	2,229
当期変動額		
ストックオプションの行使	△2	△1
利益剰余金から資本剰余金への振替	2	1
当期変動額合計	—	—
当期末残高	2,229	2,229
利益剰余金		
前期末残高	2,970	2,677
当期変動額		
剰余金の配当	—	△36
当期純利益又は当期純損失(△)	△289	351
利益剰余金から資本剰余金への振替	△2	△1
当期変動額合計	△292	313
当期末残高	2,677	2,990
自己株式		
前期末残高	△257	△289
当期変動額		
自己株式の取得	△44	△1
ストックオプションの行使	12	10
当期変動額合計	△31	9
当期末残高	△289	△279
<b>株主資本合計</b>		
前期末残高	7,451	7,126
当期変動額		
剰余金の配当	—	△36
当期純利益又は当期純損失(△)	△289	351
利益剰余金から資本剰余金への振替	—	—
自己株式の取得	△44	△1
ストックオプションの行使	9	9
当期変動額合計	△324	322
当期末残高	7,126	7,448



(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月 31日)
<b>その他の包括利益累計額</b>		
その他有価証券評価差額金		
前期末残高	328	546
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	217	△64
当期変動額合計	217	△64
当期末残高	546	482
為替換算調整勘定		
前期末残高	△222	△188
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	34	△52
当期変動額合計	34	△52
当期末残高	△188	△240
その他の包括利益累計額合計		
前期末残高	105	358
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	252	△116
当期変動額合計	252	△116
当期末残高	358	241
新株予約権		
前期末残高	29	24
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△5	△3
当期変動額合計	△5	△3
当期末残高	24	20
少数株主持分		
前期末残高	—	—
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	—	301
当期変動額合計	—	301
当期末残高	—	301

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
純資産合計		
前期末残高	7,585	7,508
当期変動額		
剰余金の配当	—	△36
当期純利益又は当期純損失(△)	△289	351
自己株式の取得	△44	△1
ストックオプションの行使	9	9
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	247	181
当期変動額合計	△77	503
当期末残高	7,508	8,012

## ④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失(△)	△305	335
減価償却費	697	594
貸倒引当金の増減額(△は減少)	△0	△3
賞与引当金の増減額(△は減少)	13	57
役員賞与引当金の増減額(△は減少)	—	21
退職給付引当金の増減額(△は減少)	△67	△9
受取利息及び受取配当金	△22	△23
支払利息	70	72
為替差損益(△は益)	△2	—
持分法による投資損益(△は益)	62	△36
土地売却損益(△は益)	—	△20
投資有価証券売却損益(△は益)	—	△87
投資有価証券評価損益(△は益)	0	5
段階取得に係る差損益(△は益)	—	△14
資産除去債務会計基準の適用に伴う影響額	—	25
売上債権の増減額(△は増加)	△1,042	133
たな卸資産の増減額(△は増加)	905	△326
仕入債務の増減額(△は減少)	189	582
その他の固定負債の増減額(△は減少)	△85	△79
その他	258	△324
小計	673	901
利息及び配当金の受取額	51	24
利息の支払額	△69	△73
法人税等の支払額	△27	△19
法人税等の還付額	54	11
営業活動によるキャッシュ・フロー	683	842
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
有形固定資産の取得による支出	△189	△374
固定資産の売却による収入	—	21
投資有価証券の取得による支出	—	△49
投資有価証券の売却による収入	—	90
連結の範囲の変更を伴う子会社出資金の取得による支出	—	△149
貸付けによる支出	△28	△40
貸付金の回収による収入	11	—
その他	△1	16
投資活動によるキャッシュ・フロー	△209	△484

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	△450	△188
長期借入れによる収入	1,300	350
長期借入金の返済による支出	△856	△900
少数株主からの払込みによる収入	—	184
配当金の支払額	△1	△36
リース債務の返済による支出	△9	—
自己株式の取得による支出	△44	△1
ストックオプションの行使による収入	0	0
その他	—	△10
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>	<b>△61</b>	<b>△602</b>
現金及び現金同等物に係る換算差額	5	△18
<b>現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)</b>	<b>418</b>	<b>△262</b>
現金及び現金同等物の期首残高	2,304	2,722
<b>現金及び現金同等物の期末残高</b>	<b>2,722</b>	<b>2,459</b>

【連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項】

項目	前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)
1 連結の範囲に関する事項	<p>全ての子会社を連結の範囲に含めております。</p> <p>連結子会社の数 6社 連結子会社の名称                      (株)昭和電気接点工業所                      (株)福岡機器製作所                      (株)エヌ・ティーサービス                      恩悌(上海)商貿有限公司                      NIPPON TUNGSTEN USA, INC.                      恩悌(香港)有限公司</p> <p>なお、新たに設立したNIPPON TUNGSTEN USA, INC.及び連結子会社の恩悌(上海)商貿有限公司において新たに設立した恩悌(香港)有限公司を当連結会計年度から、連結子会社に含めております。</p>	<p>全ての子会社を連結の範囲に含めております。</p> <p>連結子会社の数 9社 連結子会社の名称                      (株)昭和電気接点工業所                      (株)福岡機器製作所                      (株)エヌ・ティーサービス                      恩悌(上海)商貿有限公司                      上海電科電工材料有限公司                      上海三義精密模具有限公司                      四平恩悌タングステン高技術材料有限公司                      NIPPON TUNGSTEN USA, INC.                      恩悌(香港)有限公司</p> <p>なお、持分法適用関連会社であった上海電科電工材料有限公司及び上海三義精密模具有限公司については、出資持分の取得に伴い、当連結会計年度から連結の範囲に含めております。</p> <p>また、新たに設立した四平恩悌タングステン高技術材料有限公司を当連結会計年度から連結の範囲に含めております。</p>
2 持分法の適用に関する事項	<p>全ての関連会社 5社 (SVニッタン(株)、四平日本タングステン有限公司、九江日本タングステン有限公司、上海電科電工材料有限公司、上海三義精密模具有限公司)に対する投資について持分法を適用しております。</p>	<p>全ての関連会社 3社 (SVニッタン(株)、四平日本タングステン有限公司、九江日本タングステン有限公司)に対する投資について持分法を適用しております。</p> <p>なお、持分法適用関連会社であった上海電科電工材料有限公司及び上海三義精密模具有限公司については、出資持分の取得に伴い、当連結会計年度から連結の範囲に含めたため、持分法適用の範囲から除外しております。</p>
3 連結子会社の事業年度等に関する事項	<p>連結子会社のうち、恩悌(上海)商貿有限公司、NIPPON TUNGSTEN USA, INC. 及び恩悌(香港)有限公司の決算日は12月31日であります。連結財務諸表の作成に当たっては連結決算日現在で実施した仮決算に基づく財務諸表を使用しております。</p> <p>なお、その他の連結子会社の事業年度の末日は、連結決算日と一致しております。</p>	<p>連結子会社のうち、恩悌(上海)商貿有限公司、上海電科電工材料有限公司、上海三義精密模具有限公司、四平恩悌タングステン高技術材料有限公司、NIPPON TUNGSTEN USA, INC. 及び恩悌(香港)有限公司の決算日は12月31日であります。連結財務諸表の作成に当たっては連結決算日現在で実施した仮決算に基づく財務諸表を使用しております。</p> <p>なお、その他の連結子会社の事業年度の末日は、連結決算日と一致しております。</p>

項目	前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)
4 会計処理基準に関する事項	<p>(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法</p> <p>有価証券          その他有価証券          時価のあるもの              期末日の市場価格等に基づく          時価法(評価差額は全部純資産          直入法により処理し、売却原価          は移動平均法により算定)          時価のないもの              移動平均法による原価法</p> <p>たな卸資産</p> <p>① 商品及び製品、仕掛品              主として総平均法による原価          法(貸借対照表価額について          は収益性の低下に基づく簿価          切下げの方法により算定)</p> <p>② 原材料及び貯蔵品              主として移動平均法による原          価法(貸借対照表価額につい          ては収益性の低下に基づく簿          価切下げの方法により算定)</p> <p>(2) 重要な減価償却資産の減価償却の          方法</p> <p>① 有形固定資産(リース資産を          除く)及び賃貸不動産          建物、構築物              定額法          その他の有形固定資産              定率法              なお、主な耐用年数は以下          のとおりであります。              建物、構築物    8～50年              機械及び装置    3～10年</p> <p>② リース資産              所有権移転外ファイナンス・          リース取引に係るリース資産は          リース期間を耐用年数とし、残          存価額を零とする定額法によっ          ております。              なお、所有権移転外ファイナ          ンス・リース取引のうち、リース          取引開始日が平成20年 3月31          日以前のリース取引については、          通常の賃貸借取引に係る方法          に準じた会計処理によってお          ります。</p>	<p>(1) 重要な資産の評価基準及び評価方          法</p> <p>有価証券          その他有価証券          時価のあるもの              同 左</p> <p>時価のないもの              同 左</p> <p>たな卸資産</p> <p>① 商品及び製品、仕掛品              同 左</p> <p>② 原材料及び貯蔵品              同 左</p> <p>(2) 重要な減価償却資産の減価償却の          方法</p> <p>① 有形固定資産(リース資産を          除く)及び賃貸不動産          建物、構築物              同 左          その他の有形固定資産              同 左              なお、主な耐用年数は以下          のとおりであります。              建物、構築物    8～50年              機械及び装置    3～10年</p> <p>② リース資産              同 左</p>

項目	前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月 31日)
	<p>(3) 重要な引当金の計上基準</p> <p>① 貸倒引当金 売上債権、貸付金等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。</p> <p>② 賞与引当金 従業員賞与の支給に備えるため、支給見込額を計上しております。</p> <hr/> <p>③ 退職給付引当金 従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における退職給付債務及び年金資産残高に基づき、当連結会計年度末において発生していると認められる額を計上しております。 なお、過去勤務債務は、発生年度に一括費用処理しております。 数理計算上の差異は、5年による按分額を発生年度から損益処理しております。</p> <p>(会計方針の変更) 当連結会計年度から、「退職給付に係る会計基準」の一部改正(その3)(企業会計基準第19号 平成20年7月31日)を適用しております。 なお、これによる損益への影響はありません。</p> <p>(追加情報) 当社は平成21年4月1日付で適格退職年金制度及び退職一時金制度を確定給付年金制度に移行し、「退職給付制度間の移行等に関する会計処理」(企業会計基準適用指針第1号)を適用しております。 なお、これによる損益への影響は軽微であります。</p>	<p>(3) 重要な引当金の計上基準</p> <p>① 貸倒引当金 同 左</p> <p>② 賞与引当金 同 左</p> <p>③ 役員賞与引当金 役員賞与の支給に備えるため、支給見込額を計上しております。</p> <p>④ 退職給付引当金 従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における退職給付債務及び年金資産残高に基づき、当連結会計年度末において発生していると認められる額を計上しております。 なお、数理計算上の差異は、5年による按分額を発生年度から損益処理しております。</p> <hr/> <hr/>

項目	前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)
	<p>(4) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準 外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益としております。 なお、在外関係会社の資産、負債、収益及び費用は決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めております。</p> <p>(5) 重要なヘッジ会計の方法</p> <p>① ヘッジ会計の方法 原則として繰延ヘッジ処理によっております。なお、振当処理の要件を満たしている為替予約については振当処理に、特例処理の要件を満たしている金利スワップについては特例処理によっております。</p> <p>② ヘッジ手段とヘッジ対象 当連結会計年度にヘッジ会計を適用したヘッジ手段とヘッジ対象は以下のとおりであります。 a ヘッジ手段…為替予約 ヘッジ対象…製品輸出による外貨建売上債権 b ヘッジ手段…金利スワップ ヘッジ対象…借入金</p> <p>③ ヘッジ方針 デリバティブ取引に関する権限規程及び取引限度額等を定めた内部規程に基づき、ヘッジ対象に係る為替相場変動リスク及び金利変動リスクを一定の範囲内でヘッジしております。</p>	<p>(4) 重要なヘッジ会計の方法</p> <p>① ヘッジ会計の方法 原則として繰延ヘッジ処理によっております。なお、振当処理の要件を満たしている為替予約については振当処理によっております。</p> <p>② ヘッジ手段とヘッジ対象 当連結会計年度にヘッジ会計を適用したヘッジ手段とヘッジ対象は以下のとおりであります。 ヘッジ手段…為替予約 ヘッジ対象…製品輸出による外貨建売上債権</p> <p>③ ヘッジ方針 デリバティブ取引に関する権限規程及び取引限度額等を定めた内部規程に基づき、ヘッジ対象に係る為替相場変動リスクを一定の範囲内でヘッジしております。</p>



項目	前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
	<p>④ ヘッジ有効性評価の方法</p> <p>ヘッジ対象のキャッシュ・フロー変動の累計又は相場変動とヘッジ手段のキャッシュ・フロー変動の累計又は相場変動を半期毎に比較し、両者の変動額等を基礎にしてヘッジ有効性を評価しております。但し、特例処理によっている金利スワップについては、有効性の評価を省略しております。</p> <p>また、為替予約の締結時に、リスク管理方針に従って、外貨建による同一金額で同一期日の為替予約をそれぞれ振当てているため、その後の為替相場の変動による相関関係は完全に確保されているので決算日における有効性の評価を省略しております。</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>(6) その他連結財務諸表作成のための重要な事項 消費税等の会計処理 消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式を採用しております。</p>	<p>④ ヘッジ有効性評価の方法</p> <p>ヘッジ対象のキャッシュ・フロー変動の累計又は相場変動とヘッジ手段のキャッシュ・フロー変動の累計又は相場変動を半期毎に比較し、両者の変動額等を基礎にしてヘッジ有効性を評価しております。</p> <p>また、為替予約の締結時に、リスク管理方針に従って、外貨建による同一金額で同一期日の為替予約をそれぞれ振当てているため、その後の為替相場の変動による相関関係は完全に確保されているので決算日における有効性の評価を省略しております。</p> <p>(5) のれんの償却方法及び償却期間 5年間の定額法により償却を行っております。</p> <p>(6) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲 連結キャッシュ・フロー計算書における資金(現金及び現金同等物)は、手許現金、随時引出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3カ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。</p> <p>(7) その他連結財務諸表作成のための重要な事項 消費税等の会計処理 同 左</p>

項目	前連結会計年度 (自 平成21年 4月1日 至 平成22年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月1日 至 平成23年 3月31日)
5 連結子会社の資産及び負債の評価に関する事項	連結子会社の資産及び負債の評価については、全面時価評価法を採用しております。	—————
6 のれん及び負ののれんの償却に関する事項	5年間の定額法により償却を行っております。 但し、金額的重要性が乏しいものについては、当該勘定が生じた連結会計年度の損益として処理しております。	—————
7 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲	連結キャッシュ・フロー計算書における資金(現金及び現金同等物)は、手許現金、随時引出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3カ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。	—————

【会計方針の変更】

前連結会計年度 (自 平成21年 4月1日 至 平成22年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月1日 至 平成23年 3月31日)
—————	<p>(資産除去債務に関する会計基準の適用) 当連結会計年度から、「資産除去債務に関する会計基準」(企業会計基準第18号 平成20年 3月31日)及び「資産除去債務に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第21号 平成20年 3月31日)を適用しております。 これにより、税金等調整前当期純利益が25百万円減少しております。</p> <p>(企業結合に関する会計基準等の適用) 当連結会計年度から、「企業結合に関する会計基準」(企業会計基準第21号 平成20年12月26日)、「連結財務諸表に関する会計基準」(企業会計基準第22号 平成20年12月26日)、「『研究開発費等に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第23号 平成20年12月26日)、「事業分離等に関する会計基準」(企業会計基準第7号 平成20年12月26日)、「持分法に関する会計基準」(企業会計基準第16号 平成20年12月26日公表分)及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第10号 平成20年12月26日)を適用しております。</p>

【表示方法の変更】

<p>前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)</p>	<p>当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)</p>
<p>(連結損益計算書関係)</p> <p>1 前連結会計年度において営業外収益の「雑収入」に含めておりました「雇用調整助成金」(前連結会計年度28百万円)については、営業外収益の100分の10超となったため、当連結会計年度から、区分掲記することといたしました。</p> <p>2 前連結会計年度において区分掲記しておりました「過年度法人税等」(当連結会計年度△4百万円)については、重要性が低下したため当連結会計年度から、「法人税、住民税及び事業税」に含めて表示することといたしました。</p>	<p>(連結損益計算書関係)</p> <p>1 前連結会計年度において営業外収益に区分掲記しておりました「雇用調整助成金」(当連結会計年度9百万円)については、営業外収益の100分の10以下になったため、当連結会計年度から、営業外収益の「雑収入」に含めて表示することといたしました。</p> <p>2 前連結会計年度において営業外費用の「雑支出」に含めておりました「為替差損」(前連結会計年度16百万円)については、営業外費用の100分の10超となったため、当連結会計年度から、区分掲記することといたしました。</p> <p>3 当連結会計年度から、「連結財務諸表に関する会計基準」(企業会計基準第22号 平成20年12月26日)に基づく財務諸表等規則等の一部を改正する内閣府令(平成21年3月24日 内閣府令第5号)の適用により、「少数株主損益調整前当期純利益」の科目で表示しております。</p> <p>(連結キャッシュ・フロー計算書関係)</p> <p>1 前連結会計年度において営業活動によるキャッシュ・フローに区分掲記しておりました「為替差損益(△は益)」(当連結会計年度13百万円)については、表示科目の見直しにより、当連結会計年度から、営業活動によるキャッシュ・フローの「その他」に含めて表示することといたしました。</p> <p>2 前連結会計年度において投資活動によるキャッシュ・フローに区分掲記しておりました「貸付金の回収による収入」(当連結会計年度23百万円)については、表示科目の見直しにより、当連結会計年度から、投資活動によるキャッシュ・フローの「その他」に含めて表示することといたしました。</p> <p>また、「固定資産の売却による収入」(前連結会計年度0百万円)については、重要性が増したため当連結会計年度から、区分掲記することといたしました。</p> <p>3 前連結会計年度において財務活動によるキャッシュ・フローに区分掲記しておりました「リース債務の返済による支出」(当連結会計年度△10百万円)については、表示科目の見直しにより、当連結会計年度から、財務活動によるキャッシュ・フローの「その他」に含めて表示することといたしました。</p>

【追加情報】

<p>前連結会計年度 (自 平成21年 4 月 1 日 至 平成22年 3 月31日)</p>	<p>当連結会計年度 (自 平成22年 4 月 1 日 至 平成23年 3 月31日)</p>
<p>(保有目的の変更)</p> <p>前連結会計年度まで有形固定資産として表示しておりました本社ビル等の不動産の一部につきまして、提出会社の営業本部が本社ビルから基山工場へ移転したことに伴い、賃貸の用に供する部分が拡大したため、当該部分を当連結会計年度から、投資その他の資産の「賃貸不動産」として掲記することとしました。</p> <p>投資その他の資産の「賃貸不動産」への振替額は、建物及び構築物(純額)1,719百万円、土地20百万円であります。</p>	
	<p>当連結会計年度から、「包括利益の表示に関する会計基準」(企業会計基準第25号 平成22年 6 月30日)を適用しております。ただし、「その他の包括利益累計額」及び「その他の包括利益累計額合計」の前連結会計年度の金額は、「評価・換算差額等」及び「評価・換算差額等合計」の金額を記載しております。</p>

【連結財務諸表に関する注記事項】

(連結貸借対照表関係)

前連結会計年度 (平成22年3月31日)	当連結会計年度 (平成23年3月31日)
<p>※1 担保資産及び担保付債務</p> <p>担保資産</p> <p>建物 287百万円</p> <p>土地 0百万円</p> <p>賃貸不動産 1,635百万円</p> <p>計 1,923百万円</p> <p>担保付債務</p> <p>短期借入金 75百万円</p> <p>長期借入金 744百万円</p> <p>(1年内返済分 49百万円含む)</p> <p>計 820百万円</p> <p>なお、当連結会計年度から、建物及び土地の一部を賃貸不動産へ振替えております。</p>	<p>※1 担保資産及び担保付債務</p> <p>担保資産</p> <p>建物 278百万円</p> <p>土地 0百万円</p> <p>賃貸不動産 1,584百万円</p> <p>計 1,864百万円</p> <p>担保付債務</p> <p>短期借入金 125百万円</p> <p>長期借入金 695百万円</p> <p>(1年内返済分 42百万円含む)</p> <p>計 820百万円</p>
<p>※2 関連会社の株式及び出資金</p> <p>株式(投資有価証券) 496百万円</p> <p>出資金(その他) 125百万円</p>	<p>※2 関連会社の株式及び出資金</p> <p>株式(投資有価証券) 503百万円</p> <p>出資金(その他) 20百万円</p>
<p>3 連結会社以外の会社の金融機関からの借入れ等 に対して、債務保証を行っております。</p> <p>上海電科電工材料有限公司 68百万円</p>	<p>4 偶発債務</p> <p>売上債権流動化に伴う受取手形譲渡高 762百万円</p>

(連結損益計算書関係)

前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
<p>※1 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。</p> <p>従業員給料手当 650百万円</p> <p>賞与引当金繰入額 56百万円</p> <p>退職給付費用 85百万円</p> <p>貸倒引当金繰入額 3百万円</p>	<p>※1 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。</p> <p>従業員給料手当 734百万円</p> <p>賞与引当金繰入額 83百万円</p> <p>役員賞与引当金繰入額 21百万円</p> <p>退職給付費用 108百万円</p>
<p>※2 一般管理費に含まれる研究開発費 160百万円</p>	<p>※2 一般管理費に含まれる研究開発費 210百万円</p>
<p>※3 通常の販売目的で保有するたな卸資産の収益性の低下による簿価切下げ額が138百万円含まれております。</p>	<p>※3 通常の販売目的で保有するたな卸資産の収益性の低下による簿価切下げ額が31百万円含まれております。</p>

(連結包括利益計算書関係)

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

※1 当連結会計年度の直前連結会計年度における包括利益

親会社株主に係る包括利益	△37百万円
少数株主に係る包括利益	一百万円
計	<u>△37百万円</u>

※2 当連結会計年度の直前連結会計年度におけるその他の包括利益

その他有価証券評価差額金	217百万円
為替換算調整勘定	2百万円
持分法適用会社に対する持分相当額	31百万円
計	<u>252百万円</u>

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

株式の種類	前連結会計年度末 株式数(株)	当連結会計年度 増加株式数(株)	当連結会計年度 減少株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	25,777,600	—	—	25,777,600
合計	25,777,600	—	—	25,777,600
自己株式				
普通株式	1,043,567	324,578	50,000	1,318,145
合計	1,043,567	324,578	50,000	1,318,145

(変動事由の概要)

- 1 普通株式の自己株式の増加 324,578株は、取締役会決議に基づく買取りによる増加 321,000株及び単元未済株式の買取りによる増加 3,578株によるものであります。
- 2 普通株式の自己株式の減少 50,000株は、新株予約権の行使によるものであります。

2 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約権の 目的となる 株式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)				当連結 会計年度末 残高 (百万円)
			前連結会計 年度末	当連結 会計年度 増加	当連結 会計年度 減少	当連結 会計年度末	
提出会社 (親会社)	ストック・オプション としての新株予約権			—			24
	合計			—			24

3 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

該当事項はありません。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

株式の種類	前連結会計年度末 株式数(株)	当連結会計年度 増加株式数(株)	当連結会計年度 減少株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	25,777,600	—	—	25,777,600
合計	25,777,600	—	—	25,777,600
自己株式				
普通株式	1,318,145	8,767	49,000	1,277,912
合計	1,318,145	8,767	49,000	1,277,912

(変動事由の概要)

- 1 普通株式の自己株式の増加8,767株は、単元未満株式の買取りによるものであります。
- 2 普通株式の自己株式の減少49,000株は、新株予約権の行使によるものであります。

2 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約権の 目的となる 株式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)				当連結 会計年度末 残高 (百万円)
			前連結会計 年度末	当連結 会計年度 増加	当連結 会計年度 減少	当連結 会計年度末	
提出会社 (親会社)	ストック・オプション としての新株予約権			—			20
	合計			—			20

3 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成22年11月11日 取締役会	普通株式	36	1.5	平成22年9月30日	平成22年12月7日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成23年5月11日 取締役会	普通株式	利益剰余金	48	2	平成23年3月31日	平成23年6月8日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係 (平成22年3月31日)	現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係 (平成23年3月31日)
現金及び預金勘定 2,735百万円	現金及び預金勘定 2,476百万円
預入期間が3か月を超える定期預金 △13百万円	預入期間が3か月を超える定期預金 △16百万円
現金及び現金同等物 2,722百万円	現金及び現金同等物 2,459百万円



## (リース取引関係)

前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)																																																												
ファイナンス・リース取引 所有権移転外ファイナンス・リース取引 ① リース資産の内容 有形固定資産 主として事務用機器（工具、器具及び備品）で あります。 無形固定資産 ソフトウェアであります。 ② リース資産の減価償却の方法 リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする 定額法によっております。 なお、リース取引開始日が平成20年3月31日以前の所有 権移転外ファイナンス・リース取引については、通常の 賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっており ます。  リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの 以外のファイナンス・リース取引 ① リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当 額及び期末残高相当額 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse; margin-top: 10px;"> <thead> <tr> <th style="width: 60%;"></th> <th style="text-align: center; border-bottom: 1px solid black;">取得価額 相当額 (百万円)</th> <th style="text-align: center; border-bottom: 1px solid black;">減価償却累 計額相当額 (百万円)</th> <th style="text-align: center; border-bottom: 1px solid black;">期末残高 相当額 (百万円)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>機械装置 及び運搬具</td> <td style="text-align: center;">279</td> <td style="text-align: center;">209</td> <td style="text-align: center;">69</td> </tr> <tr> <td>工具、器具 及び備品</td> <td style="text-align: center;">17</td> <td style="text-align: center;">16</td> <td style="text-align: center;">1</td> </tr> <tr> <td>ソフト ウェア</td> <td style="text-align: center;">474</td> <td style="text-align: center;">192</td> <td style="text-align: center;">282</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">合計</td> <td style="text-align: center; border-top: 1px solid black;">771</td> <td style="text-align: center; border-top: 1px solid black;">418</td> <td style="text-align: center; border-top: 1px solid black;">353</td> </tr> </tbody> </table> なお、取得価額相当額は、未経過リース料期末残 高が有形固定資産の期末残高等に占める割合が低い ため、支払利子込み法により算定しております。 ② 未経過リース料期末残高相当額 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse; margin-top: 10px;"> <tbody> <tr> <td style="width: 60%;">1年以内</td> <td style="text-align: right;">127百万円</td> </tr> <tr> <td>1年超</td> <td style="text-align: right;">225百万円</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">合計</td> <td style="text-align: right; border-top: 1px solid black;">353百万円</td> </tr> </tbody> </table> なお、未経過リース料期末残高相当額は、未経過 リース料期末残高が有形固定資産の期末残高等に占 める割合が低いため、支払利子込み法により算定し ております。 ③ 支払リース料及び減価償却費相当額 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse; margin-top: 10px;"> <tbody> <tr> <td style="width: 60%;">支払リース料</td> <td style="text-align: right;">150百万円</td> </tr> <tr> <td>減価償却費相当額</td> <td style="text-align: right;">150百万円</td> </tr> </tbody> </table> ④ 減価償却費相当額の算定方法 リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする 定額法によっております。 (減損損失について) 減損損失はありませんので、項目等の記載は省略 しております。		取得価額 相当額 (百万円)	減価償却累 計額相当額 (百万円)	期末残高 相当額 (百万円)	機械装置 及び運搬具	279	209	69	工具、器具 及び備品	17	16	1	ソフト ウェア	474	192	282	合計	771	418	353	1年以内	127百万円	1年超	225百万円	合計	353百万円	支払リース料	150百万円	減価償却費相当額	150百万円	1. ファイナンス・リース取引 所有権移転外ファイナンス・リース取引 ① リース資産の内容 有形固定資産 同 左  無形固定資産 同 左 ② リース資産の減価償却の方法 同 左  リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの 以外のファイナンス・リース取引 ① リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当 額及び期末残高相当額 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse; margin-top: 10px;"> <thead> <tr> <th style="width: 60%;"></th> <th style="text-align: center; border-bottom: 1px solid black;">取得価額 相当額 (百万円)</th> <th style="text-align: center; border-bottom: 1px solid black;">減価償却累 計額相当額 (百万円)</th> <th style="text-align: center; border-bottom: 1px solid black;">期末残高 相当額 (百万円)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>機械装置 及び運搬具</td> <td style="text-align: center;">110</td> <td style="text-align: center;">72</td> <td style="text-align: center;">37</td> </tr> <tr> <td>工具、器具 及び備品</td> <td style="text-align: center;">3</td> <td style="text-align: center;">3</td> <td style="text-align: center;">0</td> </tr> <tr> <td>ソフト ウェア</td> <td style="text-align: center;">474</td> <td style="text-align: center;">287</td> <td style="text-align: center;">187</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">合計</td> <td style="text-align: center; border-top: 1px solid black;">588</td> <td style="text-align: center; border-top: 1px solid black;">363</td> <td style="text-align: center; border-top: 1px solid black;">225</td> </tr> </tbody> </table> 同 左  ② 未経過リース料期末残高相当額 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse; margin-top: 10px;"> <tbody> <tr> <td style="width: 60%;">1年以内</td> <td style="text-align: right;">113百万円</td> </tr> <tr> <td>1年超</td> <td style="text-align: right;">112百万円</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">合計</td> <td style="text-align: right; border-top: 1px solid black;">225百万円</td> </tr> </tbody> </table> 同 左  ③ 支払リース料及び減価償却費相当額 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse; margin-top: 10px;"> <tbody> <tr> <td style="width: 60%;">支払リース料</td> <td style="text-align: right;">127百万円</td> </tr> <tr> <td>減価償却費相当額</td> <td style="text-align: right;">127百万円</td> </tr> </tbody> </table> ④ 減価償却費相当額の算定方法 同 左  (減損損失について) 同 左		取得価額 相当額 (百万円)	減価償却累 計額相当額 (百万円)	期末残高 相当額 (百万円)	機械装置 及び運搬具	110	72	37	工具、器具 及び備品	3	3	0	ソフト ウェア	474	287	187	合計	588	363	225	1年以内	113百万円	1年超	112百万円	合計	225百万円	支払リース料	127百万円	減価償却費相当額	127百万円
	取得価額 相当額 (百万円)	減価償却累 計額相当額 (百万円)	期末残高 相当額 (百万円)																																																										
機械装置 及び運搬具	279	209	69																																																										
工具、器具 及び備品	17	16	1																																																										
ソフト ウェア	474	192	282																																																										
合計	771	418	353																																																										
1年以内	127百万円																																																												
1年超	225百万円																																																												
合計	353百万円																																																												
支払リース料	150百万円																																																												
減価償却費相当額	150百万円																																																												
	取得価額 相当額 (百万円)	減価償却累 計額相当額 (百万円)	期末残高 相当額 (百万円)																																																										
機械装置 及び運搬具	110	72	37																																																										
工具、器具 及び備品	3	3	0																																																										
ソフト ウェア	474	287	187																																																										
合計	588	363	225																																																										
1年以内	113百万円																																																												
1年超	112百万円																																																												
合計	225百万円																																																												
支払リース料	127百万円																																																												
減価償却費相当額	127百万円																																																												

前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)						
	2. オペレーティング・リース取引 オペレーティング・リース取引のうち解約不能のもの に係る未経過リース料 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年以内</td> <td style="text-align: right;">88百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年超</td> <td style="text-align: right;">137百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px; border-top: 1px solid black;">合計</td> <td style="text-align: right; border-top: 1px solid black;">225百万円</td> </tr> </table>	1年以内	88百万円	1年超	137百万円	合計	225百万円
1年以内	88百万円						
1年超	137百万円						
合計	225百万円						

(金融商品関係)

前連結会計年度(自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)

(追加情報)

当連結会計年度から、「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 平成20年 3月10日)及び「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第19号 平成20年 3月10日)を適用しております。

## 1 金融商品の状況に関する事項

### (1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、運転資金等の必要な資金は、銀行等金融機関からの借入れにより調達しております。デリバティブは後述するリスクを回避するために利用し、投機的な取引は行わないことしております。

### (2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。また、外貨建の営業債権は、為替の変動リスクに晒されておりますが、一部の外貨建債権については為替の変動リスクを軽減するため、為替予約取引を行っております。

投資有価証券は主として株式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。

営業債務である支払手形及び買掛金は、1年以内の支払期日であります。また、その一部には、原材料等の輸入に伴う外貨建のものがあり、為替の変動リスクに晒されております。

短期借入金及び長期借入金は、主として運転資金であり償還日は決算日後5年以内であります。金利は、主として固定金利を採用しております。一部の金利については、変動リスクに晒されておりますが、金利スワップ取引を利用してヘッジをしております。

デリバティブ取引は、外貨建の営業債権に係る為替の変動リスクに対するヘッジ取引を目的とした為替予約取引、借入金に係る支払金利の変動リスクに対するヘッジ取引を目的とした金利スワップ取引であります。なお、ヘッジ会計に関するヘッジ手段とヘッジ対象、ヘッジ方針、ヘッジの有効性の評価方法等については、「第5 経理の状況、1 連結財務諸表等、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、4 会計処理基準に関する事項、(5) 重要なヘッジ会計の方法」に記載のとおりであります。

### (3) 金融商品に係るリスク管理体制

#### ①信用リスク(取引先の契約不履行等に係るリスク)の管理

営業債権である受取手形及び売掛金に係る顧客の信用リスクは、当社営業規程に沿ってリスク低減を図っております。

デリバティブ取引については、契約先が信用度の高い国内の金融機関であるため、相手先の契約不履行による信用リスクはほとんどないものと判断しております。

#### ②市場リスク(為替や金利等の変動リスク)の管理

外貨建の営業債権の一部については、月別に把握された為替の変動リスクに対して、為替予約を利用してヘッジをしております。また、借入金に係る支払金利の変動リスクを抑制するために、金利スワップ取引を利用しております。

投資有価証券については、定期的に時価や発行体(取引先企業)の財務状況等を把握しております。

デリバティブ取引については、当社の経理部が実行及び管理を担当しており、デリバティブ取引を行う場合は、内部規程により経理担当役員が決裁を得ることにしております。

#### ③資金調達に係る流動性リスク(支払期日に支払いを実行できなくなるリスク)の管理

当社は、各部署からの報告に基づき経理部が適時に資金繰計画を作成・更新するとともに、手許流動性を維持することなどにより流動性リスクを管理しております。

### (4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することもあります。また、「デリバティブ取引関係」注記におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

## 2 金融商品の時価等に関する事項

平成22年3月31日における連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含めておりません。(注)2を参照ください。)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	2,735	2,735	—
(2) 受取手形及び売掛金	3,226	3,226	—
(3) 投資有価証券	1,306	1,306	—
資産計	7,268	7,268	—
(4) 支払手形及び買掛金	900	900	—
(5) 短期借入金	2,870	2,870	—
(6) 長期借入金	1,917	1,933	16
負債計	5,688	5,704	16
デリバティブ取引	—	—	—

(注) 1 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

## 資 産

### (1) 現金及び預金、並びに (2) 受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから当該帳簿価額によっております。

### (3) 投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっております。

また、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「有価証券関係」注記を参照ください。

## 負 債

### (4) 支払手形及び買掛金、並びに (5) 短期借入金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから当該帳簿価額によっております。

### (6) 長期借入金

これらの時価については、元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっております。

### デリバティブ取引

「デリバティブ取引関係」注記を参照ください。

(注) 2 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)
非上場株式	502

これらについては、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積もることなどができず時価を把握することが極めて困難と認められることから「(3) 投資有価証券」には含めておりません。

(注) 3 満期のある金銭債権及び有価証券の連結決算日後の償還予定額

	1年以内 (百万円)	1年超5年以内 (百万円)	5年超10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	2,728	—	—	—
受取手形及び売掛金	3,226	—	—	—
投資有価証券	—	—	—	—
合計	5,954	—	—	—

(注) 4 長期借入金の連結決算日後の返済予定額

連結附属明細表 「借入金等明細表」を参照ください。

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

## 1 金融商品の状況に関する事項

### (1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、運転資金等の必要な資金は、銀行等金融機関からの借入れにより調達しております。デリバティブは後述するリスクを回避するために利用し、投機的な取引は行わないこととしております。

### (2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。また、外貨建の営業債権は、為替の変動リスクに晒されておりますが、一部の外貨建債権については為替の変動リスクを軽減するため、為替予約取引を行っております。

投資有価証券は主として株式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。

営業債務である支払手形及び買掛金は、1年以内の支払期日であります。また、その一部には、原材料等の輸入に伴う外貨建のものがあり、為替の変動リスクに晒されております。

短期借入金及び長期借入金は、主として運転資金であり償還日は決算日後5年以内であります。金利は、主として固定金利を採用しております。

デリバティブ取引は、外貨建の営業債権に係る為替の変動リスクに対するヘッジ取引を目的とした為替予約取引であります。なお、ヘッジ会計に関するヘッジ手段とヘッジ対象、ヘッジ方針、ヘッジの有効性の評価方法等については、「第5経理の状況、1連結財務諸表等、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、4会計処理基準に関する事項、(5)重要なヘッジ会計の方法」に記載のとおりであります。

### (3) 金融商品に係るリスク管理体制

#### ①信用リスク(取引先の契約不履行等に係るリスク)の管理

営業債権である受取手形及び売掛金に係る顧客の信用リスクは、当社営業規程に沿ってリスク低減を図っております。

デリバティブ取引については、契約先が信用度の高い国内の金融機関であるため、相手先の契約不履行による信用リスクはほとんどないものと判断しております。

#### ②市場リスク(為替や金利等の変動リスク)の管理

外貨建の営業債権の一部については、月別に把握された為替の変動リスクに対して、為替予約を利用してヘッジをしております。

投資有価証券については、定期的に時価や発行体(取引先企業)の財務状況等を把握しております。

デリバティブ取引については、当社の経理部が実行及び管理を担当しており、デリバティブ取引を行う場合は、内部規程により経理担当役員の決裁を得ることとしております。

#### ③資金調達に係る流動性リスク(支払期日に支払いを実行できなくなるリスク)の管理

当社は、各部署からの報告に基づき経理部が適時に資金繰計画を作成・更新するとともに、手許流動性を維持することなどにより流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することもあります。また、「デリバティブ取引関係」注記におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

2 金融商品の時価等に関する事項

平成23年3月31日における連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含めておりません。(注)2を参照ください。)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	2,476	2,476	—
(2) 受取手形及び売掛金	3,383	3,383	—
(3) 投資有価証券	1,239	1,239	—
資産計	7,099	7,099	—
(4) 支払手形及び買掛金	1,514	1,514	—
(5) 短期借入金	2,734	2,734	—
(6) 長期借入金	1,441	1,464	23
負債計	5,690	5,714	23
デリバティブ取引	—	—	—

(注) 1 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、並びに (2) 受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから当該帳簿価額によっております。

(3) 投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっております。

また、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「有価証券関係」注記を参照ください。

## 負債

### (4) 支払手形及び買掛金、並びに (5) 短期借入金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから当該帳簿価額によっております。

### (6) 長期借入金

これらの時価については、元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっております。

### デリバティブ取引

「デリバティブ取引関係」注記を参照ください。

### (注) 2 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)
非上場株式	509

これらについては、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積もることなどができず時価を把握することが極めて困難と認められることから「(3) 投資有価証券」には含めておりません。

### (注) 3 金銭債権及び満期がある有価証券の連結決算日後の償還予定額

	1年以内 (百万円)	1年超5年以内 (百万円)	5年超10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	2,467	—	—	—
受取手形及び売掛金	3,383	—	—	—
投資有価証券	—	—	—	—
合計	5,850	—	—	—

### (注) 4 長期借入金の連結決算日後の返済予定額

連結附属明細表 「借入金等明細表」を参照ください。

(有価証券関係)

前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

その他有価証券

種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの			
株式	1,298	379	918
小計	1,298	379	918
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
株式	7	9	△1
小計	7	9	△1
合計	1,306	389	916

(注) 時価のないものについては、上表に含めておりません。

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

1. その他有価証券

種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの			
株式	1,233	421	812
小計	1,233	421	812
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
株式	6	9	△2
小計	6	9	△2
合計	1,239	430	809

(注) 時価のないものについては、上表に含めておりません。

2. 当連結会計年度中に売却したその他有価証券

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	90	87	—
合計	90	87	—

3. 減損処理を行った有価証券

当連結会計年度において、その他有価証券で時価のある株式について5百万円の減損処理を行っております。

有価証券の減損処理については、期末における時価の下落率が簿価の30%以上であるものを対象としております。時価の下落率が簿価の50%以上の場合には全て減損処理を行い、30%以上50%未満である場合には、回復可能性の判定を行い、減損処理を行っております。



(デリバティブ取引関係)

前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

通貨関連

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額 (百万円)	契約額のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)
為替予約等の 振当処理	為替予約取引 売建 米ドル	売掛金	356	—	(注)

(注) 為替予約の振当処理によるものは、ヘッジ対象とされている売掛金と一体として処理されているため、その時価は当該売掛金の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

通貨関連

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額 (百万円)	契約額のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)
為替予約等の 振当処理	為替予約取引 売建 米ドル	売掛金	356	—	(注)

(注) 為替予約の振当処理によるものは、ヘッジ対象とされている売掛金と一体として処理されているため、その時価は当該売掛金の時価に含めて記載しております。

## (退職給付関係)

前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)																								
<p>(1) 採用している退職給付制度の概要</p> <p>当社は、確定給付型の制度として、平成21年4月1日付で適格退職年金制度及び退職一時金制度を確定給付年金制度に移行しております。また、従業員の退職等に際して割増退職金を支払う場合があります。</p> <p>なお、国内連結子会社は確定拠出型年金である中小企業退職金共済制度に加入しております。</p>	<p>(1) 採用している退職給付制度の概要</p> <p>当社は、確定給付年金制度を採用しております。また、従業員の退職等に際して割増退職金を支払う場合があります。</p> <p>なお、国内連結子会社は確定拠出型年金である中小企業退職金共済制度に加入しております。</p>																								
<p>(2) 退職給付債務に関する事項(平成22年3月31日)</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;">退職給付債務</td> <td style="text-align: right;">△2,978百万円</td> </tr> <tr> <td>年金資産</td> <td style="text-align: right;">1,951百万円</td> </tr> <tr> <td><u>未積立退職給付債務</u></td> <td style="text-align: right;"><u>△1,026百万円</u></td> </tr> <tr> <td>未認識数理計算上の差異</td> <td style="text-align: right;">499百万円</td> </tr> <tr> <td><u>連結貸借対照表計上額純額</u></td> <td style="text-align: right;"><u>△526百万円</u></td> </tr> <tr> <td><u>退職給付引当金</u></td> <td style="text-align: right;"><u>△526百万円</u></td> </tr> </table>	退職給付債務	△2,978百万円	年金資産	1,951百万円	<u>未積立退職給付債務</u>	<u>△1,026百万円</u>	未認識数理計算上の差異	499百万円	<u>連結貸借対照表計上額純額</u>	<u>△526百万円</u>	<u>退職給付引当金</u>	<u>△526百万円</u>	<p>(2) 退職給付債務に関する事項(平成23年3月31日)</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;">退職給付債務</td> <td style="text-align: right;">△2,805百万円</td> </tr> <tr> <td>年金資産</td> <td style="text-align: right;">1,918百万円</td> </tr> <tr> <td><u>未積立退職給付債務</u></td> <td style="text-align: right;"><u>△886百万円</u></td> </tr> <tr> <td>未認識数理計算上の差異</td> <td style="text-align: right;">369百万円</td> </tr> <tr> <td><u>連結貸借対照表計上額純額</u></td> <td style="text-align: right;"><u>△517百万円</u></td> </tr> <tr> <td><u>退職給付引当金</u></td> <td style="text-align: right;"><u>△517百万円</u></td> </tr> </table>	退職給付債務	△2,805百万円	年金資産	1,918百万円	<u>未積立退職給付債務</u>	<u>△886百万円</u>	未認識数理計算上の差異	369百万円	<u>連結貸借対照表計上額純額</u>	<u>△517百万円</u>	<u>退職給付引当金</u>	<u>△517百万円</u>
退職給付債務	△2,978百万円																								
年金資産	1,951百万円																								
<u>未積立退職給付債務</u>	<u>△1,026百万円</u>																								
未認識数理計算上の差異	499百万円																								
<u>連結貸借対照表計上額純額</u>	<u>△526百万円</u>																								
<u>退職給付引当金</u>	<u>△526百万円</u>																								
退職給付債務	△2,805百万円																								
年金資産	1,918百万円																								
<u>未積立退職給付債務</u>	<u>△886百万円</u>																								
未認識数理計算上の差異	369百万円																								
<u>連結貸借対照表計上額純額</u>	<u>△517百万円</u>																								
<u>退職給付引当金</u>	<u>△517百万円</u>																								
<p>(3) 退職給付費用に関する事項</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;">勤務費用</td> <td style="text-align: right;">126百万円</td> </tr> <tr> <td>利息費用</td> <td style="text-align: right;">64百万円</td> </tr> <tr> <td>期待運用収益</td> <td style="text-align: right;">△51百万円</td> </tr> <tr> <td>数理計算上の差異の費用処理額</td> <td style="text-align: right;">165百万円</td> </tr> <tr> <td>過去勤務債務の費用処理額</td> <td style="text-align: right;">6百万円</td> </tr> <tr> <td><u>退職給付費用</u></td> <td style="text-align: right;"><u>310百万円</u></td> </tr> </table>	勤務費用	126百万円	利息費用	64百万円	期待運用収益	△51百万円	数理計算上の差異の費用処理額	165百万円	過去勤務債務の費用処理額	6百万円	<u>退職給付費用</u>	<u>310百万円</u>	<p>(3) 退職給付費用に関する事項</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;">勤務費用</td> <td style="text-align: right;">121百万円</td> </tr> <tr> <td>利息費用</td> <td style="text-align: right;">59百万円</td> </tr> <tr> <td>期待運用収益</td> <td style="text-align: right;">△58百万円</td> </tr> <tr> <td>数理計算上の差異の費用処理額</td> <td style="text-align: right;">241百万円</td> </tr> <tr> <td><u>退職給付費用</u></td> <td style="text-align: right;"><u>364百万円</u></td> </tr> </table>	勤務費用	121百万円	利息費用	59百万円	期待運用収益	△58百万円	数理計算上の差異の費用処理額	241百万円	<u>退職給付費用</u>	<u>364百万円</u>		
勤務費用	126百万円																								
利息費用	64百万円																								
期待運用収益	△51百万円																								
数理計算上の差異の費用処理額	165百万円																								
過去勤務債務の費用処理額	6百万円																								
<u>退職給付費用</u>	<u>310百万円</u>																								
勤務費用	121百万円																								
利息費用	59百万円																								
期待運用収益	△58百万円																								
数理計算上の差異の費用処理額	241百万円																								
<u>退職給付費用</u>	<u>364百万円</u>																								
<p>(4) 退職給付債務等の計算の基礎に関する事項</p> <p>退職給付見込額の期間配分方法</p> <p style="padding-left: 20px;">期間定額基準</p> <p>割引率 2.0%</p> <p>期待運用収益率 3.0%</p> <p>過去勤務債務の額の処理年数</p> <p style="padding-left: 20px;">発生年度に一括費用処理</p> <p>数理計算上の差異の処理年数</p> <p style="padding-left: 20px;">5年(発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数による定額法によっており、発生年度から損益処理することとしております。)</p>	<p>(4) 退職給付債務等の計算の基礎に関する事項</p> <p>退職給付見込額の期間配分方法</p> <p style="padding-left: 20px;">期間定額基準</p> <p>割引率 2.0%</p> <p>期待運用収益率 3.0%</p> <p>数理計算上の差異の処理年数</p> <p style="padding-left: 20px;">同 左</p>																								

(ストック・オプション等関係)

前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

1. スtock・オプションにかかる当連結会計年度における費用計上額及び科目名

販売費及び一般管理費(株式報酬費用) 4百万円

2. スtock・オプションの内容、規模及びその変動状況

(1) スtock・オプションの内容

平成19年ストック・オプション(第1回)	
会社名	提出会社
付与対象者の区分及び人数	当社の取締役7名(社外取締役除く)
株式の種類及び付与数	普通株式 66,000株
付与日	平成19年8月27日
権利確定条件	平成20年定時株主総会日まで継続して当社の取締役に就任していること。 上記の日までに当社の取締役を退任した場合は、在任月数相当分の新株予約権に限る。
対象勤務期間	自 平成19年定時株主総会(平成19年6月28日) 至 平成20年定時株主総会
権利行使期間	自 平成19年8月28日 至 平成39年8月27日

平成20年ストック・オプション(第2回)	
会社名	提出会社
付与対象者の区分及び人数	当社の取締役6名(社外取締役除く)
株式の種類及び付与数	普通株式 120,000株
付与日	平成20年8月26日
権利確定条件	平成21年定時株主総会日まで継続して当社の取締役に就任していること。 上記の日までに当社の取締役を退任した場合は、在任月数相当分の新株予約権に限る。
対象勤務期間	自 平成20年定時株主総会(平成20年6月26日) 至 平成21年定時株主総会
権利行使期間	自 平成20年8月27日 至 平成40年8月26日

(2) ストック・オプションの規模及びその変動状況

① ストック・オプションの数

	平成19年 ストック・オプション (第1回)	平成20年 ストック・オプション (第2回)
会社名	提出会社	提出会社
権利確定前(株)		
前連結会計年度末	—	—
付与	—	—
失効	—	—
権利確定	—	—
未確定残	—	—
権利確定後(株)		
前連結会計年度末	60,000	120,000
権利確定	—	—
権利行使	17,000	33,000
失効	—	—
未行使残	43,000	87,000

② 単価情報

	平成19年 ストック・オプション (第1回)	平成20年 ストック・オプション (第2回)
会社名	提出会社	提出会社
権利行使価格	1円	1円
行使時平均株価	161円	161円
付与日における公正な評価単価	273円	142円

3. 当連結会計年度に付与されたストック・オプションの公正な評価単価の見積方法

該当事項はありません。

4. ストック・オプションの権利確定数の見積方法

基本的には、将来の失効数の合理的な見積りは困難であり、また過去の実績もないため、失効の見積数をゼロとしております。

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

1. ストック・オプションにかかる当連結会計年度における費用計上額及び科目名

販売費及び一般管理費(株式報酬費用) 5百万円

2. ストック・オプションの内容、規模及びその変動状況

(1) ストック・オプションの内容

平成19年ストック・オプション(第1回)	
会社名	提出会社
付与対象者の区分及び人数	当社の取締役7名(社外取締役除く)
株式の種類及び付与数	普通株式 66,000株
付与日	平成19年8月27日
権利確定条件	平成20年定時株主総会日まで継続して当社の取締役に就任していること。 上記の日までに当社の取締役を退任した場合は、在任月数相当分の新株予約権に限る。
対象勤務期間	自 平成19年定時株主総会(平成19年6月28日) 至 平成20年定時株主総会
権利行使期間	自 平成19年8月28日 至 平成39年8月27日

平成20年ストック・オプション(第2回)	
会社名	提出会社
付与対象者の区分及び人数	当社の取締役6名(社外取締役除く)
株式の種類及び付与数	普通株式 120,000株
付与日	平成20年8月26日
権利確定条件	平成21年定時株主総会日まで継続して当社の取締役に就任していること。 上記の日までに当社の取締役を退任した場合は、在任月数相当分の新株予約権に限る。
対象勤務期間	自 平成20年定時株主総会(平成20年6月26日) 至 平成21年定時株主総会
権利行使期間	自 平成20年8月27日 至 平成40年8月26日

平成22年ストック・オプション(第3回)	
会社名	提出会社
付与対象者の区分及び人数	当社の取締役7名(社外取締役除く)
株式の種類及び付与数	普通株式51,000株
付与日	平成23年2月25日
権利確定条件	平成23年定時株主総会日まで継続して当社の取締役に就任していること。 上記の日までに当社の取締役を退任した場合は、在任月数相当分の新株予約権に限る。
対象勤務期間	自 平成22年定時株主総会(平成22年6月25日) 至 平成23年定時株主総会
権利行使期間	自 平成23年2月26日 至 平成43年2月25日

## (2) ストック・オプションの規模及びその変動状況

## ① ストック・オプションの数

	平成19年 ストック・オプション (第1回)	平成20年 ストック・オプション (第2回)	平成22年 ストック・オプション (第3回)
会社名	提出会社	提出会社	提出会社
権利確定前(株)			
前連結会計年度末	—	—	—
付与	—	—	51,000
失効	—	—	—
権利確定	—	—	51,000
未確定残	—	—	—
権利確定後(株)			
前連結会計年度末	43,000	87,000	—
権利確定	—	—	51,000
権利行使	16,000	33,000	—
失効	—	—	—
未行使残	27,000	54,000	51,000

## ② 単価情報

	平成19年 ストック・オプション (第1回)	平成20年 ストック・オプション (第2回)	平成22年 ストック・オプション (第3回)
会社名	提出会社	提出会社	提出会社
権利行使価格	1円	1円	1円
行使時平均株価	133円	133円	—円
付与日における公正な評価単価	273円	142円	141円

### 3. 当連結会計年度に付与されたストック・オプションの公正な評価単価の見積方法

#### (1) 使用した評価技法

ブラック・ショールズ式

#### (2) 使用した主な基礎数値及びその見積方法

		平成22年ストック・オプション(第3回)
株価変動性	(注) 1	42.415%
予想残存期間	(注) 2	10年
予想配当	(注) 3	1.5円/株
無リスク利子率	(注) 4	1.258%

(注) 1. 平成13年2月25日～平成23年2月25日の株価実績に基づき算定しております。

2. 十分なデータの蓄積がなく、合理的な見積りが困難であるため、権利行使期間の中間点において行使されるものと推定して見積っております。

3. 平成22年3月期の期末配当及び平成23年3月期の中間配当実績によっております。

4. 予想残存期間に対応する期間に対応する国債の利回りを使用しております。

### 4. スtock・オプションの権利確定数の見積方法

基本的には、将来の失効数の合理的な見積りは困難であり、また過去の実績もないため、失効の見積数をゼロとしております。

## (税効果会計関係)

前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)																																																						
<p>1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳</p> <p>(繰延税金資産)</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>賞与引当金</td><td style="text-align: right;">93百万円</td></tr> <tr><td>繰越欠損金</td><td style="text-align: right;">429百万円</td></tr> <tr><td>退職給付引当金</td><td style="text-align: right;">213百万円</td></tr> <tr><td>減損損失</td><td style="text-align: right;">101百万円</td></tr> <tr><td>減価償却費</td><td style="text-align: right;">84百万円</td></tr> <tr><td>その他</td><td style="text-align: right;">203百万円</td></tr> <tr><td>繰延税金資産小計</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black;">1,124百万円</td></tr> <tr><td>評価性引当額</td><td style="text-align: right;">△1,124百万円</td></tr> <tr><td>繰延税金資産合計</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black;">0百万円</td></tr> </table> <p>(繰延税金負債)</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>買換資産圧縮積立金</td><td style="text-align: right;">645百万円</td></tr> <tr><td>その他有価証券評価差額金</td><td style="text-align: right;">370百万円</td></tr> <tr><td>その他</td><td style="text-align: right;">0百万円</td></tr> <tr><td>繰延税金負債合計</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black;">1,016百万円</td></tr> <tr><td>繰延税金負債の純額</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black; border-bottom: 3px double black;">1,015百万円</td></tr> </table>	賞与引当金	93百万円	繰越欠損金	429百万円	退職給付引当金	213百万円	減損損失	101百万円	減価償却費	84百万円	その他	203百万円	繰延税金資産小計	1,124百万円	評価性引当額	△1,124百万円	繰延税金資産合計	0百万円	買換資産圧縮積立金	645百万円	その他有価証券評価差額金	370百万円	その他	0百万円	繰延税金負債合計	1,016百万円	繰延税金負債の純額	1,015百万円	<p>1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳</p> <p>(繰延税金資産)</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>賞与引当金</td><td style="text-align: right;">117百万円</td></tr> <tr><td>繰越欠損金</td><td style="text-align: right;">321百万円</td></tr> <tr><td>退職給付引当金</td><td style="text-align: right;">209百万円</td></tr> <tr><td>減損損失</td><td style="text-align: right;">82百万円</td></tr> <tr><td>減価償却費</td><td style="text-align: right;">78百万円</td></tr> <tr><td>その他</td><td style="text-align: right;">195百万円</td></tr> <tr><td>繰延税金資産小計</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black;">1,004百万円</td></tr> <tr><td>評価性引当額</td><td style="text-align: right;">△1,002百万円</td></tr> <tr><td>繰延税金資産合計</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black;">1百万円</td></tr> </table> <p>(繰延税金負債)</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>買換資産圧縮積立金</td><td style="text-align: right;">620百万円</td></tr> <tr><td>その他有価証券評価差額金</td><td style="text-align: right;">327百万円</td></tr> <tr><td>繰延税金負債合計</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black;">948百万円</td></tr> <tr><td>繰延税金負債の純額</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black; border-bottom: 3px double black;">946百万円</td></tr> </table>	賞与引当金	117百万円	繰越欠損金	321百万円	退職給付引当金	209百万円	減損損失	82百万円	減価償却費	78百万円	その他	195百万円	繰延税金資産小計	1,004百万円	評価性引当額	△1,002百万円	繰延税金資産合計	1百万円	買換資産圧縮積立金	620百万円	その他有価証券評価差額金	327百万円	繰延税金負債合計	948百万円	繰延税金負債の純額	946百万円
賞与引当金	93百万円																																																						
繰越欠損金	429百万円																																																						
退職給付引当金	213百万円																																																						
減損損失	101百万円																																																						
減価償却費	84百万円																																																						
その他	203百万円																																																						
繰延税金資産小計	1,124百万円																																																						
評価性引当額	△1,124百万円																																																						
繰延税金資産合計	0百万円																																																						
買換資産圧縮積立金	645百万円																																																						
その他有価証券評価差額金	370百万円																																																						
その他	0百万円																																																						
繰延税金負債合計	1,016百万円																																																						
繰延税金負債の純額	1,015百万円																																																						
賞与引当金	117百万円																																																						
繰越欠損金	321百万円																																																						
退職給付引当金	209百万円																																																						
減損損失	82百万円																																																						
減価償却費	78百万円																																																						
その他	195百万円																																																						
繰延税金資産小計	1,004百万円																																																						
評価性引当額	△1,002百万円																																																						
繰延税金資産合計	1百万円																																																						
買換資産圧縮積立金	620百万円																																																						
その他有価証券評価差額金	327百万円																																																						
繰延税金負債合計	948百万円																																																						
繰延税金負債の純額	946百万円																																																						
<p>2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>法定実効税率</td><td style="text-align: right;">△40.4%</td></tr> <tr><td>(調整)</td><td></td></tr> <tr><td>交際費等永久に損金に算入されない項目</td><td style="text-align: right;">1.0%</td></tr> <tr><td>受取配当金等永久に益金に算入されない項目</td><td style="text-align: right;">△1.1%</td></tr> <tr><td>住民税均等割</td><td style="text-align: right;">4.1%</td></tr> <tr><td>評価性引当額の増加</td><td style="text-align: right;">27.7%</td></tr> <tr><td>持分法による投資損益</td><td style="text-align: right;">8.4%</td></tr> <tr><td>その他</td><td style="text-align: right;">△4.9%</td></tr> <tr><td>税効果会計適用後の法人税等の負担率</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black; border-bottom: 3px double black;">△5.2%</td></tr> </table>	法定実効税率	△40.4%	(調整)		交際費等永久に損金に算入されない項目	1.0%	受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△1.1%	住民税均等割	4.1%	評価性引当額の増加	27.7%	持分法による投資損益	8.4%	その他	△4.9%	税効果会計適用後の法人税等の負担率	△5.2%	<p>2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>法定実効税率</td><td style="text-align: right;">40.4%</td></tr> <tr><td>(調整)</td><td></td></tr> <tr><td>交際費等永久に損金に算入されない項目</td><td style="text-align: right;">4.0%</td></tr> <tr><td>受取配当金等永久に益金に算入されない項目</td><td style="text-align: right;">△1.3%</td></tr> <tr><td>住民税均等割</td><td style="text-align: right;">4.1%</td></tr> <tr><td>評価性引当額の減少</td><td style="text-align: right;">△48.7%</td></tr> <tr><td>持分法による投資損益</td><td style="text-align: right;">△4.4%</td></tr> <tr><td>固定資産未実現利益</td><td style="text-align: right;">2.9%</td></tr> <tr><td>その他</td><td style="text-align: right;">1.0%</td></tr> <tr><td>税効果会計適用後の法人税等の負担率</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black; border-bottom: 3px double black;">△2.0%</td></tr> </table>	法定実効税率	40.4%	(調整)		交際費等永久に損金に算入されない項目	4.0%	受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△1.3%	住民税均等割	4.1%	評価性引当額の減少	△48.7%	持分法による投資損益	△4.4%	固定資産未実現利益	2.9%	その他	1.0%	税効果会計適用後の法人税等の負担率	△2.0%																
法定実効税率	△40.4%																																																						
(調整)																																																							
交際費等永久に損金に算入されない項目	1.0%																																																						
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△1.1%																																																						
住民税均等割	4.1%																																																						
評価性引当額の増加	27.7%																																																						
持分法による投資損益	8.4%																																																						
その他	△4.9%																																																						
税効果会計適用後の法人税等の負担率	△5.2%																																																						
法定実効税率	40.4%																																																						
(調整)																																																							
交際費等永久に損金に算入されない項目	4.0%																																																						
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△1.3%																																																						
住民税均等割	4.1%																																																						
評価性引当額の減少	△48.7%																																																						
持分法による投資損益	△4.4%																																																						
固定資産未実現利益	2.9%																																																						
その他	1.0%																																																						
税効果会計適用後の法人税等の負担率	△2.0%																																																						



(企業結合等関係)

前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

取得による企業結合

(1) 企業結合の概要

① 被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 上海電科電工材料有限公司

事業の内容 電気接点製品の製造販売

② 企業結合を行った主な理由

当社主導による事業構造の改善、電気接点製品の中国市場での拡販を強力に進めるため。

③ 企業結合日

平成22年4月15日

④ 企業結合の法的形式

出資持分の取得

⑤ 結合後企業の名称

変更ありません。

⑥ 取得した議決権比率

取得直前に所有していた議決権比率 30%

企業結合日に追加取得した議決権比率 30%

取得後の議決権比率 60%

⑦ 取得企業を決定するに至った主な根拠

中国における電気接点製品の製造拠点であり、今後、中国市場での更なる事業拡大を図るため、出資持分を30%から60%に引き上げることにいたしました。

(2) 連結財務諸表に含まれている被取得企業の業績の期間

平成22年4月1日から平成23年3月31日まで

- (3) 被取得企業の取得原価及びその内訳
- |       |                               |        |
|-------|-------------------------------|--------|
|       | 取得直前に保有していた上海電科電工材料有限公司の出資持分の | 114百万円 |
| 取得の対価 | の企業結合日における時価                  |        |
|       | 企業結合日に取得した上海電科電工材料有限公司の出資持分の  | 114百万円 |
|       | 時価                            |        |
| 取得原価  |                               | 228百万円 |
- (4) 被取得企業の取得原価と取得するに至った取引ごとの取得原価の合計額との差額  
9百万円
- (5) 発生したのれんの金額、発生原因、償却方法及び償却期間
- (1) 発生したのれん  
19百万円
- (2) 発生原因  
主として今後の事業展開によって期待される超過収益力であります。
- (3) 償却方法及び償却期間  
5年間にわたる均等償却
- (6) 企業結合日に受け入れた資産及び引き受けた負債の額並びにその主な内訳
- |      |        |  |
|------|--------|--|
| 流動資産 | 446百万円 |  |
| 固定資産 | 62百万円  |  |
| 資産合計 | 509百万円 |  |
| 流動負債 | 164百万円 |  |
| 負債合計 | 164百万円 |  |
- (7) 企業結合が当連結会計年度の開始の日に完了したと仮定した場合の当連結会計年度の連結損益計算書に及ぼす影響の概算額及びその算定方法  
当連結会計年度の開始の日をみなし取得日として連結損益計算書を作成しているため、当連結会計年度の連結損益計算書に及ぼす影響はありません。

## 取得による企業結合

### (1) 企業結合の概要

#### ① 被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 上海三義精密模具有限公司

事業の内容 産業用機械装置及び部品の製造販売並びにN Tダイカッター再研磨加工

#### ② 企業結合を行った主な理由

中国における機械装置事業拡大及びN Tダイカッター再研磨サービスの充実を図るため。

#### ③ 企業結合日

平成22年8月24日

#### ④ 企業結合の法的形式

出資持分の取得

#### ⑤ 結合後企業の名称

変更ありません。

#### ⑥ 取得した議決権比率

取得直前に所有していた議決権比率 19.35%

企業結合日に追加取得した議決権比率 80.65%

取得後の議決権比率 100.00%

#### ⑦ 取得企業を決定するに至った主な根拠

全額出資による完全子会社化により経営の安定性を高め、同社が保有する市場、技術と、当社グループの機械装置事業の相互連携を深め事業拡大を図るとともに、中国でのN Tダイカッターの再研磨サービスの更なる充実を図ることとしました。

### (2) 連結財務諸表に含まれている被取得企業の業績の期間

平成22年10月1日から平成23年3月31日まで

(3) 被取得企業の取得原価及びその内訳		
取得の対価	取得直前に保有していた上海三義精密模具有限会社の出資持分の企業結合日における時価	7百万円
	企業結合日に取得した上海三義精密模具有限会社の出資持分の時価	30百万円
取得原価		38百万円

(4) 被取得企業の取得原価と取得するに至った取引ごとの取得原価の合計額との差額  
5百万円

(5) 発生したのれんの金額、発生原因、償却方法及び償却期間

① 発生したのれん金額

33百万円

② 発生原因

主として今後の事業展開によって期待される超過収益力であります。

③ 償却方法及び償却期間

5年間にわたる均等償却

(6) 企業結合日に受け入れた資産及び引き受けた負債の額並びにその主な内訳

流動資産	25百万円
固定資産	67百万円
資産合計	<u>92百万円</u>
流動負債	71百万円
固定負債	14百万円
負債合計	<u>86百万円</u>

(7) 企業結合が当連結会計年度の開始の日に完了したと仮定した場合の当連結会計年度の連結損益計算書に及ぼす影響の概算額及びその算定方法

売上高	106百万円
営業損失(△)	△11百万円
経常損失(△)	△8百万円
税金等調整前当期純損失(△)	△8百万円
当期純損失(△)	△8百万円
1株当たり当期純損失金額(△)	△0.36円

(概算額の算定方法)

概算額の算定につきましては、上海三義精密模具有限会社の平成22年4月1日から平成22年9月30日までの売上高及び損益情報を記載しております。

なお、当該注記は監査証明を受けておりません。

(賃貸等不動産関係)

前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

(追加情報)

当連結会計年度から、「賃貸等不動産の時価等の開示に関する会計基準」(企業会計基準第20号 平成20年11月28日)及び「賃貸等不動産の時価等の開示に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第23号 平成20年11月28日)を適用しております。

当社は、福岡県において、賃貸用のオフィスビル(土地を含む)を有しております。

また、当社及び一部の連結子会社は東京都その他の地域において、賃貸用の土地を有しております。当連結会計年度における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は77百万円(賃貸収益は営業外収益に、賃貸費用は営業外費用に計上)であります。

なお、賃貸等不動産の連結貸借対照表計上額及び当連結会計年度における主な変動並びに当連結会計年度末における時価及び当該時価の算定方法は以下のとおりであります。

連結貸借対照表計上額			当連結会計年度末の時価 (百万円)
前連結会計年度末残高 (百万円)	当連結会計年度増減額 (百万円)	当連結会計年度末残高 (百万円)	
1,638	25	1,663	2,439

- (注) 1. 連結貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額を控除した金額であります。  
2. 当連結会計年度末の時価は、主として「不動産鑑定評価基準」に基づいて自社で算定した金額(指標等を用いて調整を行ったものを含む)であります。

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

当社は、福岡県において、賃貸用のオフィスビル(土地を含む)を有しております。

また、当社及び一部の連結子会社は東京都その他の地域において、賃貸用の土地を有しております。当連結会計年度における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は102百万円(賃貸収益は営業外収益に、賃貸費用は営業外費用に計上)であります。

なお、賃貸等不動産の連結貸借対照表計上額及び当連結会計年度における主な変動並びに当連結会計年度末における時価及び当該時価の算定方法は以下のとおりであります。

連結貸借対照表計上額			当連結会計年度末の時価 (百万円)
前連結会計年度末残高 (百万円)	当連結会計年度増減額 (百万円)	当連結会計年度末残高 (百万円)	
1,663	△52	1,611	2,199

- (注) 1. 連結貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額を控除した金額であります。  
2. 当連結会計年度末の時価は、主として「不動産鑑定評価基準」に基づいて自社で算定した金額(指標等を用いて調整を行ったものを含む)であります。

(セグメント情報等)

【事業の種類別セグメント情報】

前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

	粉末冶金 (百万円)	産業用機器 (百万円)	その他 (百万円)	計 (百万円)	消去又は 全社(百万円)	連結 (百万円)
I 売上高及び営業損益						
売上高						
(1) 外部顧客に 対する売上高	8,279	414	11	8,705	(一)	8,705
(2) セグメント間の 内部売上高 又は振替高	16	203	11	231	(231)	—
計	8,295	617	23	8,936	(231)	8,705
営業費用	8,657	630	17	9,305	(260)	9,044
営業利益又は 営業損失(△)	△361	△12	5	△368	29	△339
II 資産、減価償却費 及び資本的支出						
資産	10,096	433	98	10,629	5,154	15,783
減価償却費	595	28	0	624	74	698
資本的支出	137	0	0	138	(9)	129

(注) 1 事業区分の方法

事業区分の方法は、製品の製造方法によっております。

2 各事業の主な製品

(1) 粉末冶金……タングステン及びモリブデン線・棒・板、電気接点、電極、磁気ヘッド基板、超精密加工品、半導体・液晶関連機械部品、NTダイカッター、切削工具、耐摩耐食部品、機械部品、遮蔽材等

(2) 産業用機器…自動化・省力化機器、据付修理、プラント等

(3) その他……上記に関連しないその他製品等

3 配賦不能営業費用は発生しておりません。

4 資産のうち、消去又は全社の項目に含めた全社資産(5,268百万円)の主なものは、親会社での余資運用資金(現金及び預金)及び長期投資資金(投資有価証券)に係る資産等であります。

5 減価償却費及び資本的支出には、長期前払費用と同費用に係る償却額が含まれております。

### 【所在地別セグメント情報】

前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

全セグメントの売上高の合計額及び全セグメントの資産の金額の合計額に占める日本の割合が、いずれも90%を超えているため所在地別セグメント情報の記載を省略しております。

### 【海外売上高】

前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

	北米地域	アジア地域	欧州地域	その他の地域	計
I 海外売上高(百万円)	362	583	194	23	1,163
II 連結売上高(百万円)	—	—	—	—	8,705
III 連結売上高に占める 海外売上高の割合(%)	4.2	6.7	2.2	0.3	13.4

(注) 1 国又は地域の区分は、地理的近接度によっております。

2 各区分に属する主な国又は地域

- (1) 北米地域……………アメリカ、カナダ
- (2) アジア地域……………中国、香港、韓国、インド 他
- (3) 欧州地域……………イタリア、ドイツ、ベルギー 他
- (4) その他の地域……………アルゼンチン 他

### 【セグメント情報】

前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)及び当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

(追加情報)

当連結会計年度から、「セグメント情報等の開示に関する会計基準」(企業会計基準第17号 平成21年3月27日)及び「セグメント情報等の開示に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第20号 平成20年3月21日)を適用しております。

当社グループは、粉末冶金の製法・技術を駆使した製品の製造(精製)販売加工及びこれらの付随業務というほぼ単一業種の事業活動を営んでおります。報告セグメントは「粉末冶金事業」の1つのみであるため、セグメント情報の記載を省略しております。

## 【関連情報】

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

### 1 製品及びサービスごとの情報

当社グループの製品は、産業用機器製品を除き、製品の材質等に係わらずその殆どを粉末冶金法によって製造しております。

このため、当社は製造方法の類似性から、製品・サービスの区分を粉末冶金製品、産業用機器製品、その他に分類しておりますが、このうち、粉末冶金製品の外部顧客への売上高が連結売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

### 2 地域ごとの情報

#### (1) 売上高

(単位：百万円)

日本	中国	北米地域	欧州地域	アジア地域	その他の地域	合計
8,576	2,291	447	249	205	37	11,806

(注) 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

#### (2) 有形固定資産

(単位：百万円)

日本	アジア地域	北米地域	合計
3,444	370	143	3,958

### 3 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
日立金属㈱	1,276	粉末冶金

## 【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

該当事項はありません。

## 【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

重要性がないため記載を省略しております。

## 【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

該当事項はありません。



**【関連当事者情報】**

前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

該当事項はありません。

## (1株当たり情報)

前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)		当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)	
1株当たり純資産額	306.00円	1株当たり純資産額	313.89円
1株当たり当期純損失金額(△)	△11.71円	1株当たり当期純利益金額	14.35円
なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式は存在するものの1株当たり当期純損失であるため、記載しておりません。		潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	14.29円

## 1 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成22年3月31日)	当連結会計年度 (平成23年3月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	7,508	8,012
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	7,484	7,690
差額の主な内訳(百万円)		
新株予約権	24	20
少数株主持分	—	301
普通株式の発行済株式数(千株)	25,777	25,777
普通株式の自己株式数(千株)	1,318	1,277
1株当たり純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数(千株)	24,459	24,499

- 2 1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額(△)及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
当期純利益又は当期純損失(△)(百万円)	△289	351
普通株式に係る当期純利益又は当期純損失(△) (百万円)	△289	351
普通株式の期中平均株式数(千株)	24,765	24,491
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定に 用いられた普通株式増加数の主な内訳(千株)		
新株予約権	—	105
普通株式増加数(千株)	—	105
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当 たり当期純利益金額の算定に含まれなかった潜在株 式の概要	平成19年8月10日取締役 会決議 新株予約権 43個 平成20年8月8日取締役 会決議 新株予約権 87個 なお、新株予約権の概要 は「第4提出会社の状 況、1株式等の状況、(2) 新株予約権等の状況」に 記載のとおりでありま す。	—

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

⑤ 【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	前期末残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	1,980	1,918	1.23	—
1年以内に返済予定の長期借入金	890	816	1.80	—
1年以内に返済予定のリース債務	10	10	—	—
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	1,917	1,441	1.75	平成24年4月5日～ 平成27年10月29日
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	26	16	—	平成24年4月5日～ 平成26年8月22日
その他有利子負債 預り営業保証金	13	13	0.30	—
計	4,839	4,215	—	—

(注) 1 平均利率は、借入金の期末残高に対する加重平均利率を記載しております。

2 リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

3 長期借入金、リース債務及びその他有利子負債(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年内における返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	620	518	245	56
リース債務	10	6	0	—
その他 有利子負債	—	—	—	—

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度末及び直前連結会計年度末における資産除去債務の金額が当該各連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、記載を省略しております。

## (2) 【その他】

## 当連結会計年度における四半期情報

	第1四半期 (自 平成22年 4月1日 至 平成22年 6月30日)	第2四半期 (自 平成22年 7月1日 至 平成22年 9月30日)	第3四半期 (自 平成22年 10月1日 至 平成22年 12月31日)	第4四半期 (自 平成23年 1月1日 至 平成23年 3月31日)
売上高(百万円)	2,885	2,844	2,820	3,255
税金等調整前四半期純利益金額(百万円)	99	72	54	109
四半期純利益金額(百万円)	101	72	52	125
1株当たり四半期純利益金額(円)	4.13	2.95	2.15	5.12

2【財務諸表等】  
 (1)【財務諸表】  
 ①【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成22年3月31日)	当事業年度 (平成23年3月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	2,313	2,076
受取手形	615	172
売掛金	2,601	※1 2,818
商品及び製品	220	187
仕掛品	856	856
原材料及び貯蔵品	896	850
前払費用	22	23
未収入金	40	179
その他	14	48
貸倒引当金	△4	△4
流動資産合計	※1 7,576	7,209
固定資産		
有形固定資産		
建物	5,583	5,589
減価償却累計額	△3,286	△3,472
建物（純額）	2,297	2,117
構築物	566	566
減価償却累計額	△390	△403
構築物（純額）	175	162
機械及び装置	10,033	9,986
減価償却累計額	△9,100	△9,230
機械及び装置（純額）	933	755
車両運搬具	37	38
減価償却累計額	△36	△37
車両運搬具（純額）	0	0
工具、器具及び備品	1,036	1,024
減価償却累計額	△968	△972
工具、器具及び備品（純額）	68	51
土地	285	285
リース資産	3	3
減価償却累計額	△0	△1
リース資産（純額）	2	2
建設仮勘定	4	5
有形固定資産合計	※2 3,769	※2 3,381
無形固定資産		
ソフトウェア	7	5
リース資産	30	21
その他	0	0
無形固定資産合計	37	27

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成22年3月31日)	当事業年度 (平成23年3月31日)
投資その他の資産		
投資有価証券	1,305	1,238
関係会社株式	305	305
関係会社出資金	196	753
関係会社長期貸付金	60	62
賃貸不動産	3,243	3,243
減価償却累計額	△1,566	△1,618
賃貸不動産(純額)	※2 1,677	※2 1,625
その他	75	65
貸倒引当金	△89	△27
投資その他の資産合計	3,530	4,023
固定資産合計	※1 7,337	7,432
資産合計	14,914	14,641
負債の部		
流動負債		
支払手形	96	160
買掛金	802	929
短期借入金	※2 1,980	※1, ※2 1,871
1年内返済予定の長期借入金	※2 890	※2 816
リース債務	9	9
未払金	34	66
未払費用	148	158
未払法人税等	23	24
預り金	75	73
賞与引当金	211	265
役員賞与引当金	—	21
その他	84	36
流動負債合計	4,358	4,432
固定負債		
長期借入金	※2 1,917	※2 1,441
リース債務	25	15
長期未払金	48	31
繰延税金負債	1,015	946
退職給付引当金	526	517
長期預り金	276	217
資産除去債務	—	25
その他	13	13
固定負債合計	3,823	3,207
負債合計	8,181	7,640

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成22年3月31日)	当事業年度 (平成23年3月31日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	2,509	2,509
資本剰余金		
資本準備金	2,229	2,229
資本剰余金合計	2,229	2,229
利益剰余金		
その他利益剰余金		
買換資産圧縮積立金	948	911
別途積立金	1,000	1,000
繰越利益剰余金	△233	131
利益剰余金合計	1,714	2,042
自己株式	△289	△279
株主資本合計	6,163	6,500
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	544	480
評価・換算差額等合計	544	480
新株予約権	24	20
純資産合計	6,732	7,001
負債純資産合計	14,914	14,641



## ②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
売上高	8,354	9,672
売上原価		
商品及び製品期首たな卸高	329	220
当期製品製造原価	6,945	7,491
当期商品仕入高	151	248
原材料評価損	54	22
合計	7,480	7,982
他勘定振替高	※2 3	※2 2
商品及び製品期末たな卸高	220	187
売上原価合計	※3 7,256	※3 7,792
売上総利益	1,097	1,880
販売費及び一般管理費	※1, ※4 1,445	※1, ※4 1,669
営業利益又は営業損失(△)	△347	210
営業外収益		
受取利息	3	1
受取配当金	50	48
不動産賃貸料	266	267
スクラップ売却益	15	37
雇用調整助成金	62	—
雑収入	25	32
営業外収益合計	※5 423	※5 387
営業外費用		
支払利息	71	63
不動産賃貸原価	※5 170	※5 147
為替差損	15	70
雑支出	23	19
営業外費用合計	281	301
経常利益又は経常損失(△)	△205	296
特別利益		
投資有価証券売却益	—	87
特別利益合計	—	87
特別損失		
関係会社出資金評価損	48	—
資産除去債務会計基準の適用に伴う影響額	—	25
投資有価証券評価損	0	5
特別損失合計	48	30
税引前当期純利益又は税引前当期純損失(△)	△253	353
法人税、住民税及び事業税	14	12
法人税等調整額	△30	△25
法人税等合計	△16	△12
当期純利益又は当期純損失(△)	△237	366

【製造原価明細書】

区分	注記 番号	前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)			当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)		
		金額(百万円)		構成比 (%)	金額(百万円)		構成比 (%)
I 材料費			2,727	40.5		3,236	43.2
II 労務費			2,294	34.0		2,506	33.5
III 経費							
1 外注加工費		624			787		
2 減価償却費		541			443		
3 その他の経費		551	1,718	25.5	518	1,749	23.3
当期総製造費用			6,740	100.0		7,491	100.0
期首仕掛品たな卸高			1,064			856	
合計			7,804			8,348	
他勘定振替高	※		2			0	
期末仕掛品たな卸高			856			856	
当期製品製造原価			6,945			7,491	

摘要	前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
※ 他勘定振替高	他勘定振替高の主なものは、作業屑の転売及び不良品処分等によるものであります。	同 左
原価計算の方法	加工費工程別、組別総合原価計算方法によっており、期中においては標準原価を採用し、期末においてすべて実際原価に修正しております。	同 左

## ③【株主資本等変動計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
<b>株主資本</b>		
資本金		
前期末残高	2,509	2,509
当期変動額		
当期変動額合計	—	—
当期末残高	2,509	2,509
資本剰余金		
資本準備金		
前期末残高	2,229	2,229
当期変動額		
当期変動額合計	—	—
当期末残高	2,229	2,229
その他資本剰余金		
前期末残高	—	—
当期変動額		
ストックオプションの行使	△2	△1
利益剰余金から資本剰余金への振替	2	1
当期変動額合計	—	—
当期末残高	—	—
資本剰余金合計		
前期末残高	2,229	2,229
当期変動額		
ストックオプションの行使	△2	△1
利益剰余金から資本剰余金への振替	2	1
当期変動額合計	—	—
当期末残高	2,229	2,229
利益剰余金		
その他利益剰余金		
買換資産圧縮積立金		
前期末残高	993	948
当期変動額		
買換資産圧縮積立金の取崩	△45	△36
当期変動額合計	△45	△36
当期末残高	948	911
別途積立金		
前期末残高	1,000	1,000
当期変動額		
当期変動額合計	—	—
当期末残高	1,000	1,000

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
<b>繰越利益剰余金</b>		
前期末残高	△38	△233
当期変動額		
買換資産圧縮積立金の取崩	45	36
剰余金の配当	—	△36
当期純利益又は当期純損失 (△)	△237	366
利益剰余金から資本剰余金への振替	△2	△1
当期変動額合計	△195	364
当期末残高	△233	131
<b>利益剰余金合計</b>		
前期末残高	1,955	1,714
当期変動額		
買換資産圧縮積立金の取崩	—	—
剰余金の配当	—	△36
当期純利益又は当期純損失 (△)	△237	366
利益剰余金から資本剰余金への振替	△2	△1
当期変動額合計	△240	327
当期末残高	1,714	2,042
<b>自己株式</b>		
前期末残高	△257	△289
当期変動額		
自己株式の取得	△44	△1
ストックオプションの行使	12	10
当期変動額合計	△31	9
当期末残高	△289	△279
<b>株主資本合計</b>		
前期末残高	6,436	6,163
当期変動額		
剰余金の配当	—	△36
当期純利益又は当期純損失 (△)	△237	366
利益剰余金から資本剰余金への振替	—	—
自己株式の取得	△44	△1
ストックオプションの行使	9	9
当期変動額合計	△272	337
当期末残高	6,163	6,500

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成21年 4 月 1 日 至 平成22年 3 月 31 日)	当事業年度 (自 平成22年 4 月 1 日 至 平成23年 3 月 31 日)
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金		
前期末残高	328	544
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	215	△64
当期変動額合計	215	△64
当期末残高	544	480
評価・換算差額等合計		
前期末残高	328	544
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	215	△64
当期変動額合計	215	△64
当期末残高	544	480
新株予約権		
前期末残高	29	24
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△5	△3
当期変動額合計	△5	△3
当期末残高	24	20
純資産合計		
前期末残高	6,794	6,732
当期変動額		
剰余金の配当	—	△36
当期純利益又は当期純損失（△）	△237	366
自己株式の取得	△44	△1
ストックオプションの行使	9	9
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	210	△67
当期変動額合計	△61	269
当期末残高	6,732	7,001

【重要な会計方針】

項目	前事業年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)	当事業年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)
1 有価証券の評価基準及び評価方法	(1) 子会社株式及び関連会社株式 移動平均法による原価法 (2) その他有価証券 時価のあるもの 期末日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定) 時価のないもの 移動平均法による原価法	(1) 子会社株式及び関連会社株式 同 左 (2) その他有価証券 時価のあるもの 同 左  時価のないもの 同 左
2 たな卸資産の評価基準及び評価方法	(1) 商品及び製品、仕掛品 総平均法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定) (2) 原材料及び貯蔵品 移動平均法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)	(1) 商品及び製品、仕掛品 同 左 (2) 原材料及び貯蔵品 同 左
3 固定資産の減価償却の方法	(1) 有形固定資産(リース資産を除く)及び賃貸不動産 建物、構築物 定額法 その他の有形固定資産 定率法 なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。 建物 8～50年 機械及び装置 3～10年 (2) リース資産 所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産はリース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。 なお、所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が平成20年3月31日以前のリース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっております。	(1) 有形固定資産(リース資産を除く)及び賃貸不動産 建物、構築物 同 左 その他の有形固定資産 同 左 なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。 建物、構築物 8～50年 機械及び装置 3～10年 (2) リース資産 同 左
4 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準	外貨建金銭債権債務は、期末日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。	—

項目	前事業年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月 31日)	当事業年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月 31日)
5 引当金の計上基準	<p>(1) 貸倒引当金 売上債権、貸付金等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。</p> <p>(2) 賞与引当金 従業員賞与の支給に備えるため、支給見込額を計上しております。</p> <p>(3) 退職給付引当金 従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産残高に基づき、当事業年度末において発生していると認められる額を計上しております。 なお、過去勤務債務は、発生年度に一括費用処理しております。 数理計算上の差異は、5年による按分額を発生年度から損益処理しております。 (会計方針の変更) 当事業年度から、「退職給付に係る会計基準」の一部改正(その3)(企業会計基準第19号 平成20年7月31日)を適用しております。 なお、これによる損益への影響はありません。 (追加情報) 平成21年4月1日付で適格退職年金制度及び退職一時金制度を確定給付年金制度に移行し、「退職給付制度間の移行等に関する会計処理」(企業会計基準適用指針第1号)を適用しております。 なお、これによる損益への影響は軽微であります。</p>	<p>(1) 貸倒引当金 同 左</p> <p>(2) 賞与引当金 同 左</p> <p>(3) 役員賞与引当金 役員賞与の支給に備えるため、支給見込額を計上しております。</p> <p>(4) 退職給付引当金 従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産残高に基づき、当事業年度末において発生していると認められる額を計上しております。 なお、数理計算上の差異は、5年による按分額を発生年度から損益処理しております。</p>

項目	前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
6 ヘッジ会計の方法	<p>(1) ヘッジ会計の方法 原則として繰延ヘッジ処理によっております。なお、振当処理の要件を満たしている為替予約については振当処理に、特例処理の要件を満たしている金利スワップについては特例処理によっております。</p> <p>(2) ヘッジ手段とヘッジ対象 当期にヘッジ会計を適用したヘッジ手段とヘッジ対象は以下のとおりであります。</p> <p>a ヘッジ手段…為替予約 ヘッジ対象…製品輸出による外貨建売上債権</p> <p>b ヘッジ手段…金利スワップ ヘッジ対象…借入金</p> <p>(3) ヘッジ方針 デリバティブ取引に関する権限規程及び取引限度額等を定めた内部規程に基づき、ヘッジ対象に係る為替相場変動リスク及び金利変動リスクを一定の範囲内でヘッジしております。</p> <p>(4) ヘッジ有効性評価の方法 ヘッジ対象のキャッシュ・フロー変動の累計又は相場変動とヘッジ手段のキャッシュ・フロー変動の累計又は相場変動を半期毎に比較し、両者の変動額等を基礎にしてヘッジ有効性を評価しております。但し、特例処理によっている金利スワップについては、有効性の評価を省略しております。</p> <p>また、為替予約の締結時に、リスク管理方針に従って、外貨建による同一金額で同一期日の為替予約をそれぞれ振当てているため、その後の為替相場の変動による相関関係は完全に確保されているので決算日における有効性の評価を省略しております。</p>	<p>(1) ヘッジ会計の方法 原則として繰延ヘッジ処理によっております。なお、振当処理の要件を満たしている為替予約については振当処理によっております。</p> <p>(2) ヘッジ手段とヘッジ対象 当期にヘッジ会計を適用したヘッジ手段とヘッジ対象は以下のとおりであります。</p> <p>a ヘッジ手段…為替予約 ヘッジ対象…製品輸出による外貨建売上債権</p> <p>(3) ヘッジ方針 デリバティブ取引に関する権限規程及び取引限度額等を定めた内部規程に基づき、ヘッジ対象に係る為替相場変動リスクを一定の範囲内でヘッジしております。</p> <p>(4) ヘッジ有効性評価の方法 ヘッジ対象のキャッシュ・フロー変動の累計又は相場変動とヘッジ手段のキャッシュ・フロー変動の累計又は相場変動を半期毎に比較し、両者の変動額等を基礎にしてヘッジ有効性を評価しております。</p> <p>また、為替予約の締結時に、リスク管理方針に従って、外貨建による同一金額で同一期日の為替予約をそれぞれ振当てているため、その後の為替相場の変動による相関関係は完全に確保されているので決算日における有効性の評価を省略しております。</p>
7 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項	消費税等の会計処理 消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式を採用しております。	消費税等の会計処理 同 左



【会計方針の変更】

前事業年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)	当事業年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)
—————	(資産除去債務に関する会計基準の適用) 当事業年度から、「資産除去債務に関する会計基準」(企業会計基準第18号 平成20年 3月31日)及び「資産除去債務に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第21号 平成20年 3月31日)を適用しております。 これにより、税引前当期純利益が25百万円減少しております。

【表示方法の変更】

前事業年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)	当事業年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)
(損益計算書関係) 1 前事業年度において営業外収益の「雑収入」に含めておりました「雇用調整助成金」(前事業年度23百万円)については、営業外収益の100分の10超となったため当事業年度から、区分掲記することといたしました。  2 前事業年度において区分掲記しておりました「過年度法人税等」(当事業年度 1百万円)については、重要性が低下したため当事業年度から、「法人税、住民税及び事業税」に含めて表示することといたしました。	(損益計算書関係) 1 前事業年度において営業外収益に区分掲記しておりました「雇用調整助成金」(当事業年度 7百万円)については、営業外収益の100分の10以下になったため、当事業年度から、営業外収益の「雑収入」に含めて表示することといたしました。

【追加情報】

前事業年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)	当事業年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)
(保有目的の変更) 前事業年度まで有形固定資産として表示しておりました本社ビル等の不動産の一部につきまして、当社の営業本部が本社ビルから基山工場へ移転したことに伴い、賃貸の用に供する部分が拡大したため、当該部分(連結子会社への賃貸部分を含む)を当事業年度から、投資その他の資産の「賃貸不動産」として掲記することといたしました。 投資その他の資産「賃貸不動産」への振替額は、建物(純額)1,723百万円、構築物(純額)16百万円、土地14百万円であります。	—————

【注記事項】

(貸借対照表関係)

前事業年度 (平成22年3月31日)		当事業年度 (平成23年3月31日)	
※1	関係会社に対する資産 関係会社に対する資産の合計額 151百万円	※1	関係会社に対する資産及び負債 売掛金 187百万円 短期借入金 150百万円
※2	担保資産及び担保付債務 担保資産 建物 287百万円 土地 0百万円 賃貸不動産 1,635百万円 計 1,923百万円 担保付債務 短期借入金 75百万円 長期借入金 744百万円 (1年内返済分 49百万円含む) 計 820百万円 なお、当事業年度から、建物及び土地の一部を 賃貸不動産へ振替えております。	※2	担保資産及び担保付債務 担保資産 建物 278百万円 土地 0百万円 賃貸不動産 1,584百万円 計 1,864百万円 担保付債務 短期借入金 125百万円 長期借入金 695百万円 (1年内返済分 42百万円含む) 計 820百万円
3	下記の関係会社の金融機関からの借入れ等に対し て、債務保証を行っております。 上海電科電工材料有限公司 68百万円	3	下記の関係会社の金融機関からの借入れ等に対し て、債務保証を行っております。 上海電科電工材料有限公司 95百万円 上海三義精密模具有限公司 38百万円
		4	偶発債務 売上債権流動化に伴う 受取手形譲渡高 762百万円

## (損益計算書関係)

前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
※1 研究開発費の総額 一般管理費に含まれる研究開発費 <div style="text-align: right;">160百万円</div>	※1 研究開発費の総額 一般管理費に含まれる研究開発費 <div style="text-align: right;">162百万円</div>
※2 他勘定振替高は、次のとおりであります。 販売費及び一般管理費 <div style="text-align: right;">3百万円</div>	※2 他勘定振替高は、次のとおりであります。 販売費及び一般管理費 <div style="text-align: right;">2百万円</div>
※3 通常の販売目的で保有するたな卸資産の収益性の低下による簿価切下げ額が138百万円含まれております。	※3 通常の販売目的で保有するたな卸資産の収益性の低下による簿価切下げ額が27百万円含まれております。
※4 販売費及び一般管理費のうち主要な費目 給料手当 <div style="text-align: right;">600百万円</div> 法定福利費 <div style="text-align: right;">100百万円</div> 賞与引当金繰入額 <div style="text-align: right;">52百万円</div> 退職給付費用 <div style="text-align: right;">82百万円</div> 貸倒引当金繰入額 <div style="text-align: right;">3百万円</div> 減価償却費 <div style="text-align: right;">52百万円</div> 賃借料 <div style="text-align: right;">115百万円</div> 販売費に属する費用のおおよその割合 <div style="text-align: right;">43%</div> 一般管理費に属する費用のおおよその割合 <div style="text-align: right;">57%</div>	※4 販売費及び一般管理費のうち主要な費目 役員報酬 <div style="text-align: right;">102百万円</div> 給料手当 <div style="text-align: right;">621百万円</div> 法定福利費 <div style="text-align: right;">113百万円</div> 賞与引当金繰入額 <div style="text-align: right;">74百万円</div> 役員賞与引当金繰入額 <div style="text-align: right;">21百万円</div> 退職給付費用 <div style="text-align: right;">106百万円</div> 減価償却費 <div style="text-align: right;">37百万円</div> 賃借料 <div style="text-align: right;">109百万円</div> 販売費に属する費用のおおよその割合 <div style="text-align: right;">41%</div> 一般管理費に属する費用のおおよその割合 <div style="text-align: right;">59%</div>
※5 関係会社との取引 営業外収益合計額 <div style="text-align: right;">63百万円</div> 不動産賃貸原価 <div style="text-align: right;">59百万円</div>	※5 関係会社との取引 営業外収益合計額 <div style="text-align: right;">52百万円</div> 不動産賃貸原価 <div style="text-align: right;">60百万円</div>

(株主資本等変動計算書関係)

前事業年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

1 自己株式の種類及び株式数に関する事項

株式の種類	前事業年度末 株式数(株)	当事業年度増加 株式数(株)	当事業年度減少 株式数(株)	当事業年度末 株式数(株)
自己株式				
普通株式	1,043,567	324,578	50,000	1,318,145
合 計	1,043,567	324,578	50,000	1,318,145

(変動事由の概要)

- 1 普通株式の自己株式数の増加 324,578株は、取締役会決議に基づく買取りによる増加 321,000株及び単元未満株式の買取りによる増加 3,578株によるものであります。
- 2 普通株式の自己株式数の減少 50,000株は、新株予約権の行使によるものであります。

当事業年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

1 自己株式の種類及び株式数に関する事項

株式の種類	前事業年度末 株式数(株)	当事業年度増加 株式数(株)	当事業年度減少 株式数(株)	当事業年度末 株式数(株)
自己株式				
普通株式	1,318,145	8,767	49,000	1,277,912
合 計	1,318,145	8,767	49,000	1,277,912

(変動事由の概要)

- 1 普通株式の自己株式数の増加8,767株は、単元未満株式の買取りによるものであります。
- 2 普通株式の自己株式数の減少49,000株は、新株予約権の行使によるものであります。

(リース取引関係)

<p style="text-align: center;">前事業年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)</p>	<p style="text-align: center;">当事業年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)</p>
<p>ファイナンス・リース取引 所有権移転外ファイナンス・リース取引</p> <p>① リース資産の内容</p> <p style="padding-left: 20px;">有形固定資産 事務用機器(工具、器具及び備品)であります。</p> <p style="padding-left: 20px;">無形固定資産 ソフトウェアであります。</p> <p>② リース資産の減価償却の方法</p> <p style="padding-left: 20px;">リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。</p> <p>なお、リース取引開始日が平成20年 3月31日以前の所有権移転外ファイナンス・リース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっております。</p>	<p>ファイナンス・リース取引 所有権移転外ファイナンス・リース取引</p> <p>① リース資産の内容</p> <p style="padding-left: 20px;">有形固定資産 同 左</p> <p style="padding-left: 20px;">無形固定資産 同 左</p> <p>② リース資産の減価償却の方法</p> <p style="padding-left: 20px;">同 左</p>

前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)				当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)			
リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引				リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引			
① リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額及び期末残高相当額	取得価額 相当額 (百万円)	減価償却累 計額相当額 (百万円)	期末残高 相当額 (百万円)	① リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額及び期末残高相当額	取得価額 相当額 (百万円)	減価償却累 計額相当額 (百万円)	期末残高 相当額 (百万円)
機械及び装置	268	202	65	機械及び装置	99	63	35
工具、器具及び備品	17	16	1	工具、器具及び備品	3	3	0
ソフトウェア	455	182	273	ソフトウェア	455	273	182
合計	741	401	340	合計	559	340	218
なお、取得価額相当額は、未経過リース料期末残高が有形固定資産の期末残高等に占める割合が低いため、支払利子込み法により算定しております。				同 左			
② 未経過リース料期末残高相当額				② 未経過リース料期末残高相当額			
1年以内			121百万円	1年以内			107百万円
1年超			218百万円	1年超			110百万円
合計			340百万円	合計			218百万円
なお、未経過リース料期末残高相当額は、未経過リース料期末残高が有形固定資産の期末残高等に占める割合が低いため、支払利子込み法により算定しております。				同 左			
③ 支払リース料及び減価償却費相当額				③ 支払リース料及び減価償却費相当額			
支払リース料			144百万円	支払リース料			121百万円
減価償却費相当額			144百万円	減価償却費相当額			121百万円
④ 減価償却費相当額の算定方法				④ 減価償却費相当額の算定方法			
リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。				同 左			
(減損損失について)				(減損損失について)			
減損損失はありませんので、項目等の記載は省略しております。				同 左			

(有価証券関係)

前事業年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式

種類	貸借対照表計上額 (百万円)
(1) 子会社株式	238
(2) 関連会社株式	67
計	305

上記については、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積もることなどができません。したがって、時価を把握することが極めて困難と認められるものであります。

当事業年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式

種類	貸借対照表計上額 (百万円)
(1) 子会社株式	238
(2) 関連会社株式	67
計	305

上記については、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積もることなどができません。したがって、時価を把握することが極めて困難と認められるものであります。

## (税効果会計関係)

前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)																																																				
<p>1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳</p> <p>(繰延税金資産)</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>賞与引当金</td><td style="text-align: right;">85百万円</td></tr> <tr><td>繰越欠損金</td><td style="text-align: right;">402百万円</td></tr> <tr><td>退職給付引当金</td><td style="text-align: right;">213百万円</td></tr> <tr><td>減損損失</td><td style="text-align: right;">101百万円</td></tr> <tr><td>減価償却費</td><td style="text-align: right;">84百万円</td></tr> <tr><td>その他</td><td style="text-align: right;">199百万円</td></tr> <tr><td>繰延税金資産小計</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black;">1,085百万円</td></tr> <tr><td>評価性引当額</td><td style="text-align: right;">△1,085百万円</td></tr> <tr><td>繰延税金資産合計</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black;">—百万円</td></tr> </table> <p>(繰延税金負債)</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>買換資産圧縮積立金</td><td style="text-align: right;">645百万円</td></tr> <tr><td>その他有価証券評価差額金</td><td style="text-align: right;">369百万円</td></tr> <tr><td>繰延税金負債合計</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black;">1,015百万円</td></tr> <tr><td>繰延税金負債の純額</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black; border-bottom: 3px double black;">1,015百万円</td></tr> </table>	賞与引当金	85百万円	繰越欠損金	402百万円	退職給付引当金	213百万円	減損損失	101百万円	減価償却費	84百万円	その他	199百万円	繰延税金資産小計	1,085百万円	評価性引当額	△1,085百万円	繰延税金資産合計	—百万円	買換資産圧縮積立金	645百万円	その他有価証券評価差額金	369百万円	繰延税金負債合計	1,015百万円	繰延税金負債の純額	1,015百万円	<p>1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳</p> <p>(繰延税金資産)</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>賞与引当金</td><td style="text-align: right;">107百万円</td></tr> <tr><td>繰越欠損金</td><td style="text-align: right;">239百万円</td></tr> <tr><td>退職給付引当金</td><td style="text-align: right;">209百万円</td></tr> <tr><td>減損損失</td><td style="text-align: right;">82百万円</td></tr> <tr><td>減価償却費</td><td style="text-align: right;">78百万円</td></tr> <tr><td>その他</td><td style="text-align: right;">192百万円</td></tr> <tr><td>繰延税金資産小計</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black;">908百万円</td></tr> <tr><td>評価性引当額</td><td style="text-align: right;">△908百万円</td></tr> <tr><td>繰延税金資産合計</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black;">—百万円</td></tr> </table> <p>(繰延税金負債)</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>買換資産圧縮積立金</td><td style="text-align: right;">620百万円</td></tr> <tr><td>その他有価証券評価差額金</td><td style="text-align: right;">325百万円</td></tr> <tr><td>繰延税金負債合計</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black;">946百万円</td></tr> <tr><td>繰延税金負債の純額</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black; border-bottom: 3px double black;">946百万円</td></tr> </table>	賞与引当金	107百万円	繰越欠損金	239百万円	退職給付引当金	209百万円	減損損失	82百万円	減価償却費	78百万円	その他	192百万円	繰延税金資産小計	908百万円	評価性引当額	△908百万円	繰延税金資産合計	—百万円	買換資産圧縮積立金	620百万円	その他有価証券評価差額金	325百万円	繰延税金負債合計	946百万円	繰延税金負債の純額	946百万円
賞与引当金	85百万円																																																				
繰越欠損金	402百万円																																																				
退職給付引当金	213百万円																																																				
減損損失	101百万円																																																				
減価償却費	84百万円																																																				
その他	199百万円																																																				
繰延税金資産小計	1,085百万円																																																				
評価性引当額	△1,085百万円																																																				
繰延税金資産合計	—百万円																																																				
買換資産圧縮積立金	645百万円																																																				
その他有価証券評価差額金	369百万円																																																				
繰延税金負債合計	1,015百万円																																																				
繰延税金負債の純額	1,015百万円																																																				
賞与引当金	107百万円																																																				
繰越欠損金	239百万円																																																				
退職給付引当金	209百万円																																																				
減損損失	82百万円																																																				
減価償却費	78百万円																																																				
その他	192百万円																																																				
繰延税金資産小計	908百万円																																																				
評価性引当額	△908百万円																																																				
繰延税金資産合計	—百万円																																																				
買換資産圧縮積立金	620百万円																																																				
その他有価証券評価差額金	325百万円																																																				
繰延税金負債合計	946百万円																																																				
繰延税金負債の純額	946百万円																																																				
<p>2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>法定実効税率</td><td style="text-align: right;">△40.4%</td></tr> <tr><td>(調整)</td><td></td></tr> <tr><td>交際費等永久に損金に算入されない項目</td><td style="text-align: right;">1.2%</td></tr> <tr><td>受取配当金等永久に益金に算入されない項目</td><td style="text-align: right;">△4.4%</td></tr> <tr><td>住民税均等割</td><td style="text-align: right;">4.8%</td></tr> <tr><td>評価性引当額の増加</td><td style="text-align: right;">33.0%</td></tr> <tr><td>その他</td><td style="text-align: right;">△0.6%</td></tr> <tr><td>税効果会計適用後の法人税等の負担率</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black; border-bottom: 3px double black;">△6.4%</td></tr> </table>	法定実効税率	△40.4%	(調整)		交際費等永久に損金に算入されない項目	1.2%	受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△4.4%	住民税均等割	4.8%	評価性引当額の増加	33.0%	その他	△0.6%	税効果会計適用後の法人税等の負担率	△6.4%	<p>2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>法定実効税率</td><td style="text-align: right;">40.4%</td></tr> <tr><td>(調整)</td><td></td></tr> <tr><td>交際費等永久に損金に算入されない項目</td><td style="text-align: right;">3.7%</td></tr> <tr><td>受取配当金等永久に益金に算入されない項目</td><td style="text-align: right;">△2.4%</td></tr> <tr><td>住民税均等割</td><td style="text-align: right;">3.5%</td></tr> <tr><td>評価性引当額の減少</td><td style="text-align: right;">△50.2%</td></tr> <tr><td>その他</td><td style="text-align: right;">1.5%</td></tr> <tr><td>税効果会計適用後の法人税等の負担率</td><td style="text-align: right; border-top: 1px solid black; border-bottom: 3px double black;">△3.5%</td></tr> </table>	法定実効税率	40.4%	(調整)		交際費等永久に損金に算入されない項目	3.7%	受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△2.4%	住民税均等割	3.5%	評価性引当額の減少	△50.2%	その他	1.5%	税効果会計適用後の法人税等の負担率	△3.5%																				
法定実効税率	△40.4%																																																				
(調整)																																																					
交際費等永久に損金に算入されない項目	1.2%																																																				
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△4.4%																																																				
住民税均等割	4.8%																																																				
評価性引当額の増加	33.0%																																																				
その他	△0.6%																																																				
税効果会計適用後の法人税等の負担率	△6.4%																																																				
法定実効税率	40.4%																																																				
(調整)																																																					
交際費等永久に損金に算入されない項目	3.7%																																																				
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△2.4%																																																				
住民税均等割	3.5%																																																				
評価性引当額の減少	△50.2%																																																				
その他	1.5%																																																				
税効果会計適用後の法人税等の負担率	△3.5%																																																				



## (1株当たり情報)

前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)		当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)	
1株当たり純資産額	274.25円	1株当たり純資産額	284.94円
1株当たり当期純損失金額(△)	△9.59円	1株当たり当期純利益金額	14.95円
なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式は存在するものの1株当たり当期純損失であるため、記載していません。		潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	14.88円

1 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前事業年度 (平成22年3月31日)	当事業年度 (平成23年3月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	6,732	7,001
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	6,708	6,981
差額の主な内訳(百万円)		
新株予約権	24	20
普通株式の発行済株式数(千株)	25,777	25,777
普通株式の自己株式数(千株)	1,318	1,277
1株当たり純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数(千株)	24,459	24,499

- 2 1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額(△)及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
当期純利益又は当期純損失(△)(百万円)	△237	366
普通株式に係る当期純利益又は当期純損失(△) (百万円)	△237	366
普通株式の期中平均株式数(千株)	24,765	24,491
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定に 用いられた普通株式増加数の主な内訳(千株) 新株予約権	—	105
普通株式増加数(千株)	—	105
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当 たり当期純利益金額の算定に含まれなかった潜在株 式の概要	平成19年8月10日取締役 会決議 新株予約権 43個 平成20年8月8日取締役 会決議 新株予約権 87個 なお、新株予約権の概要 は「第4提出会社の状 況、1株式等の状況、(2) 新株予約権等の状況」に 記載のとおりでありま す。	—

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

## ④ 【附属明細表】

## 【有価証券明細表】

## 【株式】

銘柄		株式数(株)	貸借対照表計上額(百万円)
投資有価証券	その他有価証券	ウシオ電機(株)	260
		三菱電機(株)	227
		(株)ふくおかフィナンシャルグループ	227
		三菱商事(株)	100
		九州電力(株)	83
		宇部マテリアルズ(株)	81
		(株)安川電機	45
		(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	35
		(株)高岳製作所	35
		(株)西日本シティ銀行	31
		その他(17銘柄)	109
計		2,039,731	1,238

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	前期末残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価 償却累計額 又は償却累計 額(百万円)	当期償却額 (百万円)	差引当期末 残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	5,583	11	5	5,589	3,472	189	2,117
構築物	566	—	0	566	403	12	162
機械及び装置	10,033	68	115	9,986	9,230	243	755
車両運搬具	37	0	—	38	37	0	0
工具、器具及び備品	1,036	6	18	1,024	972	22	51
土地	285	—	—	285	—	—	285
リース資産	3	—	—	3	1	0	2
建設仮勘定	4	87	86	5	—	—	5
有形固定資産計	17,552	173	226	17,499	14,118	469	3,381
無形固定資産							
ソフトウェア	—	—	—	17	11	3	5
リース資産	—	—	—	40	18	8	21
その他	—	—	—	0	0	0	0
無形固定資産計	—	—	—	58	30	11	27
投資その他の資産							
長期前払費用	6	—	—	6	5	1	1
賃貸不動産	3,243	—	—	3,243	1,618	52	1,625
投資その他の資産計	3,250	—	—	3,250	1,624	53	1,626
繰延資産							
—	—	—	—	—	—	—	—
繰延資産計	—	—	—	—	—	—	—

(注) 1 当期増加額のうち主なものは、次のとおりであります。

- |               |      |       |
|---------------|------|-------|
| (1) 建物の増加     | 基山工場 | 6百万円  |
| (2) 機械及び装置の増加 | 飯塚工場 | 16百万円 |
|               | 宇美工場 | 43百万円 |

2 当期減少額のうち主なものは、次のとおりであります。

- |               |             |       |
|---------------|-------------|-------|
| (1) 機械及び装置の減少 | 飯塚工場        | 22百万円 |
|               | 基山工場        | 93百万円 |
| (2) 建設仮勘定の減少  | 各有形固定資産への振替 | 86百万円 |

3 無形固定資産の金額が、資産の総額の100分の1以下であるため、「前期末残高」、「当期増加額」及び「当期減少額」の記載を省略しております。

【引当金明細表】

区分	前期末残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	94	5	63	4	31
賞与引当金	211	265	211	—	265
役員賞与引当金	—	21	—	—	21

(注) 当期減少額(その他)欄の内容は、次のとおりであります。

貸倒引当金 洗替戻入額 4 百万円

(2) 【主な資産及び負債の内容】

① 現金及び預金

区分	金額(百万円)
現金	7
預金	
当座預金	1,320
普通預金	688
外貨預金	60
その他	0
計	2,069
合計	2,076

② 受取手形

(a) 主な相手先別内訳

相手先	金額(百万円)
東レ・プレシジョン(株)	17
(株)千代田テクノ	15
日本ベック(株)	13
(株)瑞光	9
ミタニマイクロニクス(株)	8
その他	107
合計	172

(b) 期日別内訳

期日	金額(百万円)
平成23年4月満期	5
平成23年5月満期	3
平成23年6月満期	43
平成23年7月満期	60
平成23年8月満期	35
平成23年9月以降満期	24
合計	172

③ 売掛金

(a) 主な相手先別内訳

相手先	金額(百万円)
日立金属㈱	462
三菱電機㈱	163
(株)栃木ニコン	151
ウメトク㈱	121
ウシオ電機㈱	96
その他	1,823
合計	2,818

(b) 売掛金の発生及び回収並びに滞留状況

前期繰越高 (百万円) (A)	当期発生高 (百万円) (B)	当期回収高 (百万円) (C)	次期繰越高 (百万円) (D)	回収率(%) $\frac{(C)}{(A)+(B)} \times 100$	滞留期間(日) $\frac{(A)+(D)}{2}$ $\frac{(B)}{365}$
2,601	10,089	9,872	2,818	77.79	98.03

(注) 上記金額には消費税等が含まれております。

④ 商品及び製品

区分	金額(百万円)
金属材料部品	50
電気材料部品	76
超硬材料部品	32
その他	28
合計	187

⑤ 仕掛品

区分	金額(百万円)
金属材料部品	275
電気材料部品	197
超硬材料部品	240
その他	143
合計	856

⑥ 原材料及び貯蔵品

品名	金額(百万円)
パラタングステン酸アンモニウム	202
タングステンワイヤー	196
タングステン粉末	68
炭化タングステン粉末	53
その他	328
合計	850

⑦ 関係会社出資金

銘柄	金額(百万円)
(子会社出資金)	
恩悌(上海)商貿有限公司	124
上海電科電工材料有限公司	398
上海三義精密模具有限公司	143
四平恩悌タングステン高技術材料有限公司	70
(関連会社出資金)	
九江日本タングステン有限公司	16
四平日本タングステン有限公司	0
合計	753

⑧ 支払手形

(a) 主な相手先別内訳

相手先	金額(百万円)
(株)トクサイ	28
大川原化工機(株)	28
オーケーディー(株)	27
(株)熊本精研工業	20
田中貴金属販売(株)	14
その他	40
合計	160



## (b) 期日別内訳

期日	金額(百万円)
平成23年4月満期	52
平成23年5月満期	40
平成23年6月満期	41
平成23年7月満期	26
合計	160

## ⑨ 買掛金

相手先	金額(百万円)
りそな決済サービス(株)	464
田中貴金属販売(株)	48
日本新金属(株)	40
矢野金属(株)	29
(株)昭和電気接点工業所	26
その他	320
合計	929

## ⑩ 短期借入金

相手先	金額(百万円)
(株)福岡銀行	591
(株)三菱東京UFJ銀行	420
(株)西日本シティ銀行	290
(株)りそな銀行	270
(株)佐賀銀行	150
その他(3社)	150
合計	1,871

## ⑪ 長期借入金(1年内返済予定の長期借入金を含む)

相手先	金額(百万円)
(株)福岡銀行	1,026
(株)佐賀銀行	326
(株)西日本シティ銀行	298
(株)三菱東京UFJ銀行	250
(株)みずほコーポレート銀行	118
その他(4行2社)	236
合計	2,257

## ⑫ 繰延税金負債

2. 財務諸表等 (1)財務諸表 注記事項(税効果会計関係)に記載しております。

(3) 【その他】

記載すべき事項はありません。

## 第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	1,000株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 東京都中央区八重洲一丁目2番1号 みずほ信託銀行株式会社 本店証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都中央区八重洲一丁目2番1号 みずほ信託銀行株式会社
取次所	—
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	当会社の公告方法は、電子公告とします。但し、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行います。 なお、電子公告は当社のホームページに掲載しており、そのアドレスは次のとおりです。 <a href="http://www.nittan.co.jp/">http://www.nittan.co.jp/</a>
株主に対する特典	なし

(注) 当会社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができません。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利

## 第7 【提出会社の参考情報】

### 1 【提出会社の親会社等の情報】

当社には、親会社等はありません。

### 2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度 第99期(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)平成22年6月25日福岡財務支局長に提出

(2) 内部統制報告書

事業年度 第99期(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)平成22年6月25日福岡財務支局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

第100期第1四半期(自 平成22年4月1日 至 平成22年6月30日)平成22年8月12日福岡財務支局長に提出

第100期第2四半期(自 平成22年7月1日 至 平成22年9月30日)平成22年11月12日福岡財務支局長に提出

第100期第3四半期(自 平成22年10月1日 至 平成22年12月31日)平成23年2月14日福岡財務支局長に提出

## 第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

# 独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成22年 6月25日

日本タングステン株式会社

取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

指定有限責任社員  
業務執行社員

公認会計士 久 留 和 夫 ⑩

指定有限責任社員  
業務執行社員

公認会計士 内 藤 真 一 ⑩

## <財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている日本タングステン株式会社の平成21年4月1日から平成22年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書及び連結附属明細表について監査を行った。この連結財務諸表の作成責任は経営者であり、当監査法人の責任は独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することを含んでいる。当監査法人は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、日本タングステン株式会社及び連結子会社の平成22年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### <内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、日本タングステン株式会社の平成22年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。財務報告に係る内部統制を整備及び運用並びに内部統制報告書を作成する責任は、経営者であり、当監査法人の責任は、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。また、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。内部統制監査は、試査を基礎として行われ、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果についての、経営者が行った記載を含め全体としての内部統制報告書の表示を検討することを含んでいる。当監査法人は、内部統制監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

当監査法人は、日本タングステン株式会社が平成22年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

---

(注) 1 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管している。

2 連結財務諸表の範囲にはXBRLデータ自体は含まれていない。

# 独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成23年6月28日

日本タングステン株式会社

取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

指定有限責任社員  
業務執行社員

公認会計士 久 留 和 夫 ⑩

指定有限責任社員  
業務執行社員

公認会計士 内 藤 真 一 ⑩

## <財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている日本タングステン株式会社の平成22年4月1日から平成23年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書及び連結附属明細表について監査を行った。この連結財務諸表の作成責任は経営者にあり、当監査法人の責任は独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することを含んでいる。当監査法人は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、日本タングステン株式会社及び連結子会社の平成23年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。



#### <内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、日本タングステン株式会社の平成23年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。財務報告に係る内部統制を整備及び運用並びに内部統制報告書を作成する責任は、経営者であり、当監査法人の責任は、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。また、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。内部統制監査は、試査を基礎として行われ、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果についての、経営者が行った記載を含め全体としての内部統制報告書の表示を検討することを含んでいる。当監査法人は、内部統制監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

当監査法人は、日本タングステン株式会社が平成23年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

---

(注) 1 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管している。

2 連結財務諸表の範囲にはXBRLデータ自体は含まれていない。

## 独立監査人の監査報告書

平成22年 6 月 25 日

日本タングステン株式会社

取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 久 留 和 夫 ⑩

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 内 藤 真 一 ⑩

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている日本タングステン株式会社の平成21年4月1日から平成22年3月31日までの第99期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書及び附属明細表について監査を行った。この財務諸表の作成責任は経営者にあり、当監査法人の責任は独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することを含んでいる。当監査法人は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、日本タングステン株式会社の平成22年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管している。

2 財務諸表の範囲にはXBRLデータ自体は含まれていない。

# 独立監査人の監査報告書

平成23年 6月28日

日本タングステン株式会社

取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

指定有限責任社員  
業務執行社員

公認会計士 久 留 和 夫 ⑩

指定有限責任社員  
業務執行社員

公認会計士 内 藤 真 一 ⑩

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている日本タングステン株式会社の平成22年4月1日から平成23年3月31日までの第100期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書及び附属明細表について監査を行った。この財務諸表の作成責任は経営者にあり、当監査法人の責任は独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することを含んでいる。当監査法人は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、日本タングステン株式会社の平成23年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管している。

2 財務諸表の範囲にはXBRLデータ自体は含まれていない。

**【表紙】**

**【提出書類】** 内部統制報告書

**【根拠条文】** 金融商品取引法第24条の4の4第1項

**【提出先】** 福岡財務支局長

**【提出日】** 平成23年6月28日

**【会社名】** 日本タングステン株式会社

**【英訳名】** Nippon Tungsten Co.,Ltd.

**【代表者の役職氏名】** 取締役社長 馬場 信哉

**【最高財務責任者の役職氏名】** 該当事項はありません。

**【本店の所在の場所】** 福岡市博多区美野島一丁目2番8号

**【縦覧に供する場所】** 株式会社東京証券取引所  
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)  
証券会員制法人福岡証券取引所  
(福岡市中央区天神二丁目14番2号)

## 1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

取締役社長馬場信哉は、当社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであります。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

## 2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である平成23年3月31日を基準日として行われており、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して実施いたしました。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しております。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社、連結子会社及び持分法適用関連会社の全社的な内部統制については、財務報告の信頼性に及ぼす金額的及び質的影響の重要性の観点から必要な範囲を決定し、業務プロセスに係る内部統制については、全社的な内部統制の評価結果を踏まえ合理的に決定いたしました。

全社的な内部統制の評価範囲は当社を含めた4社といたしました。なお、連結子会社6社及び持分法適用関連会社3社は、金額的及び質的重要性の観点から僅少であると判断し、全社的な内部統制の評価範囲に含めておりません。

この全社的な内部統制の評価範囲と選定した4社は、評価対象となる内部統制全体を適切に理解した上で、関係者への質問、関連文書の閲覧等の手続を実施することにより、内部統制の整備及び運用状況並びにその状況が業務プロセスに係る内部統制に及ぼす影響の程度を評価いたしました。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲は、連結売上高（連結会社間取引消去後）の概ね2/3に達している事業拠点である当社を「重要な事業拠点」といたしました。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として売上高、売掛金、たな卸資産、売上原価及び買掛金に至る業務プロセスを評価の対象といたしました。

評価の対象とした業務プロセスについては、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を選定し、関連文書の閲覧、適切な担当者への質問、業務の観察、内部統制の実施記録の検証等の手続を実施することにより、当該統制上の要点の整備及び運用状況を評価いたしました。

## 3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断いたしました。

4 【付記事項】

該当事項はありません。

5 【特記事項】

該当事項はありません。

**【表紙】**

**【提出書類】** 確認書

**【根拠条文】** 金融商品取引法第24条の4の2第1項

**【提出先】** 福岡財務支局長

**【提出日】** 平成23年6月28日

**【会社名】** 日本タングステン株式会社

**【英訳名】** Nippon Tungsten Co.,Ltd.

**【代表者の役職氏名】** 取締役社長 馬場 信哉

**【最高財務責任者の役職氏名】** 該当事項はありません。

**【本店の所在の場所】** 福岡市博多区美野島一丁目2番8号

**【縦覧に供する場所】** 株式会社東京証券取引所  
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)  
証券会員制法人福岡証券取引所  
(福岡市中央区天神二丁目14番2号)

## 1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社取締役社長馬場信哉は、当社の第100期(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

## 2 【特記事項】

確認に当たり、特記すべき事項はありません。



